ては少しもそんな素振りを見せなかつた。そして最後にかういふ調子で斷行するなんかは全く意志の強い女だ、僕よりも強い女だ、僕はどうしても妹を憎くまれない、妹が可愛い、サウロも憎〳〵はない。今度は可愛い妹の婿だ、だがサウロには過ぎた女だ、僕は初めてそれを知つた。尤も今までも僕よりか偉い女だとは思つてゐたが、實際えらい女だ』

かう言ひ終つて兄ケリヤザルは瓶の酒を一息にみんな呑みほした。

（十一）

ナホミは船中の乘合客を見るに、女の一人旅は自分だけであることを發見して、一そう心細く感じた。それで誰か自分の保護者の格に立つてくれるものはないかと目で探した。彼女はほんたうの保護者の必要は感じなかつたけれども、形の上にそれがないと、人々に怪しまれたり、侮られたりするのがいやなので、それを望んだのである。十五六人の乘合客の中で夫婦者と見えるのはハムプリア地方の者らしいのが一組だけで、後は諸國の男の商人だけであつた。彼女はその一人々々の商人を見た。彼女は其中から只一人をのぞく外の人々に對しては目で以て、それをみんな擊退した。その擊退を受けず、反對にそれを迎へてもらつた一人は益々彼女を目で追ふてゐた。この狀態で一

晝夜を過して、翌日の午前となつた。船は兩側に藍色の陸を見て進んだ。右はクプロ島で左はセルキヤ地方の沿岸である。ナホミがタルソの兄のことやパレスチナのサウロのことやをぼんやりと思ふて海原を眺めてゐると、一人の男が傍へ近づいて來るのを感じた。彼女はそれが誰であるかを振返つて見る必要がないほどに、それが誰れであるかを全體の體の皮膚から知覺した。それは彼女が目で迎へた只一人の商人であつた。その商人は他の十數人の人とは頭抜けて人間が優れてゐるやうに彼女には思はれた若い男で、身分や財産や氣位の點がその人間を破廉恥の闘に行爲を進めまさせないやうな正しい人物であると、彼女には推察された。それで彼女の方からして寧ろ彼れの接近して來るのを待つてゐたのであつて、それは異性としてゞはなく、保護者としては充分信頼に足ると考へたからである。彼れは彼女に觸れるやうに傍に座して彼女に言葉をかけた。

『幸い海は靜かで結構でございますね』

彼女はその言葉で初めて知つたやうにして顧み、彼れの顏を見て嫣然と笑つて、目では『遠慮するには及びません、いくらでも進んで近よつておいでなさい』といふ意味に働かせて、彼れを歡迎した。彼れはずつと親しくなつたやうな調子で、

『お嬢さまはお一人でどちらまで？』と問ふた。

『はい、パレスチナ、あのエルサレムまで』と彼女は答へた。

『さうですか、私もエルサレムへ行くのでございますが、それではお供をさせて頂きませう、御婦人の獨旅は無用愼でございますよ』

『え、どうぞ、私からもお願ひいたしますわ。』

『でも、あなたはまあどうしてお一人でそんな遠い旅をなさるんですか、その御勇氣に感心いたしましたよ』との彼れの問に彼女は豫め防禦線でも張つて置く方がよいとでも思つたものか、

『はい、私には末の約束までした男がございまして、それが今エルサレムにゐるので、親や兄弟から離れてそこへ參るのでございます』と言つて、能く働く目で男に同情を求めた。

男は少なからず感動させられたと見えて、

『さうですか、それは……、よろしうございます、私があなたをお引受けいたして、無事にあなたの其お方にあなたをお逢せいたしませう』と言つて、彼れは自分の如何なる者であるかといふことを彼女に知らせて安心させた。

彼れはシリヤのダマスコ市の有名な職物商アナニアである。彼れは其地方の偶像を排してイスラエル人のエホバを拜してゐる紳商であつて、地中海沿岸の諸都市と廣く取引をしてゐるため、一年に

二度くらゐは各取引先を遍歴することにしてゐるのだ。彼れは早く父に別れて若くして一家を支へるやうになつたので、まだ年は二十九歳でしかなかつた。彼れには妻があつたのだが、一人の女の兒を産んで直ぐ産褥の中で死んでしまつたので、彼れはいま獨身である。パレスチナのエルサレムは殊に自分の信仰するエホバの神殿のある所なので、年に二度の出張にも其處には長くとどまる關係上、エルサレムのことは能く知つてゐるのだ。

彼れと彼女とは直に親密になつて、彼女には立派な保護者ができたわけである、他の人々は目をそばだてたが、相手が自分たち仲間よりか卓越したアナニアなので、それに對してどう非難も侮辱も嘲弄もしてみようがなかつた。船は是等の人々と多くの貨物を載せて海の上を辷つて行つたが、風がさつぱりと止んでしまつたので帆がきかなくなつて、奴隷が長い楫で船をかいた。

『こらあ悪いしらせだな』と海に馴れた一人の商人が言つた。

その内に風がまるで反對の南西から逆に吹き出して來た。後の小亞細亞を横切つてゐるクウロス山派の方から黑い雲が出て來た。船員は縱横に騷ぎ出して來た。不安が乘組員一同の上に襲ふて來た。その内に空は一面に暗くなり、南西の海上から浪を立てゝ目に見えない、世界をその翅で覆ふほど大きな魔の鳥が大速力でかけて來て、船を呑みつくさうとするやうな感じが突進して來たかと

思ふと、一ぺんで船をひつくり返すかと思はれる大暴風が襲來したと同時に、その浮足たつた船と海とを叩き鎖めるやうに天上から大雨がどうと降つて來た。船は上下左右に水が入つて、海の底を潛行してゐるのか、或は天の雲の中に浮き上つて鳥のごとくに漂ふてゐるのか、乘組の人々にはそれらが一切の心の轉倒となつて、もう周圍をわきまへる力を失はせてしまつた。船は逆に風のために吹き流されて、シリアのアンテオケの港であるセルキヤの沿岸に近よつて來たが、遂に岸の暗礁に打ち上げられて破れて覆つてしまつた。

ナホミは暴風雨が來てからのことは何んにも知らなかつた。たゞ自分のそばにはダマスコの紳商アナニアが介抱してゐてくれることを知つてゐたが、彼女はこの難場に於ても『いまおれの傍にゐる男がサウロであつたら……』と思つて、それがサウロであるかの如く假りに考へると、そのやうな氣がするので、船が動搖するための苦しさに紛らせて彼れにしつかりと獅嚙ついたりした。その他の事はどんな事がおきたか、彼女は知らなかつたが、ふと冷い感じと息くるしさと穴の底へ落ちたやうな感じがし、自分の身がくる〳〵と廻つてゐるやうなので、たゞ『これは大變だ』と思つて、無暗と手と脚とを動かし、浮び上がらうとし、また心では『いま一度世の中を見たい、サウロを見たい』といふ氣が起つたので、どこともなくに目をぱちりと開いてみると、自分が海の中に

浪に揉れてゐることがわかつて『さあこれは困つた、どうしても一ぺんサウロに逢はねば死なれない』と非常の力を出して浪と爭つた。

『これに、これに、早く、つかまつた』と叫ぶ聲が微に聞えた。

それが彼女にはサウロの聲のやうに考へられたので、心の中で『はい、只今』と言つて、その方に顏を向けると、男が一人、大きな木につかまつてゐるので、彼女も急いでそれに取りすがり、後はもう何んにもわからなくなつてしまつた。セルキヤの漁師どもが海岸に出て難破船を見物してゐた。そこへ遭難者が五人うち上げられた。その中に一本の丸太にアナニアとナホミとが縋つてゐたのがあつた。彼等五人の遭難者はみんなセルキヤの漁師の手によつて救ひ上げられ、介抱を受けた。ダマスコの紳商アナニアとナホミと他の三人とはみんな健康を快復した。そこに止つてゐたのは三日間であつた。紳商アナニアは身に一物も無くなつたが、彼れは用意周到に金囊を腰に固く結びつけて、萬一の僥倖の後のためを慮つて置いたので、彼女及び他の三人に對して急場の用を辨じ、命をたすけたセルキアの漁師には厚く謝禮をすることが出來た。他の三人の商人はまた便船を求めて目ざした航路に出ると言つて、そこにとゞまつた。ダマスコの紳商アナニアは一先づ故郷ダマスコに歸つて新に出直すことにした。

『もしナホミ様、お名前を呼ぶことを許してくださいよ、私はダマスコへ一旦歸らうと思ひますが、あなたも私と一しよにダマスコへお出でになつては……、それから陸をエルサレムまで私がお供をいたしますが?』とアナニアは彼女に問ふてみた。

『私は一日も早く……』と彼女は言つて、他の三人の商人と行動を共にしたいやうな素振りを見せたので、アナニアは心をあせらして、

『失禮ですが、あなたはエルサレムへお出でになつても、あなたの其お方の居所を御存じでねらつしやるのでございますか』と問ふてみた。

『いゝえ、あたし存じませんの』と彼女は答へた。

『それぢや仕方がありませんぢやございませんかゝ、エルサレムも廣うございますからね。まあ私の言ふことを聞いて、一旦ダマスコへいらつしやい、私がきつとお供してエルサレムへ參りますよ、惡いことは申しません』と彼れは彼女を自分から放したなげに言つた。

彼女も考へた。この親切なしつかりした男から離れては自分の身が心もとないと考へたので、よしや少しは時間が遲れても、その方が安全で、結局はそれが一ばん早くサウロに逢はれることかも知れぬ、また一年半の間も我慢した今日、一月や二月サウロに會ふのが遲れたとて、確かで安全の道

をとつた方がよいと思ひなほしたので、

『ではお連れください』と言つて、相手の男の心を亂させるやうな嬌艶な素振りをして頭を下げた。

（十二）

ダマスコの紳商アナニアは驢馬の背に乘つた。ナホミのためには箱車のついた驢馬を雇ふて、彼女を綺麗な布をたれた箱車に乘せた。そして他の三人の商人やセルキアの漁師の見送りと別れてダマスコ街道を朝早く出發した。暫くの間はビニシヤの海岸を進んで、それからシリヤの國境を越えて、アバルヘテマアカの宿にとまつた夜のことだ、明日はダマスコへ着くことが出來る夜のことである。晩餐にアニナアは葡萄酒を彼女にも進めて言つた。

『もう明日はダマスコですよ』

『さやうでございますか』と彼女は言つて、少しく瘦せた顏に淋しい笑を浮べて、葡萄酒の杯に口をつけて僅かを呑んだ。

『失禮ですが、今まで聞かう〳〵と思つてをりましたが、あなたの其お方とどうしてそんなに別

れ〳〵になつたんでございますか』とアナニアは彼女に問ふてみた。

彼女は彼れが非常に親切な理解のある確かな人間と見てゐたので、この人に一切を打明けて力になつてもらつた方がいゝと考へた。それでサウロと自分との關係をこまかに物語つた。アナニアはそれを聞いてゐる内にだん〳〵驚きと感嘆とを增して來、哀れを催して來た。

『それは實にお氣の毒です、さうですか、ではそのお方の居所はわからないんですね』と彼れは彼女に問ふた

『え、でもきつとエルサレムだらうと思ふんでございますの、イスラエルの神樣のことを研究したいなんかと言つてゐたから……』

『承つても仕方がないか存じませんが、お名前をお聞かせくださつたら、私はエレサレムにはいろ〳〵知人もありますから、或はお探し申すことも出來ませう、キリキヤのお方であれば、猶か探し易うございます』

『あの、サウロと申します、タルソの者でございますから、もしエルサレムにゐればタルソのサウロときつと言つてゐませうよ』

これを聞いたアナニアは何か思ひあたつた樣子であつたが、それは押し隱して、

『御婦人ひとりで、遠い海をお渡りになつての旅、御身分も相當におありのあなたがお供もなく只一人、これは何か深い仔細のあることゝ思つてゐましたが、お話を承つて私はほんとにあなたがおいたはしくて……、あなたがそのサウロといふお方のおたよりを一年半もお待ちになつてゐられるお心持、遂にこらへ切れなくつて跡をたづねに家を捨てゝお出でになつた御眞情、なんと申していゝか、實に涙のこぼれるほど哀れなお話です。しかしあなた、よく心を落ちつけて考へてみて御覽なさい、そんなにしてお別れしたお方が一年半もたつた今日に到つても、ちつとも使りをしないといふことは變なことではありますまいか』と言ふと、ナホミは不安さうな目を上げて、

『變なことゝ申しますと？』と問ふた。

『それですか、たとへばお命にさはりがあつたとか、またはお心がお變りになつたとか』

『いゝえ、そんなことは有りませんわ、そんなことは有りませんわ、心が變るなんかつて、そんな輕薄なお方ぢやございません、……でも何か災難か、病氣で……、私だつてこんな目に遭ひましたから、もしや？』と彼女は言つて『まあ、どうしよう』と急にうろたへて來た。

そのいた〳〵しい樣子を眺めてゐたアナニアは漸く決心したかのやうにして語つた。

『私はサウロ殿がお命に別狀があるとは思ひません、それは御安心ください。或は別人かは存じませんが、學者ガマリエルの門下にゐて、今は立派な若い學者となつてゐるタルソのサウロといふ人がエルサレムにゐます。一年しか修業しないのにラビの稱號を得たサウロの達識に人々は驚いてゐます。昨今タルソから來たといふことゝ、その名がサウロであることゝの二つで、私にはそれがあなたのお尋ねのサウロ殿ではないかと存じますが……』

これを聞いた彼女は丁度今回の難破船に乘つてゐて、高く雲の上にあげられたかと思ふと、急に海の底へ沈み込むやうに感じた時と同じやうに、ぐうと空に高く上げられたかと思ふや、どさりと地獄の底に突き落されたごとくに覺えて、ぢつと默り込んでゐる内にだん〳〵氣が遠くなつて、後は何んにもわからなくなつてしまつた。それを見てゐたアナニアは大に驚いて、

『ナホミさん、ナホミさん』と呼んだけれども答へがないので、彼れは宿の下僕を手傳はせて彼女を抱きかゝへて寢臺の上に寢せ、自然と快復するのを待つよりほかに方法を知らなかつた。

彼女はふと目を開いて見ると、眼前に眞直な十キウビットほどの幅さの平な道路が少しく登り坂になつて何處までも續いてゐる。彼女はその道が何處へ通じてゐるのかを見定めるために瞳をこらして遥かの道の果を眺めようとした。すると一段と高いところに立派な宮殿のごときものが見え

る。彼女はまだ一度も見たことも、考へたこともないと思つてゐるのに、それがエルサレムの神殿であるといふことを知つた。しかしそれでは自分はいま何處にゐるのかはわからないのである。その内にその道のまん中に一人の人物が現れたので、それが誰であるかを知らうとすると、まだ能く見ないのにもうその男がサウロであると思つた。彼女は『あら、サウロさま』と心の中で叫んで追ひかけたが、膝ががく〳〵して早く歩けない、氣が揉めてしようがない、痛い膝を我慢して無理に追ふて行つた。すると多くの兵士が出て來てサウロを殺さうとするのを彼れはそれと能く闘つてみんな打ち亡ぼし、どん〳〵と神殿めがけて登つて行くので『サウロさま、待つて、待つて』と彼女はその跡を追ふと、サウロが振り返つて彼女に「おいで〳〵」をするので、彼女は膝が折れては地にすはり込むのを身を起しては走る。サウロは神殿にたうと着いて、その高い屋根の上に登つた。彼女も驚くほどの力が出て飛び上つたが、その足が屋根の庇につくか着かないに、どんとサウロのために突き落されて『あつ』と叫んだ。

『おゝ、氣がつきましたか』と傍に人の聲がするので、彼女はその方へ振り向いて見ると、そこにはダマスコの紳商アナニアがゐたので、彼女は不思議に感じたが、すぐ自分がアナニアからタルソのサウロといふ學者がエルサレムにゐることを聞かされてから、後のことがわからないのに、今

は寢臺の上に寢て、側にアナニアが附いてゐる。彼女は「はつ」と驚いて顏を赤らめて上體だけを起して膝を組みなほす時に、自分の兩膝が痛いことを知つて、いま自分が神殿の屋根からサウロのために突き落されたことに氣がついたが、それは一たいどうしたことだ、夢だらうかと考へた。そしてそれが夢であるといふことに決したけれども、その夢が普通の夢でないやうに思はれ、自分の慕ふサウロのことに就て何か關係のある夢ではないかと考へて、さてそんなら夫れは果して善兆か惡兆かと思ひわずらつた。

『どうですか、お心持は?』とアナニアが再び言つた。

『え、もう宜しうございます』と彼女は浮の空で答へて、猶ほ自分の考へに心を傾けた。

彼女は、學者のタルソのサウロといふのがどうしても自分の求めるサウロに違ひないと定めた。そして今の夢を土臺としてサウロの心を忖度してみた。どうして彼れは使りをしないのか、アナニアが言ふやうに心が變つたのか、いや〳〵そんなことはない、夢でも私を「おいで〳〵」と招いだもの、だが私が屋根の上に登つたら、どしんと突き落した、それは何を示してゐるのか、私に愛相をつかしたのかどうか、彼女は迷つた。しかし彼女は悟つた、それは自分が夢なんかを土臺として物を考へるから惡いのだ、たゞサウロの心と自分の心とだけを種にして考へねばならぬものだと思

ひ直した。それではその心から押して、どう判斷するか、彼女は心に堅く決するところがあつた。

彼女は首を上げてアナニアを見た。すると彼れが、この女に再びサウロの問題を出してもよいか、惡いか、問題を出してまた氣を失はれては大變だと、それを不安に思ふて、どうしようかと迷つてゐるやうな樣子をしてゐるのがわかつたので、彼女は自分の方からその方の問題を出した。

『アナニア樣、きつと私のサウロ樣でございます、私はかうなつてはエルサレムへ參ることも出來ませぬ、と言つて、今更おめ〳〵と歸へることも出來ませぬ』と言つて、彼れの目を見た。

アナニアはその目を見て、溺れる者に手を貸してやるやうな調子で、

『私のところへいらつしやい、私のところへね、エルサレムのサウロ殿の樣子がわかるまで、私はすぐ調べて差上げます、ダマスコに暫く足をとめてゐらつしやい、私が確に御保護をいたしますよ、決して御心配なく』と言つた。

彼女は上體を前にかゞめて低い聲で囁くやうに答へた。

『どうぞ、私ほんとに行き場が無いんですの』

(十三)

ナホミは紳商アナニアに伴はれてシリアの大都市ダマスコに翌日の夕方ついた。このダマスコはレバノン山下にある都城であつて、附近一帶パレスチナを掛けて支配する羅馬より派遣された總督のゐる所だ。人口は十五萬もあり、諸國の商人が入り込み、大市場が開かれる。アナニアはこの市に於ては屈指の大商人であつた。ナホミは彼れの家に入つて、その家の宏壯で裝飾の綺麗なのに驚かされた。家族は主人アナニアと二三歳の女兒と老母とだけで、後は乳母と男女の召使が五六人あることがわかつた。その老母から乳母、召使にいたるまで、ナホミが後日は女主人になるものと思つてゐるらしい待遇の仕方であるが、主人アナニアがその誤解を解かうとはしないことなどを見て彼女はアナニアの心を疑はざるを得なかつた。彼れはどういふつもりで私をこんなに保護してゐるのか、たゞ氣の毒であるといふところからのみ世話してゐるのではないと思ふ節があるのを知つた。もしそんなやうな事があつたらどうしようか、さうなつたら私はこゝにはゐられない、こゝを出たらどこへ行かうかと考へると、はたと當惑してしまつた。どうかそんな事がないやうにと彼女は心に念じた、そんな機會や隙を見せないことに努めねばならぬと心を引しめた。

彼れの家はその市に於ても小高い所にあつたので、彼女は自分の部屋として與へられてある部屋に只一人さびしさうに窓から外を眺めてゐると、レバノン山が紫色になつて、夕日の光を受けてゐ

るわびしい秋の色を現してゐるのに何んとはなしに涙を催して來た。彼女の心には一時もサウロのことが浮ばぬ間はなかつたけれど、それは彼れを疑ふの念ではなくて、どういふわけで便りをしなかつたのかといふ理由を考へることであつた。サウロのやうな人が遠く離れたために一たん互に心を契り合つたものを捨てるといふやうな輕薄なことをする人物ではないと堅く信じてゐる彼女にはその方面のことを疑ふのではなく、彼れが彼女に便りをしないのは其處になにか深い理由があると思つて、その理由が何んであるかをいろ〳〵と想像してみたのである。そしてそれによつて自分も何んとか身の處置をとらねばならぬ、こゝは徒に悲しみに心を挫いたり、戀しさに見苦しい態度をとつてはならぬと、以前もつてゐた男らしい心を奮ひ起したのである。それから彼女は『それにしても、第一の問題はアナニアの手によつて、エルサレムの學者タルソのサウロが果して自分の慕ふサウロであるや否やを知る必要がある』と考へて、アナニアが早くその事を運んでくれゝばいゝがと思つた。彼女はそんなことを考へながら、レバノン山を眺め、赤く燒けた空を見上たりしてゐると、だん〳〵心がうつとりとして來て體が燃えて來るやうな感じがし、曾てハロン山でサウロと抱き合つた時に感じたやうな恍惚とした氣持になつて行くのを覺えて、これはどうしたことかと思つた。その内にその血の湧くやうな、息のつまるやうな感じは鼻から來るやうに思はれて、その方へ

心を向けてみると、一種の濃厚な心をそゝられる匂が襲ふて來るのであることを知つて、窓の近くを眺めると、今迄うつかりしてゐたが、そこは庭園のやうな畑のやうな空地にシトロンの花が一ぱいに咲き亂れて、甘ずつぱい芳香はそれから來る匂であつたのだ。彼女は此時ひし〳〵とサウロが戀しくなつて、眼前にサウロの姿を思出し、心の中でそのサウロをしつかりと抱きしめた。そして身も心も消え入るやうな快さを感じて行つた。彼女は窓のカーテンを兩手でしつかと握つてそれを胸に押しつけて、いくたびか暫く絶えてゐた接吻をなした。

その時なんとなく自分の背後の方で何かの觸感があつたので振り返つて見ると、入口のところにアナニアが立つてゐたのだ。そのアナニアの目を見た時に彼女は『これは困つた』とすぐ直感して、あわてゝ立ち上つて身を引きしめた。アナニアは彼女の態度を見て、自分の或心を省みたものか、樣子を改めて來たので、それを知つた彼女は安心して彼れを迎へ入れた。アナニアには何事か心に惱んでゐるものがあるかのごとく、悶々の情があり〳〵と見えた。

『あなたは、甚だ勝手がましいことですけれど、いつあの事をお調べくださいますのですか』と彼女は問ふた。

『そのことでお邪魔をいたしに參つたんですが、明日私はエルサレムへ參りまして、二週間の後

には歸つて參ります、それでサウロ殿があなたのサウロであるか、どうか必ず調べて參りますから、お淋しくてもお待ちをねがひます』とアナニアは言つた。

『どうぞお願ひいたします、決して淋しいとは存じません、却つてたつた一人でいつも居たうございます』と彼女は言つて、暗に『私を一人こゝに置いてくれ』と「彼れ追拂ひ」の謎のごとくに見せたので、アナニアは弱々しい氣の毒な樣子をして部屋を去つた。

彼れが去つた後で彼女は學者サウロを自分のサウロであるかどうかに就て考へたが、どう考へてみても、それが確に自分のサウロに違ひないと信じた。そこで彼女はアナニアの報告を待たなくても、自分が決心した或方法をとることにした。彼女は翌日アナニアを送り出した後に、タルソの驛遞司のクーメに當てゝ長い手紙を書いた。

タルソの驛遞司に務めてゐるクーメはナホミの兄ケリアザルと共に彼女の航海の安全を祈つてゐた時に、一昨日のあの暴風雨のためにナホミが乘り込んだ便船第二コリント號が難破して、船體は碎けてイツソス灣の近くに打上げられたといふ報告を受けた。彼れは仰天して、それでもと乘組員の消息を調べたけれども、人間に就ては何等の報告がなかつた。彼れは役所の事務をそつちのけに

して、兄ケリアザルのところへ駈けつけて、

『おい、大變だ、第二コリント號が難破した』と知らせた。

兄ケリアザルはその報告の意味を初めは解することが出來なかつたが、暫くしてクーメの樣子からして、その船がナホミの乘り込んだものであることを悟つた。彼等二人はそれつきり何んにも言はずに、二人が互に兩手を握り合つて涙を出さない悲痛な顏をして長い間そのまゝであつた。それからと言ふものは兄ケリアザルは全く打ちのめされたやうに心も肉體もへたばつてしまつた。それから一ヶ月ばかり過ぎた或日にクーメが再びケリアザルが一日ふさぎ込んでゐる部屋に現れた。その顏は嬉しげであつた。しかしてそれは痛ましさを含んだ嬉しさであつた。彼れはケリアザルに何んにも言はず、一通の書面、それは重く音をたてゝ臺に落ちたほどの重みのあるものである書面を示した。ケリアザルはクーメの顏とその書面とを見かはしてゐたが、上封の字が女文字で、しかもそれが忘れることの出來ない妹ナホミの手蹟なので、すりが物を奪ひとるやうにしてそれを取つて手を慄はして目玉を飛出して讀んで行つた。

クーメさま　　エルルの第九日

私はいまシリアのダマスコの大きな商人であるアナニアといふ立派な人の家にお世話になつてゐ

ます。私がどうしてそんな所へ來たか驚きなさいますでせうが、その人とは船の中で懇意になりました上に、船が難破して、私とそのお方はセルキヤの海岸に幸ひにも打上げられ、そこの漁師どもにたすけられましたので、そのお方に連れられてダマスコに來たのでございます、そして私が今でもそこにゐるのは、そのアナニア樣からサウロ樣のことを聞きまして考へるところがあるためであります、聞けばサウロ樣はバレスチナのエルサレムへ行つて後、今年の春から學者のタルソのサウロとして大變有名になつてゐるさうでございます、タルソのサウロと言へばあのサウロ樣にきまつてゐます、そんなになつてゐながらサウロ樣はなぜお便りをなさらないのでせう、一ヶ年半も、私がタルソを去つた後でも矢張りお便りはありますまいと存じます、どうしたわけなんでございませう、でもそれは決して私をお捨てになつたせいではないと思ひます、あのサウロ樣がそんなことをなさるやうな薄情のお方とはどうしても信じられません、これにはお便りをなさらぬ深いお考へがあるものと存じます、それで私はもう一年を待つ考へでをります、何かお考へのあるサウロ樣のところへ、今わたしが押し掛けて行くことは、或はサウロ樣にとつて御迷惑なことになるかも知れないと思ひますし、またそれでも私を萬一にもお捨てになつたものとすれば、そんなところへ私は參ることは、たとひ焦れ死に〻死に、怨み死に〻死んでもいやでござ

います、サウロさまは必ず何か譯があることで、またいくらわけがあつても、一年二年三年とお便りをなさらぬといふことは、私をお捨てにならぬ以上は決してないことゝ私は思つてゐますから、いま一年まつ内には必ずお便りがあるものと信じます、そのお便りはあなたのところに參ることは當然なことでございますから、私はあなたに私の居場所をお知らせして置くために、この手紙をあなたに差上げるのであります、なぜタルソへ歸つて來てゐないかとあなたは仰しやるかも知れませんが、あんなにして兄に叛いて出て來た私ですもの、どうしておめ〳〵歸られませう、そして歸つてもまたサウロ様に會ふために出奔しなければならぬことがあつては、兄に苦しい思ひを再びさせねばならぬと存じますので、それでダマスコにとまつてゐるのでございますよ、それからくれ〳〵も申して置きますが、サウロさまからお便りがあるまでは、たとひ今サウロ様の居所がわかつてゐましても、私の書いた七十二通の手紙を決して送つてくださいますなサウロ様の考へを亂すやうなことがあつてはなりませんし、また萬が一にも私を捨てたものとすれば、捨てられた男のところへ私の眞情をこめた手紙などを見せるのはいやでございますからです、どうぞお願ひいたします、兄はどうしてゐますか、考へれば氣の毒でなりません、兄のことを思ふと私はせつなくなります、どうぞ兄もあなたもお達者で、いつかは會つて嬉しく笑ふこと

の出來ることを祈ります、あゝ、どうしてこんな異邦の空をたゞ一人して眺めねばならぬやうになつたことでせう、考へれば誠に人の一生といふものは不思議なものでございますね、これからもどんなに成り行くことか、末おそろしい氣がいたします。

これを讀んだ兄ケリアザルは悅んでいゝか、悲しんでいゝかわからなかつた。しかし妹が生きてゐたことは悅ばねばならぬと、無理に悅ぶやうな悅びを顏に現したが、クーメを見て、

『おい、クーメ君、サウロは妹を捨てたのだ、捨てたのだ、あんなにまで穴の中へ引つ張り込んでゐながら、突つ放すとは殘酷だ、あんまりひどい、けしからぬ奴だ、あんな奴は生かして置いては……、ようし、おれは是れからエルサレムへ行つて、奴を叩つ殺してやる、その罪を責めて責めて責めつくして、それから殺してやる、おれも死ぬ覺悟だ』と言つて、血相を變へて立ち上つた。

『おい〳〵、ケリアザル君、君は到底學者サウロの敵ぢやないよ、……君は全く妹君より駄目な男だね、その手紙をよく見たまへ、ナホミさんの態度、ちつと見ならつたらよからうぜ』とクーメは冷かに出て、ケリアザルの激昂を鎭めようとした。

（十四）

ダマスコのアナニアは二週間を過ぎたけれども歸つて來なかつた、三週間目に漸くエルサレムから歸つて來た。ナホミはほんたうに悅んで彼れを迎へた、それは學者サウロのことを聞かれるための悅びで充たされてゐるやうに見えた。しかしナホミは彼れの顏や態度からして以前に見えなかつたものが見えて來てゐる、寧ろ以前とは全然ちがつた人間にアナニアがなつてゐることに氣がついた。殊に著しく違つたと思はれるのは、彼れが彼女に對する心持や態度の上に於て一變したことである。以前にはどうも油斷のできない心持や態度が彼女に向つて注がれて、彼女は常に不安と氣の毒な思ひとに惱まされてゐたが、今度エルサレムから歸つて來た彼れにはそんな點はとり去られて、單に慈愛とか親切とかの心からして彼女に對してゐるやうに彼女には感じられたので『これは一體まあどうしたことか』と怪しみながら、また悅んで、彼女は兄に對するやうな心持で彼れの身の廻りのことを何にくれとなく親切に世話をしてやつたので、アナニアもまた『これは一體まあどうしたことか』と思つて恐縮してゐるやうに見えた。

彼れは夕飯の時にはたゞエルサレムや道中のことの面白い見聞などを物語つて家族を樂しませてゐた。彼れが話したことの中にこんなのがあつた。エリコからヨルダン河に沿ふてさかのぼつて來る時のことだが、二十四五歳の若い男が殆ど裸であるほどにぼろ〳〵になつた着物を着て、髮を麻のやうに振り亂したのが『あア、あア』と天上を向いて叫び、兩手を高くさゝげて駈けゝゐるのであつた。何をしてゐるかと能く見ると、山鳩を追つかけてそれを捕へようとしてゐるのだ。彼れは『あア、あア』と叫んで何處までも追つかけて行つてゐたが、天上ばかり見て足許を見ないものだから、たうとヨルダン河の淀んでゐた淵に落ち込んで溺れて死んでしまつた。またガリラヤで見たことであるが、八歳ぐらゐの痩せた青い顏色した男の兒が母親と一しよに旅をしてゐたのにアナニアは會つた。その子供が始終「ひよう、ひよう」と息するたんびに笛のやうな音をさせてゐるので不思議に思つて聞いて見ると、いまから二年ばかり前に笛を口の中に入れて吹いて遊んでゐる內にどうした拍子からか、それを喉の方へ吸ひ込んでしまつて、喉の中にとまつてもう出なくなつたんだ。それで息を吸ふ時にはなんともないが、息を出す時には「ひよう、ひよう」と笛の音がするのだといふわけであるのだ。アナニアがいろ〳〵物つ語た中でナホミはこの二つの話を一ばん心にとめてゐた。アナニアは食事が濟んでから自分と彼女との二人つきりになつてから漸く用談にとりかゝつた。

『ナホミ様、私共の考へたとほりであります、學者サウロといふのは今から二年前の即ち昨年の春のまだユダヤの過越祭が始まらない前の頃エルサレムへ來て學者ガマリエルの門人に住み込んだタルソのサウロといふ者ださうでございます。その年の前年の暮れにタルソを出てカイザリヤに暫くゐて、それからエルサレムへ來たんださうでございますよ。だからもうあなたのお探しになるサウロ殿に違ひはないと存じます』とアニナアが言ふと、彼女はそれを引取つて、

『もうそれに間違ひはございませんわ、サウロ様です、え、さうです』と彼女は言つた。

『それであなたに伺つたら或はわかるかも知れませんが、そのタルソのサウロといふ人は今では師のガマリエルよりも人々に達識の學者として尊敬せられ、澤山の門人を持つて、それが祭司やパリサイ派、サドカイ派、民の長老なんかといふ連中からも恐れられ、敬まはれてゐるさうですが、世間に不思議に思つてゐるのは、タルソあたりから出て來たばかりの異邦人が二年も立たぬ内にエルサレムの最高の學者にまでなつたといふことです。あなたのそのサウロ殿といふお方は一たいどんなお方でございますか』とアナニアは問ふた。

『さう申すのも憚り多いことのやうに存じますけれど、サウロ様はタルソにゐらつしやる時でも、まるつきり世の男とは違つて、とつ離れてゐらつしやいました、そして學者のニホヤキンと

仰しやるお方を大叔父に持つて、幼い時から學問をなされて、近頃になつてはイスラエルの經典なども研究してゐられたやうでございました』と彼女は答へた。

『あアさうですか、それでわかりました』とアナニアは言つて、何か考へてゐたが、

『ナホミさん、こゝに一つ疑問があるのですが、それをあなたがどう御解釋なさらうとも、それはあなたの御推量にまかせますことがありますよ。それはサウロ殿が立派な學者になつたなら、妻帶して一家をなすべきであるのに、今でも獨身で學者ガマリエルのところで寄食してゐられることでございます』

これを聞かされたナホミの能く働く目は異様な光を帶びて來た。彼女はそれを自分の都合の好い方へ解釋を持つて行つた。彼女は前からの自信をます〳〵高めて、自分の推察どほりサウロは彼女を見捨てたのではなく、これには何か深い仔細があるのだといふことは、今のアナニアの話からも一層それの信念を增したのである。彼女は嬉しさに體が葡萄酒を少しく呑んだ時のやうな氣分になつて來た。サウロがさうして獨身でエルサレムにゐるんだもの、自分だつてダマスコにもう一年くらゐは淋しくても辛抱してゐるが當然だと考へて、彼女の心はすつかり落ちついてしまつた。

『ナホミさん』とまるで違つた聲と調子とでアナニアが呼んだので、彼女は「はつ」として彼れの

顏を見上げた。

アナニアは非常に眞面目な嚴肅な顏に變つてゐた。彼れは腰を掛けてゐて前の兩膝を揃ひ、その上に兩手を並べて載せ、頭を下げて言つた。

『私は前の私とすつかり變つてしまひました、そして私はあなたに申上げなければならぬことがございますが、先づ私が前の私を無くして新しい私に生きて來たわけからして申します。それは私がイエス、キリストによつて生れ變つたからであります、かう申してもあなたはおわかりではございますまいが……』と言つて、イスラエルの神のこと、彼れの復活、昇天から使徒たちの活動のことや、その迫害される有樣などを語つて、また言葉をつゞけた。

『そして私は使徒のペテロによつて、洗禮されてイエス、キリストの名によつて清いものとされました、私はこれからこのダマスコを神の教會としたいと考へてゐます』

彼女はこの事を聞いてから、直ぐ考へをサウロの方へ持つて行つた。その新しい勢ひを以て起つて來たイエス、キリストの教とサウロとはどういふ關係にあるか、その學者のサウロが自分のタルソのサウロであれば誰れよりも先にそのイエス、キリストの下に走せ參るものゝやうに彼女には思はれたのに、第一にそのイエスを十字架にかけたのが、祭司や學者やなんかであるとか、今でもそ

のイエス、キリストの名によつて何かする者を迫害するのも、その祭司や學者であることを聞くと、それがどうも不思議の現象のやうに思はれて、サウロに就てもさつぱり見當がつかなくなつた。彼女がこんなことを考へてゐると、自分の手をとつて前に跪いた者があるので、びつくりしてそれを見ると、それはアナニアであつた。けれどもそれは決してみだらな態度を以てなしてゐるのではないことを知つたものだから、たゞ驚いたゞけで、それから避けようとはしなかつた。

『ナホミさん、私はあなたに謝罪せねばなりません、どうぞ私に一切を言はせてください。私は船の中からもうあなたを只の心で見ることは出來ませんでした、あなたをかうして御保護いたしましたのにも、淫慾の心をもつて對してゐたのでございました、私は絶えず心の中であなたを汚してゐました、どうぞお宥しください。しかし今はもうその心は洗ひ清められました、主イエス、キリストの血によつて洗ひ清められました。そして今ではほんたうの心から私はあなたを自分の妻に欲しいと存じてゐます。いゝえ、その心は元の淫慾の情を以してゐるのではございません、決してあなたを汚したり、迷惑かけるやうな心をもつてはゐません、あなたがサウロ殿を思ひなさるお心を更に妨げようとは存じません。私はたゞあなたが私の方へお心をお向けになる時期を氣長に待つてゐます、決してあなたに御迷惑になるやうなことは思はず、いたしはしませ

ん。あなたはどうぞ自由なお心をもち、振舞ひをしてゐてください、少しも私はあなたを束縛しようとは思ひませんから。たゞ私はかう申して置いて、私の心を打明け、あなたから御安心して私に身を托してゐてくださることを望むためなのでして、あなたから私の心の中をはかり兼ねて常に不安な心を以てゐて頂きますと二人の間に何か障りがあつて、あなたは此處に居づらうございませうし、私もまたあなたを置きにくうございますし、常に罪を犯してゐるやうで心苦しいので、すつかり心の中を申上げて、あなたからも安心して頂き、私もまた神の前に清い心をもつてゐたいと思ひましたので……』

彼女は彼れのよく事をわけて言つた言葉を聞いて少なからず感激させられた。そしてイエス、キリストを信じることによつて、人間がこんなに心の中が變つて、さつぱりと綺麗になるものかと不思議に感じた。彼女はそれに對して何んと答へて見ようもなかつた。彼女は自分の手を押へてゐた彼れの兩腕にしつかと縋りついて、さめ〴〵と悲しいのか、嬉しいのか、何んの涙かわからない涙を流して泣いてゐた。

（十五）

ケリオテのユダはスカルの住民に追ひ立てられて、そこを去つた。彼れは彼女と二人、驢馬を曳ふてそれに乘つて、さてその驢馬の首をどつちへ向けるか、彼れは幼少のころ繼父につれられてエリコ街道を引ずられて歩き、驢馬引きに逢つてその背に乘せてもらつたことを思出した。彼れはすつかり離れた異邦の地へ行かうと考へたが、彼れがその名を最もよく知つてゐるのはシリヤのダマスコでしかなかつた。それで彼れは彼女に、

『ダマスコへ行かう』と言つた。

彼女は淋しさ心細さに心が一ぱいだと見えて、聲を出して返事をする氣になられず、たゞたよりとする所のユダを信頼するやうな眼で見かへした。ユダはその目を見せられると、その黑い瞳に刺戟されて、どんなにしてもサツピラを幸福にしてやらねばならぬ、この場合おれが弱い態度を見せてはいかないと考へて、元氣を出して進んだ。彼等はガリラヤのカペナウンに通ずる街道を通つてゐるのだ。彼れは彼女に話しかけた。それは日中の暑さを避けるために木蔭に休んだ時のことだ。驢馬引きは氣樂さうに眠つてゐる。野も晝休みで一人の影も見えなかつた。

『おれたちがこれから通るガリラヤはおれがね、まだナザレのイエスが生きてゐた頃、一しよに歩きまはつたところだ、あゝ、思出すと矢張り懐しいや。いま通つて來た峠なんかも、いよ〳〵

イエスがエルサレムへ死ぬことを覺悟して出る時に此處を通つてね、おれが谷間から百合の花を折つて來てさ、マクダラのマリアに「これを主に、お前の心からといふことにしてやつてくれよ」と言つたら、マクダラのマリアがイエスに渡したのだ、イエスは女からもらつたものと悅んでゐたのをペテロが「それはユダがあなたにやつたのです」と聞かしたもんだから、おれを嫌つてゐたイエスはその花を谷へ捨てつちやつたんで、おれは腹を立てたことがあつたんだ。けれど後から考へてみると、それは人間にはあたりまへの事で、たゞ普通の人はそれを遠慮して隱してゐるのをイエスは隱さんですぐ行つたゞけのもんで、どつちかと言つたら心の正直の人であつたんだね』とユダが語ると、サツビラは、

『それは私だつてよくわかるは、私はイエスの心もわかるし、お前さんが腹を立てたこともわかるわ、私は兩方の心を持つて、兩方の事をいつもしてゐる』と言つた。

彼女は少しくたつてから深い息をしながら、

『イエスはそのマクダラのマリアに惚れてゐたの』

『それは自分では女なんかに惚れてゐるなんかと思ひやしないさ。自分では「おれは神の子だ、キリストだ」と信じ込んでゐるから、そんな色氣が腹の底にあつても自分が知らぬ内に自分で押

し殺してゐたんだ、それだから始終くるしかつたらしいよ。だが人間の心は正直なもんさ、今の自分百合の花の時のやうな際に、ひよいと吾れ知らず女に惚れてゐたことが外へ出るのさ。それでも自身では矢張り無理に押し込んでそんな心のあることに氣がつかずにゐたんだよ』

『さう、氣の毒な男であつたのね、マリアつて女はイエスをどう思つてゐたの?』と彼女は猶ほ問ふた。

『マリアか、マリアはもう夢中さ、けれど是れも變なのさ、自分で自分の大切な心を押し殺し、押し殺してゐた人だよ。おれが時々「おまへ、イエスに抱きつきな、抱きつきな」と言つてやつてもね、赤い顏をして怒つてゐたよ。どうしてあの人たちは自分の心をいぢめるのかなあ、おれには腑に落ちないことだよ』とユダは言つて、當時のいろ〳〵のことを思出して陰欝な顏をして考へてゐたが、サツビラがあまり靜にしてゐるので、振り返つてみると、彼女はすや〳〵と眠つてゐたのだ。

彼等はサマリヤの郡境を越えてガリラヤに來た。ユダは何んとなく第二の故鄕へ來たやうな氣がした。左の方に山の見えるのはあれはナザレの山かと思つた。ガリラヤ湖を見てはそこを船で渡つたことを思つた。またマクダラのマリアが產れたマクアダラの漁村をも通り過ぎた。イエスが常に愛

してそこに登つては親しく教をたれたコロンハッテン山の麓をも通り過ぎた。それからイエスが傳道の根據であつた會堂を有するカペナウン市には一夜を泊つた。それからはカイザリヤ、ピリポをさしてダマスコ街道の坦々たる大道に驢馬を急がせた。彼れはカイザリヤ、ピリポに近づいた時に一層の思出に耽けつた。『この附近の山にイエスは立て籠つて惱んでゐたつけな』と思つて、その山はどの山だつたらうと探したけれどもわからないでしまつた。イエスが山へ登つて行つてゐた留守にマクダラのマリアといろ〳〵話をしたことなども考へて、今つ頃はマリアはどうしてゐるやら、イエスが蘇へつて天に昇つたと信じて、自分も早く天に昇りたいなんかと毎日あこがれてゐるだらうなどゝ思つた。彼等はカイザリヤ、ピリポの都城について、そこに泊つた。その時に宿屋で、彼れはダマスコは今アナニアといふ人の熱心な傳道や、またはエルサレムから追ひ拂はれる信者たちが逃げ込んで、イエス、キリストの教が盛んに廣まつてゐるといふ噂を聞いた。そこで彼れはダマスコへ行くことがいやになつて、カイザリヤ、ピリポにとゞまる氣になり、そこに落ちつくことにした。

彼れが此處にとゞまる心になつたのには、カイザリヤ、ピリポは自分を迫害するやうなことはあるまいと思ひ、また比較的に旅の者を人嫌ひしないと考へたからだ。それには政治上に於てかうい

ふ變化があつたからである。分封の君ヘロデ、ピリポは死んで、彼れの領地は羅馬の直轄となつてゐたが、今年から羅馬皇帝カリギユラが即位するに當つて、その寵を得てゐたアグリツパがこのピリポの前領地を受けて王位に登せてもらひ、アグリツパ第一世となつてカイザリヤ、ピリポに君臨し、人民の人望を得るために頗る自由な政治を施してゐた。このアグリツパは西曆紀元前七年にヘロデ大王に殺されたアリストブユロの遺子であるのだ。

ユダ夫婦は出奔の時に金嚢の重いのを持つて來たから、まだ當分は樂に遊んで生活ができたけれども、ユダは酒倉へ雇はれて毎日勞働に從事してゐた。彼れの勤めてゐる酒屋の旦那といふのは四十一二歳の立派な人物であつた。彼れは他の雇男仲間の雜談をそれとなく聞いてゐる内に、ユダの妻が美人であることや、ユダよりも妻の方が年とつてゐることなどを耳に挾んだ。彼れはそれが自分の好色と好奇心とをそゝつてユダの家を一度おとづれたのが、きつかけになつてしげ〳〵と行くやうになつた。ユダの妻サツピラの黑い瞳は酒屋の旦那を見ると急に光が增して來るのが常であつた。ユダは自分が勤めに行つてゐる不在中に旦那が遊びに來ることに氣がつくやうになつた。

彼れは酒男の中からこんな話を聞いた。矢張り酒屋に勤めてゐた番頭で三十歳くらゐの若い美男子であつたが、酒が好きで、毎日呑んだくれてばかつりゐるため、到途おつ拂はれてしまつた。す

るとその妻が非常な良人思ひの貞女で、彼れを遊ばして置いて自分で働いては、亭主に好きなお酒を呑ませてゐた。彼れは酒を呑んでは醉拂つて寢てゐたせいか、まるでパン種でも入れたやうに體がぶく〳〵ふくれて來た。それでこれは酒が體にたまるのだ、どうかして體にたまらない、麥の葉の先につく露ほどの少量を呑んでも醉拂ふ酒が欲しいといふことになり、妻は身を粉のやうに碎いて働いて、亞剌比亞から來る蛇酒を買つて呑ませてゐた。それを呑むと、彼れはそのまゝ二三日くらゐはぐう〳〵眠つていろ〳〵の幻を見て悅ぶのであるが、それを呑み出してから一ヶ月目に冬の何んでも氷るやうな夜に溝の中で醉拂つて眠つてゐたまゝ往生してしまつた。妻は「わあ〳〵」言つて泣いたことだ。すると二三日たつと五十歳ほどの頭の禿げた顏に皺のある男が死んだ亭主の代りに家の中にちやんと濟ましてゐた。よく〳〵しらべて見ると、もう三年も前からその男と彼れの妻とは通じてゐて、彼女の酒の代金はその男が貢いでゐたといふことを近所の者は知つた。そして『とんだ貞女だつたね』とみんなが大笑をした。

是等のことを聞かされたユダは妻サツピラのことを考へさせられた。そして『おれを欺かうたつて駄目だぞ』と心の中で彼女に言つた。彼れは遂に彼女と酒屋の旦那との仲を確に突きとめた。一時は「かつ」とのぼせて妻を殺してしまはうと考へたが、彼れは自分の心を制して冷靜になつた。

彼れは『人間といふ者はさういふもんだ』てことに氣がついたのだ。おれはナザレのイエスを神のごとき者と思つたから腹が立つて憎くなつて、あんなことをしたのだ、イエスが只の人間であつたらおれに對して持つた心持や態度はあたりまへのことだから、何も腹を立てるわけはないと悟つた彼れは、それを今また思出した。妻サツピラのすることは人間として通常のことだ、おれと逃げたのもおれに惚れて逃げたわけではなく、一人で逃られないからおれを道具に使つたのでしかない、さう思へばおれの妻になつて、こんな所まで迷つて來た意味がわかる。その内に良い男を目つけて……と思ふてゐたのが彼女の本心であつたのだ。なるほどそれはい〻考へだ、おれと酒屋の旦那とをくらべればまるで段が違ふからな、おれが邪魔になるので殺すなど〻出られなかつたのが、まあ災難が輕いとせねばならぬ。もつと年の若い、もつと美しい、そして大金持の女であつて、おれが酒屋なんかに勤めないで遊んでゐられるやうな、さういふ女がもしおれに惚れてくれゝば、おれだつてサツピラなんかを嫌つて捨てるかも知れないからな。人間はお互にさういふ心を持つてゐる、たゞ時と場合とでそれを行ふ行はないだけの違ひだ。サツピラも人間のすることをしてゐるので、なにも神樣ぢやないからな、おれが腹を立てるのは、つまり自分で自分が腹を立てゝ苦しむだけ損をしるやうなもんだ。妻に嫌はれたり、腹たてゝ苦しんだりしては間尺に合はん。おれは何處かへ

行つてしまはう。おれも斯うなつたらサツビラを見てゐることもいやだし、サツビラだつて、酒屋の旦那だつて、おれが居なからうものならどんなに悦ぶことか。さうだ、これはおれが逃げるに限る い、ま〳〵しいし、サツビラと別れるのはせつないけれども、かうしてゐれば猶ほいま〳〵しい目とせつない目とをしなければならぬ。逃げるに限ると心に決した。かうして彼れは二週間くらゐは其ことでいろ〳〵思ひ迷つて苦しんでゐたが、つひに妻サツビラを殺したいといふ氣が起きたほどの狀態を目擊したので、いよ〳〵去らねばならぬことになつた。

『おれだつて、またい〻女をめつけて新しく生きてやらあ、へたばつてたまるもんか』と彼れは新しい勇氣を奮ひ起して逃亡の支度をひそかにした。

（十六）

タルソのサロはイエスの徒を憎む祭司、パリサイ、學者、サドカイ、民の長老などの連中すらも驚くほどの猛烈な勢をもつて、イエスの徒をエルサレムから追つ拂ひ、猶ほその本元である使徒達の根據地たるベタニヤ村から橄欖山へかけての一帶に大捜索隊を出して、彼等を根こそげ檢擧してやらうと思つて捜索にとりかゝつたが、使徒たちはその前にもうそれを知つて諸方へ離散したこと

がわかつた。しかしそのために諸方の都市からイエス、キリストの名によつて教會が立つといふ報告を得、殊にシリアのダマスコが最も盛んで、全都がイエス信者になつたといふことを聞いた彼れは、それを切り崩してやらねばらぬと考へた。それはシリアのダマスコがこの地方一帶の政治の中心、市場の中心であるからである。その中心に立てられた教會を切り崩したならば他はおのづから衰へるに違ひないと見當をつけたのだ。

彼れは此處において祭司總長や民の長老など〻相談の上、自分が追捕の使命を祭司總長から文書によつて受け、雇兵三十名を引連れ、方伯マルケラからダマスコの總督に當てた「イエスの徒の處刑許可」の承諾を得たいといふ願狀を得て、一行は亞剌比亞馬の逞しいのに乘つて征討將軍の勢を以て出發した。しかし彼れは心の勇むべき筈なのが、何んとなく陰鬱な心地になつて來るので、これは變だと思つて、時々首を振つて新鮮な空氣を吸ひ、馬のあがきを輕快に走らせなどしてみるけれども、いつの間にかまた元の陰鬱に返つて來る。そして體にも何處となく異狀が來てゐるやうで、頭が割れるかと思ふほどの頭痛に惱まされた。彼れは全身に不安な氣分が通り過ぎるのを覺えて、これは一體どうしたことかと怪しんだ。その内にふとタルソに殘して來たナホミのことが心に浮んで來て、彼女があの能く働く目で自分をぢつと、怨むがごとく、怒るがごとくに見つめてゐる

顔が空中に現れたりなどするのが目に見えて來た。

『おれは神の福音を萬國に宣べ傳へるために女のことは捨てた、しかし默つて便りをしなかつたのは惡るかつた。早くその事情を打明けて、おれのことなどを思ひ捨てゝ、他に良い緣を探して良人を持つように、彼女のところへ最後の便りをすべきものであつたのに……』と彼れは後悔の念が起きたが、今それを道中に於てしたゝめる時間もない、ダマスコに行けば命がけの奮鬪をせねばならぬ、これはダマスコの大掃蕩がおはつてから彼女に手紙を出さうと心を定めた。これで彼れは幾分か心が輕くなつたと思つたが、また次第に何んとも言へぬ體の變調を覺えて、それと同時に不安が襲ふて來るのである。彼れはカペナウン市からカイザリア、ビリポの途中で、くら〳〵と目舞がして馬の背の上にうつ伏ぜになつてしまつたので、從者は驚いて馬の背からおろして樹蔭で介抱した。正午すぎの炎天の日足は樹の蔭を短くしてゐた。二三時間の休養の後に彼れは氣分がよくなつたので、再び旅行をつゞけて、カイザリヤ、ビリポにその日は宿つた。

彼れは翌朝になつて、今日はダマスコに愈々乘り込むといふので非常の勢を以て出發した。けれども途中から激しい頭痛に襲はれて、どうしても旅行を續けることに耐へないので、アバルヘテマアカの宿屋に暫く休息することにした。彼れの從者は白布に水を含ませて、彼れの頭を冷してやつ

た。ふた時ぐらゐの內に頭痛はやんだけれど、時々發作的に體の全體が黑い大きな惡魔のやうな鳥の翅で覆はれるかと思へば、また繩をつけて全身を暗い穴の底へ引ずり込まれるやうに感じて、心が不安であり、胸がつかへて、食事もとれない有樣なので、從者等は彼れを暑さあたりと診斷し、今日は此地で一泊して休養することを勸めてやまなかつた。彼れは自分の內心に不安の念がないのであれば、從者等が何んと言はうとも、强行軍を續けるのであるが、今回は自身どうしたことか心が弱く、この炎天酷熱のダマスコ街道の土ほこりを浴びて强行する勇氣が出なかつた。

此地の驛遞司を兼ねた旅館の亭主はパリサイ派の信者であつて、イスラエルの神エホバを心から禮拜してゐた。彼れは、エルサレムの大學者サウロがエホバの代理となつて、ナザレのイエスの異端の徒を退治に行くためこの炎熱にダマスコを通過して自分の家に宿泊することを非常の光榮として悅んで、出來得るかぎりの歡待を盡した。彼れはまた其上にお金をつかはずに何か大學者サウロのお氣に召すやうなことはないかと、首を幾度か傾けなほしては考へてゐたが　はたと手を打つて、學者サウロが保養してゐる部屋へ入つて行つた。

學者サウロは二段の階段のついた上座にダマスコ製の赤い毛氈を敷いた上に、クッションを二つ三つ重ねて體を橫たへてゐた。

『ラビにお伺ひ致します』と亭主は言つた。

『なんだ』と學者サウロは寢たまゝ問ふた。

『御容態は如何でございます』

『まづいゝ方だ』

『左樣でございまするか、エホバのために仕合せなことでございまする。ラビよ、時に申上げたいことが一つございまする、それはナザレのイエスに叛いて彼れを賣つたイスカリオテのユダつていふ男がこちらに居りまする』

亭主のこの言葉を聞いた彼れは鎌首を上げて、

『どこに?』と聲の調子を變へて問ふた。

『へえ、私の店の帳場に勤めて居りまする』

『すぐ呼べ、此處へ來るやうに……』と彼れは言つて、上體を起した。

學者サウロは自分自身では明瞭に意識してはゐないが、彼れの心はナザレのイエスに對して神か人かに就ての判斷に多少の疑ひを抱いてゐるので、ナザレのイエスの信徒を迫害しながらも、彼れの魂は常に戰いてゐた。故にそれに伴つてナザレのイエスなるものを能く知りたいといふ欲求が絶え

ず彼れの心にあつたので、イスカリオテのユダがどうして自分の師イエスを賣るやうなことをしたか、ユダが惡いのか、イエスが惡いのか、或はどつちも惡くはないのだけれど、何かの行き違ひなのか、彼れはそれが知りたいので、ユダに會つてみたいものだと前々から思つてゐたのだ。

事務家らしい形をしたケリオテのユダが彼れの前に現れた。ユダの老人ぢみた額の横皺は一そう深くなつてゐた。大きな鏃鼻の下の口は彼れが何かを敢行する時に必ずやる癖の烏の嘴のやうに尖らしてゐた。彼れは立つたまゝ挨拶もせず學者サウロの顏を睨むかのごとく見上げてゐた。學者サウロは額から兩眉の間を通つて高い希臘型の鼻に續いてゐる太い深い縱皺を刻んで、厚い大きな唇をきつと喰ひしめて彼れを見下した。かうして兩方は石像のやうに默つて動かず向ひ合つてゐた。やがて學者サウロがそれを持續してゐることに耐へないで口をきり出した。

『お前がイスカリオテのユダといふのか』

『さうです』

『お前は今まで姿を隱し、名を隱してゐたさうだが、今度はどうして此處の亭主に自分を知らしたのか、またお前は今までなぜ姿を隱してゐたのか』

ケリオテのユダは口の周圍に皺をよらせ、嘲けるやうな態度で答へた。

『私は最初はヨタムと名を變へてゐましたが、何んのためにおれは自分の名を變へて自分を隱してゐるのかと考へて見て、名を變へてゐるつてことが卑怯なことだと思ひましたから、本名を名のることにしました。けれども私は元の主人であつたアナニア様の奥様が弟のステパノ様と夫婦になることがいやだといふので、私と一しよに駈落したんです。そのために矢張り自分たちは隱れてゐなけりやならんやうな氣がして、身の素性を包み隱してゐたのですが、私は今では女と別れて獨身になつてゐますので、本名を名のつたのです。けれど此邊へ來て「ケリオテのユダ」と言つたつて誰も知る者はないが、それでもまた後で私といふものゝ昔の事が知れて追つ立てられるやうなことがあるのは、もう〳〵こり〳〵しましたから、前もつて此處の主人に「おれはナザレのイエスといふ男を賣つたイスカリオテのユダつてもんだ、それでもいゝか」と駄目を押して雇はれたんです。すると此處の主人は「おれはパリサイ派だ、ナザレのイエスを賣つたユダなら却つて面白い」と言ひました』

學者サウロはそれを聞いて暫くだまつて何かを考へてゐたが、

『お前はどうして師のイエスに叛いたのか』と問ふた。

『おれはイエスが「吾れは神の子だ、萬民を愛する」なんかと言つてゐながら、おれを可愛がらなかつたし、それに一たい神様つてものが無闇に人間に罰をあてるのが氣に入らん、おれは何んでもかんでも憎くて仕様がなかつた、イエスはそれだのに「人をみんな愛する」と言ふんだ。おれはいま〳〵しくて「嘘ぬかせ、だいち弟子のおれ一人すら愛されなかつたぢやないか」と言つてやりたかつた。「神様にざまあ見ろ」と言つてやりたかつた。でもイエスのしやべる事はみんな尤も至極のことで、おれの感心することばつかで有つた。人間はお互に愛し合はなけりやならん、神は律法なんかで人を責めないで、悪い者も良い者も一様に愛する、神と人間と、人間と人間とみんな愛し合ふところに神の國があるんだつてのだ。どうです、言ふことは感心なことでせう！ところが實際はイエスは悪魔を憎んだり、パリサイ人を憎んだり、弟子のおれを嫌つたりしたもんです。それから使徒のペテロ以下その子分どもはみんなイエスの言ふことがわからんで、イエスは戰爭して此國を世界の王國とするんだと信じ込んで、おれの言ふことを笑つてゐやがるんだ、おれはその弟子どもに「ざまあ見ろ」と言つてやりたかつたんだ。野郎どもはイエスが捕へられると、ちり〳〵ばら〳〵に散つてしまひやがつたですぜ。それにイエスは自分ばかり「神の子」、「神の子」だと言つてゐるんで、そんなら捕へられて殺される時にどんなになるかつて事をおれは見てやりたかつた。ところがどうです、おれ達の死にざまとちつとも違はんぢやありま

せんか、……』

ユダが熱くなつて辯じてゐるのを、學者サウロはその言葉の切れ目を待つて、

『お前は、それで今イエスを賣つたことを後悔してゐるのか』と問ふた。

『後悔してゐます』と言つて、ユダはサウロの顏を見て『お前の考へてゐる後悔とは違ふ』といふやうに首を左右に振つて、言葉をつゞけた。

『もしイエスが自分で言つてゐたやうに神の子であつたなら、おれはイエスの仕打に腹をたてゝイエスを賣つたことには後悔なんかしない。ところがイエスはあたりまへの人間であつたでせう？　あたりまへの人間なら、或人を可愛がつたり、或人を憎んだり、言ふたことゝすることが違つてゐたりしたつて、なにも不思議はないんで、おれが腹をたてゝ讐とつてやるまでのことは無かつたんで、だからおれは今では可哀さうなことをしたと思つてゐるんです』

學者サウロは彼れの言ふことが自分の思ふことゝはまるつきり違つてゐるので、多少あきれ氣味になつて、默つて聞いて默つて考へ込んでゐた。

『おれにもう用はないのかね』とユダが促した。

學者サウロはまだ何か聞かねばならぬことがあるやうな氣がするので、あわてゝ、

『いや、まだある』と言つてから、また考へて、

『ではお前はイエスをキリストとは思はないんだね』と問ふた。

ユダは再び嘲けりの皺を口のまはりによせて論じた。

『キリストなんてあるもんか、だいち神樣なんてものがあるもんか、その人が神樣があると思へばあるので、イエスが自分はキリストだと思へはキリストなんで、またお前さんが「イエスはキリストだ」と信じればイエスがキリストになるんで、それはみんな自分の心の影なんだよ。おれはお前さんに聞くことがあるんだ、お前さんはイエスの信者や使徒だちをなぜそんなに迫害するんだね』

その部屋の入口に蹲つてゐる者がある。それは宿屋の亭主で、學者サウロとユダとの問答に耳を傾けて聞いてゐるのだ。學者サウロはユダから『お前さんはイエスの信者や使徒たちをなぜ迫害するんだね』と問はれて、少なからず面喰つて胸の底を刄で突かれたやうな衝撃を感じた。しかし彼れは自分の位置や使命を省みて、自分をとり返して威嚴を偏へた。

『私はキリストの福音を萬國に宣べ傳へるためにあるものだ、それを妨げるものは片つ端から退治てしまふのだ』

『ぢやイエスの信者を迫害するのはイエスを僞者と思つてゐるんだね？』
『さうだ』
『で、ほんたうのキリストは？』とユダは問ひつめた。
『いまに來る』
『馬鹿だなあ』とユダは三度あざけりの皺を口のまはりに寄せて言つて、言葉をつゞけた。
『そんなこと言つてゐたら、百年、千年、萬年たつてもキリストは來やしないよ、自分でキリストを發見しなくちやならんもんだ。一たいキリストの福音つてのはどんなもんかね』
『お前が最前ナザレのイエスの言つたといふ律法なくして救はれる、神の愛、人間同志の愛、それが福音だ』
『ふん、イエスの言葉をキリストの福音と信じるなら、なぜイエスをキリストと信じられないんだね、イエスをキリストと信じられないお前さんが何年たつたつてキリストを目つけられるもんか。お前さんはイエスの信者や使徒を犬や猫のやうに殺してゐる、キリストの福音を宣べ傳へようといふものが、人を殺したりなんかしていゝものかね、それで「人間を愛する」なんかと言はれるかね。人間は愛と憎みの中にあるもんだ、その人間が「萬民を愛す」なんかと言ふから、お前

さんのやうにキリストの福音を宣べ傳へると言つてゐながら、自分の現在してゐることはキリストの福音に叛いてゐることをしてゐるんだよ。おれはイエスの信者も使徒も大嫌ひだ、けれどもそれを迫害するお前さんは猶か大嫌ひだ。お前さんはね、自分の心の中の神様やキリストを踏みにじつてゐるんだよ、だからお前さんの人相はどうだね、瓶の水に顏を寫して見たらいゝぜ、その額から鼻へかけての太い深い皺とその青い顏はいまお前さんの心の惱みを示してゐるもんでないかね。お前さんは「萬民を愛す」と言つてゐながら、人間を殺してゐる。きつとお前さんは手近の親兄弟とか妻とかを愛することが出來ずに「萬民を愛する」なんかと言つてゐるのぢやないかね。イエスの信者を迫害することなんかやめて、女房でも可愛がつた方がましだぜ』
ケリオテのユダは斯ういふと、ぷいつと部屋を出て行つてしまつた。入口で聞いてゐた宿屋の亭主は憤然と立つてユダの跡を追ふて行つた。

第五編　使徒とユダ

（一）

タルソのサウロは翌朝になつて、氣分はまだ優れなかつたけれども、押してダマスコ行の途上にのぼつた。炎々たる太陽は馬乘の彼れを最初は右から照らしてゐたが、後には頭のてつぺんから燒きつけたので、彼れは白い布で頭を深く包んだ。二十數匹の馬の約百個の蹄からは黃色いほこりが舞ひ上つて天日を受けて光り輝いた。

彼れの頭上には太陽の炎熱がついて離れないと同じやうに、彼れの念頭からはケリオテのユダがついて離れなかつた。昨夜彼れはどし〳〵とユダのために切り込まれて憤激したが、相手のユダが言ふだけ言つて逃げて行つたので、充分に言ひ返してやることが出來なかつた。ユダが出て行く跡を追ふて行つた宿屋の亭主が、

『ふてえ野郎だ、野たれ死にでもしやがれ』と獨で罵つて歸つて來たので、サウロは、

『今のユダつて男をもう一度呼んでくれ』と宿屋の亭主に命じた。

宿屋の亭主はぱくりと口を開き、部屋のまん中に立ちどまつて、

『まだ御用があつたんでございますか』と主人に叱られる時の犬のやうな樣子をした。

その様子を見てサウロは、亭主が取り返しのつかぬことをしたらしく感じられたので、

『ぢや、もうユダはゐないのか』と問ふて見た。

『はい、ラビに向つて失禮なことを申上げ、また神様やキリスト様を汚すやうなことを申しましたから、直ぐ追ん出してしまひましたのですが、今つ頃は野良をさまよふて、水一ぱい呑ませてもらふことも出來ず、いまに野たれ死にするでせうよ』と宿屋の亭主は言つた。

サウロは馬上にありながら昨夜のそんなことを回想してゐた。彼れは『もしユダを呼び返し得たとして、おれはユダに何を言つてやるのか』と考へてみたが、何を言つてやればいゝか、それがわからないといふ事に氣がついた。むしろ彼れはいま〳〵しいけれども、ユダの言つたことが妙に胸を突いてくることを感ずるのである。それはユダの言葉の中の二つの事だ。

……イエスの言葉をキリストの福音と信じるなら、なぜイエスをキリストと信じられないんだね。……自分でキリストを發見しなくちやならんもんだ、そんなこと言つてゐたら百年、千年、萬年たつてもキリストは來やしないよ。

……お前さんは「萬民を愛す」と言つてゐながら、人間を殺したりなどしてゐる。きつとお前さんは手近の親兄弟とか妻とかを愛することも出來ずに……、イエスの信者を迫害することなんか

やめて、女房でも可愛がつた方がましだぜ。

彼れはユダの言つたこの二つの言葉を思出すと、其たびに胸に不安の感じが湧き、くら〳〵と目眩ひがするやうな氣がする。彼れは額から目の中へ、頬から襟首に流れ込む汗を拭いた。巨大な力を持つた手に頭を押へられてうんと馬の首に摺りつけられるやうな感じがして、馬の背に上體を前に押し伏せられたので、彼れは驚いて馬の首の鬣につかまつた。其時に驚のやうな大きな鍵鼻とめぐりに深い皺のある尖つた口とが目にちらついたが、彼れはそれがケリオテのユダの顏であることを直ぐ知つたので、いま自分の頭を押して馬の背にこすりつけたのはユダの仕業であるやうな氣がした。その内に腹の中から胸へかけて何かゞ入つてゐて、それがあばれまはるやうな感じがして來たが、彼れは『はゝあ、ユダめ、今度はおれの腹の中へ入り込みやがつたな』と思ふと、腹の中から頭へ繩をつけて力まかせに引つ張られたと感ずるや否や、彼れはどかりと馬から地上へころがり落ちた。彼れの全身は痙攣を起し、兩眼は黑目を隱して白目を出して口からは泡を吹いた。彼れは空を見上げると、炎々たる太陽が粉々に碎けて自分の周圍を焰のごとくに渦をなして駈けめぐることが暫く、やがてその焰の一團は長い尾をひいて天に歸つた。すると天が開けてその焰を呑み込むと、黃金の顏に銀衣をまとふた巨人が現れ、その巨人の脚元からサウロのところまで虹のごとき一

像の光の橋が架け渡されてある。

『サウロ、サウロ、何故に吾れを苦しめるか』と言ふ嚴かな聲を彼れは聞いた。

彼れはその聲を天の巨人から來たものと思ふたので、

『おゝ主よ、あなたはどなたですか』と問ふた。

けれども是等の聲は驚きあわてゝゐる從者どもには聞えもせず、サウロの口は堅く閉ぢ締められて唇には蟹の泡のごとき泡がついてゐるだけであつた。

『吾れは汝が苦しめるイエスだ、とげある鞭を蹴るはむづかしいことだ』と天の巨人が答へたやうに、サウロは思ふたので驚いて、體はわな〳〵と慄へて來た。

『主よ、主よ、私はそんならどうすれば宜しいのですか』と彼れは心の中で言つた。

それに對して天の巨人が何か答へたらしかつたが、彼れはそれを聞くことが出來ず、俄に深い闇が彼れの心を覆ふてしまつた。是等の狀態は傍に驚いて見てゐる從者や兵卒等には、サウロが不思議な病氣にかゝつて人事不省になつたものとして見えた。彼等は民家に入つて擔架の用意をして、兎に角サウロをダマスコの民の長老ユダの家に運び入れた。彼れは風どほしのよい奥まつた一室にその病體を横たへてゐたが、ふと目を開いて見ると、炎々たる太陽の眞晝のかはりに、暗い中に一點

の細い燭火を發見し、己れの身は亞剌比亞馬の背に乘つてゐるかはりに、ダコスコ製の文布によつて裝飾された柔い寢臺の上に横へられてあるのを發見した。

『誰かゐるか』と彼れは聲を出して見た。

その聲は皺枯れてゐた。彼れの足元に侍してゐた下僕が膝まづいて、

『おゝ、ラビよ、お氣がつかれましたか』と應じた。

『むう、水をくれ』とサウロは下僕から冷かな水を持つて來てもらつて、思ふ存分に呑んだ。

彼れは水を呑みおはると、精神が爽かになつて來たので上體を起してみたが、まだ目舞ひがして吐きさうで苦しいので、暫く寢て休養することにした。

『こゝは何處だ』と彼れは問ふた。

『ダマスコの民の長老ユダの家でございまする』と下僕は答へた。

彼れはダマスコ街道の途上で日中に見たり聞いたりしたものを思出して、寢ながら其事について考へた。彼れは自分の體に起る發作を單に世の人の病氣と同じものであるとは思はれなくなつて來たのである。死んだ父やまたは自分の幼少の時に起つた發作に就て、大叔父のニホヤキンは一種の罪の深い病氣であると言つてゐたが、サウロはタルソのハロン山に於てケリアザルからナホミとの緣

談を拒絶された時も、いま又ダマスコ街道の途上に於ける時も、共に神の姿や神の言葉を見たり聞いたりしたところから考へて見ると、それは決して大叔父のニホヤキンが言ふやうな罪の深い病氣ではなく、神を見るための魂の動搖であつて、肉體が魂の動搖によつて惱まさせられるのであると解釋した。それで今日の日中に起つた發作もまた病氣ではなくして、神が自分に何かを示現せしめたのであると信じて、その時に自分が見たり聞いたりしたところのものを眞面目に考へ込んだのである。

彼れはタルソのハロン山に於て見たり聞いたりしたことは『吾れは汝が日頃まちのぞんでゐるイスラエルの神エホバ、世界の造主である誠の神である』といふ言葉から考へてみても、それが神であり、神の言葉であることが明かであると思つたが、今日の日中に於て見たり聞いたりしことは矢張り神であるかと考へて見るに、あの巨人は神のごとき光と榮えとを有するものではあるけれども神ではないことは『サウロ、サウロ、何故に吾れを苦しめるか、吾れは汝が苦しめるイエスだ』といふ言葉によつて見ても明かなことで、それは十字架に死んで蘇へつて天に登つたといはれてゐるナザレのイエスに違ひないと信じないではゐられなくなつた。

そこで彼れは天に現れた黃金の顏と銀白の衣との巨人をナザレのイエスであるとして、その言葉

からどういふことを知るべきものであるかを考へた。

『サウロ、サウロ、何故に吾れを苦しめるか』

彼れは『おれはイエスを苦しめたことがあるだらうか』と考へてみた。それは直接イエスを苦しめたことはないが、イエスをキリストであると信じてゐる彼れの信徒を迫害し、これからもダマスコの信徒の大掃蕩をやるつもりであるから、これを『イエスを苦しめるもの』と見なして見られないことはない。ではイエスは『何故に吾れを苦しめるか』と言つたのは其事をさしたのであらうかと、彼れは解してみたけれど、どうもさうでは無いらしく思はれた。イエスは『とげある鞭を蹴るのはむづかしいことだ』と言つたではないか、それは『信徒をいくら迫害しても、それを全滅することは出來ない、それはむづかしいことだ、とげある鞭を蹴れば、鞭は少しも苦しまないで、鞭を蹴つた者が苦しむと同じく、迫害を受けたイエスは少しも苦しまず、迫害を加へるサウロ自身が却つて苦しまねばならぬ』といふ意味なのであらうと解釋する彼れは『何故に吾れを苦しめるか』といふ言葉はイエスの信徒を迫害することをさすのでは無いと思つた。

彼れは自分の行つてゐる行動から省みて見た。彼れはイエスの信徒を迫害し、また今回のダマスコ行もそのためである。彼れは何故にイエスの信徒を迫害するのか、それはナザレのイエスはキリ

ストでないのに、彼等がそれをキリストと信じてゐるから、彼れは誠のキリストのために僞のキリストを信じる者を退治るつもりから爲してゐるのだ。イエスが『何故に吾れを苦しめるか』といふ言葉はこの誤解がイエスを苦しめるのであるに違ひないと彼れは漸く氣がついて來た。こゝに到つて彼れはむくりと上體を起して薄暗い天井張を見上げて凝視した。傍に侍してゐた下僕は駭いて、床板につけてゐた尻を少しく持上げて主人の顏に注目した。

『ではナザレのイエスは誠のキリストであるのか、ほんたうのキリストで?』といふ考へが電光のごとくサウロの頭の中で閃いたので、彼れはそれを確めるために、いま一度あの黃金の顏と銀白の衣との巨人の姿を見ようとして、天井張を見つめたのだ。

彼れは『さうだ、彼れは誠のキリストであるのだ、天の光明の中に赫灼たる權威ある英姿を見せた彼れがどうして僞物であるものか、あゝおれは誤つてゐた、彼れはキリストだ、キリストだ』といふ確信が心の中にしつかりと出來た。彼れは『それに違ひない』と思ふや、ざあと頭から冷水をぶつ掛けられたやうに感じて、ぶる〳〵と身慄へがして全身にびつしよりと冷汗をかいて、再び寢臺の中に昏倒してしまつた。

(二)

ダマスコのアナニアは聖都エルサレムから來たサマリヤのバラバから一大凶報を聞いて、全市のイエス、キリストの信徒を集めて協議會を開いた。病氣で寢てゐる駱駝商のシアテルを除くほか、は二百三十八人の男女の信徒の全部がアナニアの家の廣い中庭に集つた。主人アナニアはバラバと共に家の中から中庭に出て來て一同に挨拶をした。學者サウロの戀人であつたナホミだけはめぐりが薄青くなつてゐる能く働く目をぱつちりと見張つて、四角の窓から是等の中庭の群衆を眺めてゐた。

『バラバ殿の報知によると、學者のタルソのサウロが軍勢を引連れ、ダマスコの吾れ〳〵に對して大迫害を試みるべく近く押寄せてくるさうであるが、この事をお知らせいたして御相談にあづからうと思ふてお集りを願つたのでございます』と主人アナニアが言つた。

兩腕を胸のところで組んで、右肩を出して斜めに群衆を見渡してゐたサマリヤのバラバが、

『おい、みんな、どうだね、タルソのサウロがたとひ軍勢を引連れて來たと言つたつて、三十人くらゐなものだらう、こつちは二百人もある、何んの恐れることがあるものか、タルソのサウロ

を二度とエルサレムに歸れないやうにすることは容易なことだ』と言つた。

『さうだ、さうだ』

『おれ達にはイエス、キリストがお附きだ』と若い者は應じた。

『いや、そんなに容易なことではない、異邦へ來て事をなすに於ては必ず方伯マルケラからシリヤの總督へ當てゝの許可狀を持つてゐるに違ひないから、さうなれば何百人でも總督から軍勢を借りることが出來る、吾れ〳〵はそんな無謀なことはすべきものではない』と主人アナニアは言ひさとして、一同が『それは尤だ』といふ樣子をしたのを見るや、彼れは猶ほ言葉をつゞけて應急法を提言した。

『吾れ〳〵は如何なる場合に於ても鳩のごとく柔和でなければならぬ、荒き鷲が襲ふて來た時には翅をおさめて穴に隱るべきである。私は皆樣からタルソのサウロが引上げるまではレバノン山の谷に隱れ住むことをお勸めいたします。そのためにはサマリヤのバラバ殿から保護者になつて頂きたいと存じます』

是れを聞いたバラバは彼れの顏を見て、

『あなたは?』と問ふた。

『私は此處にとゞまつてゐます、主イエスは萬民のために己が命を捨てられた、私はあなた方のために此處にとゞまつてタルソのサウロを迎へます。彼れがもし皆樣の隱家を探し求めるやうな場合には私は身を以てそれに當ります、私は私の生命を以て皆樣の命を乞ひます、どうか私にその受難を與へてください。そして天に昇つて、主の前に皆樣の榮えを乞ひ、タルソのサウロが主の下僕となるやう主にお願ひいたしたうございます』と主人のアナニアが言ふと、バラバは一歩彼れに近づいて、

『アナニア殿、どうか私にその役目を申しつけてください』と言つた。

主人アナニアは首を左右に振つて、それを退けた。

『バラバ殿、あなたには命知らずの五人の子分があり、あなたはそのために常に粗暴に流れやすい。主イエスが捕へられたまふ時に使徒ペテロが劍を拔いたら、主イエスは「劍をもつて立つ者はまた劍にて亡びる」と言はれた。吾れ〳〵は如何なる場合に於ても劍を弄してはならぬ。人間は無抵抗が最も强いものである、それには主イエスが附いてゐられるから……。バラバ殿、あなたは皆樣をお連れになつて一刻も早くレバノン山の谷に立て籠つてください』

學者サウロの戀人であつたナホミは四角な窓から是等の様子を眺めてゐたが、中ほどからは見てゐることは見てゐるけれど、心はそこには無く、キリスト信者をみな殺しにしようとて此ダマスコに押し寄せて來るタルソのサウロのことに全く注いでゐた。彼女はタルソにゐた間にサウロからイスラエルの神のことを聞かされてゐた上に、サウロがバレスチナに渡つたのはその福音たるキリストの出現のために働くことであると思つて、サウロに對する戀心はその姿を變へてキリストを待ち望む心となつて彼女の胸に湧いたが、それを猶ほ一そう強く彼女の信念として心の底に植ゑつけたのは、彼女が尊敬するアナニアがイエスの信徒となつた彼の人格の力であつた。こゝに於て彼女はナザレのイエスが戀人サウロが待ち望んでゐたキリストであるものと信じ込み、無論サウロはこのイエスをキリストと見て、その福音を萬國に宣べ傳へるために働いてゐるものと考へ、今は妻の身の上のことなど心配してゐる暇が彼れにないのだらうと思つて、その内にはサウロが妻のことに氣がつき、先づ第一に自分の妻にその福音を聞かせて、主イエスの元に呼び寄せようと、ナホミを尋ね求めてくれるものと解し、戀しき心をぢつと抱いて彼れを待ちに待つてゐたのである。然るにそのサウロが意外にもイエスの信者をみな殺しにするとて此ダマスコに押し寄せて來ると知つた彼女は驚き惑ふてぼうとして氣が遠くなる思ひをして窓わくに縋りついた。それから彼女はよろ〳〵と倒

れるやうに部屋の中の毛氈を敷いた臺の上にシトロンの花の落ちるがごとく寢てしまつた。

彼女はサウロを疑ひ、イエスを疑ふ兩端の心に迷ひ苦しんだ。學者サウロといふのは同名異人で、自分の戀しいサウロではなくて他の人ではないか、またはサウロが自分の戀しい男に違ひないとすれば、ナザレのイエスが誠のキリストではないのであるかと思ひ迷ふた。しかし彼女は學者サウロが「タルソのサウロ」といふ以上は決して人違ひぢやないとの確信があつた。また尊敬するアナニアが信ずるイエスを誠のキリストでなくてどうしようといふ確信もあつた。かうしてみると、あの戀しいタルソのサウロがアナニアの信ずるイエス、キリストの信徒を迫害し、キリストに刄を向けることになるので、彼女は顏色を青白くして狼狽した。主人アナニアがバラバ以下宗徒一同を引取らしめて、下婢から『ナホミ様が御不快でゐらつしやいます』との告げに驚いて彼女の部屋に入り、彼女の様子を心配して問ふた時に、

『いゝえ、たゞ少し……』と言つたきり何んにも言はずに寢床に臥してゐるまゝであつた。

主人アナニアは彼女の様子を見て、略ぼその容態の原因を悟つた。彼れは彼女に何んと言ひ慰めて見ようもなく、事を時間の推移にまかせるよりほかに仕方がないと思つたので、彼れもまた何んにも言はず、そのまゝで一週間ほどの日數を過してゐた。

一週間後の或日、彼女は夏の暑い日中が過ぎて涼氣を催す夕方、己が部屋の窓からレバノン山の峯を遠く仰ぎ見ながら、惑ひ狂ふた心の疲勞のため何を考へるともなく、只ぼんやりとしてゐるところへ主人アナニアが入つて來た。

『御氣分はどうですか』と彼れが問ふた

『えゝ、もう宜しうございます』と彼女は答へた。

『ナホミ樣、タルソのサウロがいよ〳〵ダマスコへ參りましたよ、今日民の長老ユダの家に宿を求めました』と彼れは告げて、彼女の樣子を伺つた。

彼女はそれを聞いて一時は石のごとく堅くなつて何んにも聲を出すことが出來なかつた。稍々あつてから餓ゑきつた人のかすれた聲のやうな聲を出して問ふた。

『では皆樣方は?』

『みんなはバラバに引連れられて昨日レバノン山の谷に避難されました』と主人アナニアは言つて傍の低い臺に腰を下して、寢臺の上に起きなほつてゐる彼女から少しく離れて相對した。

『あなたは?』と彼女はまた問ふた。

『私はこゝにとゞまつてサウロを迎へるつもりであります、サウロのために殺されるやうなことがあつても、ダマスコ二百人の信徒の命がそれによつてたすかるものなら有りがたいことだと思つてゐます』とアナニアは言つた。

彼女は何事かに感動したと見えて、身ををのゝかせ、聲を慄はせて言つた。

『あなた、私はこの一週間といふものは恐ろしい迷ひのために苦しまされました。タルソのサウロが人違ひであるか、イエスが誠のキリストでないか、どつちかでなければならぬものと存じます。でも誠のサウロが誠のキリストに刄を向けるなどゝいふ法はございませんもの』

是れを聞いた主人アナニアは斷乎たる力ある聲で言つた。

『私は信じます、タルソのサウロはあなたのサウロに違ひありません、イエスはキリストに相違ありません。彼れは誠のキリストに刄を向けるために昨日ダマスコの街道に於て神の怒りに觸れ、馬上からころがり落ちて氣を失ひ、目が見えなくなり、聲が出なくなり、擔架に乘せられて漸く今日ダマスコに着いたが、今でも寢床の上で苦しみ悶えてをります』

彼女は寢臺から辷り下りて主人アナニアの膝元に身を低くして彼れの裾に縋つて憐れみを乞ふやうな調子で言つた。

『私もタルソのサウロを誠のサウロと信じます、イエス樣を誠のキリストであると信じます、そ

してサウロはイエス様を誠のキリストだと信じるやうになると信じます。サウロはキリストの福音を萬國の人々に宣べ傳へるためにパレスチナへ私に別れてまゐつて來たんでございます。どうかあなた、あなたのお力でサウロから神のお怒りがとけますやうに神様にお詫をなされて下さい、そしてサウロにイエスが誠のキリストであることを說きさとして下さい、サウロは賢い男でございます、決してかたくなゝ心を持つてはをりません。もしサウロがイエスを誠のキリストであると信じるやうになつたなら、それこそ私共一同の教會のために千萬人の味方を得たよりも力強いことゝ存じます。どうかあなた、お願ひでございます』

彼女は終りの言葉は面を赤らめて顏を伏せて言つた。主人アナニアも彼女の態度とその言葉とのために大に感動したらしく、

『ナホミ樣、私が一人こゝに踏みとゞまつたのは單にみんなのために死ぬといふことばかりではなく、エルサレムに於ける學者の一人者としてのタルソのサウロ、あなたの戀人としてのタルソのサウロをして何んとかしてイエス、キリストのためにお働きになるやうに、主のお力を以て悔ひ改められることを望んで、そのために私は自分の身の危難をも顧みずに、かうして彼れに會ふ機會を待つてゐるのですよ』と言ひ聞かせた。

彼女は嬉しさに兩手を合せて互に揉み合せて、面を上げて彼れの顏を眺めて言つた。

『おゝ、どうかさう遊ばしてください、私は嬉しう存じます。あなた、どうか一時も早くサウロから神の怒りのとけますやう、サウロの苦しみが癒されますやう、早くおとりはからひください、どうか早く』

主人アナニアはうなづいて子供を慰め、安心させるやうな口調で、『あゝ、よろしいとも、これから早速民の長老ユダの家を訪ふてサウロに會ひませう。そのためにサウロの手で私が殺されるやうなことがあつても、主のためみんなのためと思へば少しも恐れる氣は起りません』と言つた。

『いゝえ、いゝえ、サウロが誠のサウロならあなたを殺すやうな、そんな、そんな亂暴なことをするやうな男では決してございません。きつと主イエスを信じるやうになります。そしてあなた、どうか……』とナホミは言ひさして、彼れの顏を見て言葉を中止した。

主人アナニアは彼女の顏を見返して『……どうか……』と彼女が言ひさした心の意味を悟ることが出來た。彼れは重々しく、『よろしい』と言つた。

これを聞いた彼女は立ち上つて身のまはりを見た。それは今すぐに戀人にでも會ふために女が身づくろひをする時の樣子そつくりであつた。

（三）

タルソのサウロに率ゐられて來た二十名の軍卒はダマスコの羅馬兵の屯所に入り、サウロの從者五名は民の長老ユダの家に控えて、主人サウロの氣分が快復するのを待つてイエスの信徒の大掃蕩に着手しようとしてゐた。ところがサウロが再び喪心したといふので、從者と民の長老ユダとが驚いて、樣子を見に來たが、まもなく彼れは正氣に返つて、たゞ疲勞のためにがつかりしてゐるだけで、氣分はずつと良くなつてゐた。彼れは宿主のユダを見ると、

『ユダ殿、このダマスコでイエスの信徒の頭をしてゐるのは何者であるか』と問ふた。

『はい、彼等は一つの教會を設けて置きまして、その執事ともいふべき者は織物商のアナニアと申す男でござります。……しかしいま二三日御休養の後に神のためにお働き遊ばしたがお體のためかと存じますが?』と民の長老ユダが言つた。

サウロは寢臺の上に上體だけを起して、

『いや、いや、さうはしてはゐられない、私は一時も早くそのアナニアに會ひたい、どうか私をその者の家に案內をしてくれぬか』と言つた。

民の長老ユダは大に困つたさうにして、

『實はラビのお耳にお入れして、そのために御容態でも重くなつてはと存じましたので、御報告をまだ致しませんでしたが、聞くところによりますと、イエスの信徒三百名は昨日みんなダマスコを立ちのき、ラビの手を遠く避難したさうでございますから、その執事であるアナニアも今もゐるかどうかわかりませんですが?』と言つて、これを口實にして彼れにアナニアを會はせまいとするやうな樣子に見えた。

『さうか』とサウロは落膽をしたやうに言つたが、つと首を上げて、

『でも一樣その男がまだゐるかどうか調べて見てくれないか』と言つた。

此時には部屋は全く暗くなつたので、燭火がともされた。そこへ宿主ユダの下僕の一人が入つて來て主人に、『アナニア樣がいらつしやいました』と申上げた。

これを聞くと、ユダはうろたへて駈け出した。彼れは急いで入口に出てみると、そこに織物商のアナニアが立つてゐた。

『やア、まあどうして、アナニア樣、危い、危い、早くお逃げなさい。今サウロ殿はあなたのことを問ひたゞしてゐられました。私はあなたがもうダマスコにはゐられますまい、みんなと一しよに避難されたらうと申して置きましたから……』と民の長老ユダは言つて、彼れを奧へ通すま

いとして前に立ちはだかつた。

アナニアはこれを見てほゝ笑んで答へた。

『ユダ殿、御親切はありがたうございますが、私は主イエスのために身命をさゝげたものであります、私は一人このダマスコに踏みとゞまつてサウロの來るのを待つてゐたのです。私は主イエスのため、みんなのため及びサウロ自身のためにサウロに面會して、主イエスに刄を向けることの不道理を說きさとし、彼れを主の敎會の一人に加へ、そして主イエスの福音を萬國に宣べ傳へる有力な下僕の一人にしたいと思つてゐるのです。これは私一個の考へでも力でもありません、主イエスの御心をたゞ行ふだけのことでございます。どうかユダ殿、私をサウロ殿にお會はせください、もしもあなたに私に對する御親切と御同情があるならば……』

民の長老ユダはヘルモン山の頂上でも仰ぎ見るやうな樣子でアナニアを眺めて、

『左樣でございますか、いや能うくわかりました、暫くお待ちください』と言つて、彼れは再び急いでサウロの居間に駈けて來て問ふた。

『ラビよ、只今お話のアナニアが參りまして、ラビに御面會いたしたいと願つてをりまするが、如何が取りはからひませう?』

彼れは言葉と態度とを叮嚀にしたならば、アナニアに對するサウロの處置が幾分でも輕くなりはしまいかと考へて、馬鹿叮嚀に言つたり、したりした。サウロはそれを聞くと、額の縱皺をゆるめて悅ばしさうに民の長老ユダに言つた。

『おゝ、よいところへお出でくだされた、さあ、どうぞこちらへ御案內をして……』

そしてサウロが寢臺から下りたので、民の長老は彼れの態度が尊敬をする珍客を迎へるやうな有樣なので少なからず意外の感に打たれたらしく、あわたゞしくアナニアを迎へに出て行つた。サウロは寢臺のある部屋を區切るところのカーテンを閉ぢて、下僕をして彼れの服裝を禮服に改めしめ、それからカーテンを開いてアナニアが控えてゐる部屋の中央に出た。彼れはアナニアと顏を見合せるや否や、つとアナニアの脚元に跪いて、兩手を握り合せて高く捧げ、

『おゝ、イエス、キリストの敎會の一人者たるアナニア殿、私はイエスが曾て「僞善者よ」と罵りたまふたところの文字のみを知つてその精神を知らぬ盲のごときつまらぬ學者の一人でしかありませぬ。あゝ、私は盲目なるがためにイエスがキリストであることを知らず、誠のキリストを迎へるためにイエスの徒を亡ぼさねばならぬと思ひ込んで、誠のキリストが惠を垂れたまふた選民を迫害しました。この度もまだダマスコに於ける信徒を征討せんとして乘り込んで來ました途

上に、イエス、キリストは私が年來キリストの福音を萬國の民に宣べ傳へるために志を勵んでゐるのを見そのはしたまふて、私にその光榮ある御姿をお現しになり「サウロ、サウロ、何故に吾れを苦しめるか、吾れは汝が苦しめるイエスである、とげある鞭を蹴るのはむづかしいことだ」と宣はせられた。こゝに於て私の目からは誠の光を遮つてゐたところの鱗はとり去られて誠のキリストはイエスであることを見られ得るやうになりました。おゝ、アナニア殿、私はこれからはイエス、キリストの下僕となつて、萬國の民にその福音を宣べ傳へて日頃の神が命じたまふた使命を全うしたいのです。おゝ、アナニア殿、私の身も心も重い罪のために毎日苦しみ悶えてゐます。おゝ、アナニア殿、イエス、キリストの教會の長老よ、どうか私のために主イエスにおとりなしをしてください、おゝ、アナニア殿』

サウロのこの告白の言葉は彼れの肺腑から出て傍の人々の肺腑を貫ぬくの力と熱とがあつた。アナニアは激しい戰鬪を開かねばならぬものと、死地に入るの思ひをして入つて來たので、この有樣を見て全くその意外に打たれて、張り詰めた心も體も一時に緩んで暫くは茫然として自失してゐた。しかし自分の前に膝まづいて兩手を握り合せ、その上に前額をつけて首を垂れて神勅を待つかのごとく謙遜な態度を持してゐる學者サウロの姿を見ると、初めてはつと氣がついて、あわてゝ彼れの

振り合せた手を解き、その手をとつて彼れを立たせ、

『まあ、まあ、そこに……』とアナニアは言つて、彼れを臺の上に腰を掛けさせ、自分の方で彼れの前に膝を折り、

『ラビテよ、あなたはどうなされたのでございますか、あなたは私共をこのダマスコから追放するとておいでなされたのでございませう？　私はあなたから追放される主イエスの信徒一同に代つて、あなたの前に立つてゐる者でございます。私はあなたのために荒鷲に遭つた小鳥のごとく、その鋭い嘴と爪にかけられて八裂きにされるものと覺悟して參つたのに、あなたからそんな風に出られようとは思ひませんでした。たゞあまりの意外に何を言ひ、何をなせばよいか、さつぱりわかりません。どうぞ私にお命じください、私はどうすれば宜しいのかを……』と恭しい態度で言つた。

『兎に角あなたお立ちください』と學者サウロは言つて、アナニアが無意議に只その言葉に應じて立ち上るのを待ち、再びその前に膝まづいて叮寧で嚴然たる言葉で言つた。

『アナニア殿、私はナザレのイエスを誠のキリストと信じます、そして今までのかたくなゝ心を悔い改めます。私が愚かな者なるが故に、キリストのためと思ふてイエスの宗徒を迫害したこと

の重き罪をお宥しくださることを、私のために主イエス、キリストにおとりなしください。そしてどうぞ私に洗禮を施して、私を教會の一人にお加へくださることをお願ひいたします』

これを聞いたアナニアは初めて、此場に於ける一切のこと、自分が何を爲すべきかといふこと、サウロが何を求めてゐるかといふことを了解した。するとそれと同時に全身に歡喜の情が湧き立つたので、吾れ知らず床の上に身をどうと投出し、聲を擧げて感謝の祈禱を捧げた。

『おゝ、主よ、あなたのお力の偉大なることを今更に驚嘆いたします。あなたのお惠みの深甚なることを只々讃美いたします。私共のために千萬人の味方を得るよりも猶ほ一そう有力な兄弟を此處にお授けくださいましたことを感謝いたします。一代の學者サウロ殿に私ごとき者をして洗禮を施さしめくださることの光榮を身にあまる幸ひと存じます。しかし、おゝ、主よ、私にはまだ學者サウロ殿に洗禮を施すほどの力がないことを不安に思ふ恐れがございます、どうぞ私にその力と確信とをお與へください』

學者サウロもアナニアと同じく床の上に平伏してゐた。暫くは一室は鎭まりかへつてゐて、彼等二人が交靈の狀態に入つてゐるほかには、誰れもその空氣を亂す者はゐなかつた。下僕も主人ユダの注意によつて、主人ユダと共にその部屋から引下つてゐたのである。やがてアナニアは顏を輝かし

て立ち上つた。彼れは『おれは何んの價値もない人間であるが、おれは主の代理となつて、その下僕の役を勤めるのである、おれは弱い、しかし主は強い、おれは位ひくき者だ、しかし主は位たかき者だ、おれが學者サウロに洗禮を施すのではなく、主イエスが施しなされるのだ』といふ形に於て、彼れの祈りは聞き屆けられたのだ。

『サウロ殿、先づ席にお着きください』とアナニアは言つて、サウロが身を起して臺に腰をかけるのを待ち、

『主はあなたの願ひをお聞き屆けなされました、明日の午前中に私の宅へお出でください。洗禮の式を行ひ、主の前に於て悅びの聖餐をとりませう。それまでは御ゆつくりと旅のお疲れをお癒しなさつたが宜しうございませう』と言つた。

（四）

ナホミは自分の戀人と思ふ學者サウロのもとへ行つたアナニアの歸つて來るのを待つて、彼れの樣子を聞き、彼れが悔い改めてイエスを誠のキリストと信じるやうになり、明日この家で洗禮を受けて信徒の一人となるといふことを知つて驚き、次に悅びに充たされた。かうなると他の一つの不安

が一そう擴大されて、彼女の胸を惱ましたのは、學者サウロが果して自分の戀人たるタルソのサウロであるか否かといふ問題である。しかしその事については明日その人に會つて見れば直ぐわかることなので、彼女は明日といふ日を眠らずに待つた。彼女の心には『あの人か、どうか』と疑問が絶えず浮んでゐたが、彼女の動作や表情はもう學者のサウロを自分のサウロと信じきつて、戀しい彼れを待つことを示してゐた。

彼女はアナニアから『サウロの來るのは午前十時ころである』と知らされてあつたけれど翌日は朝早くから中庭の玄關へ訪問客が來るのを伺ふことの出來る部屋の窓のカーテンの際から中庭を覗いてゐた。その姿は彼女が未だ曾て試みたことのないほどの裝ひを飾つた。彼女はダマスコに來てゐる希臘人や羅馬人の若き高位の淑女の粉飾をまねてゐたので、見ちがへるやうな美しさを發輝して來たのを主人アナニアすらも限を見張つて注視させられるほどであつた。彼女はタルソでサウロに別れてから三年間の今日を待つた長さよりも、今朝から午前十時ごろまで彼れの來るのを待つた長さを長いものと覺えたほどに待ちあこがれた。

遂に大門から中庭に一人の人物が現れた。それは從者を連れない忍び歩きといふやうな格式を以て入つて來つた學者サウロであつた。彼女はよく働く二つの黑い限が瞳を中心として急速に渦を卷

いて廻轉し出したかと思ふやうな限をカーテンの際間から覗かせて學者サウロを見つめた。タルソに於ける時のサウロとイエスの信徒の追捕使たる學者サウロとは容貌がすつかり變つてゐた。すべての點が以前の彼れよりもその深さ。强さ、大きさ、重さを增して、いまアナニアの家の玄關に向つて歩いてゐる彼れは石造の宏壯なアナニアの家を壓倒するほどに毅然たる趣きが備はつてゐた。ナホミはこの偉丈夫の中からタルソの昔のサウロを發見し、猶ほまた現在の大人物たる男性の美に打たれた。彼女の心臟の皷動は激しく音を立てゝ全身に血液を送つてゐながら、彼女の顏面は色を失つて白くなつた。心は恍惚とし、茫然とし、兩手でしつかりとカーテンに縋りついて辛じて體を支へてゐた。その內に電光のごとく頭に閃めくものがあり、暴風のごとく全身をかけ廻るものがあつて、彼女はカーテンを放し、よろめく體を脚に力を入れて倒れ伏すのを防ぎ、水の上を渦紋を描いて動き廻るみづすましのごとく部屋の中を泳ぐやうに歩いた。そして初めて何事が彼女を斯の如く動轉せしめたかといふことを彼女自身はつきりと意識し得るまでに心が稍々落ちついて來た。

『あゝ、サウロ樣だ、サウロ樣だ』といふ「聲を出さない心の叫び」となつて、それが形となつて現れて出た。

彼女はいつ迄もたゞ部屋の中を駈けめぐることの愚かなのに氣がついたが、そんなら自分はこれか

らどうすればよいか、それは更に爲すところを知らなかつた。けれども彼女の心には『もう大丈夫だ』といふ安心があつたので、直に『この場合いたづらに騒ぎ立てるべきではなく、主人アナニアが豫め打合せて置いた時機を待つて、彼れに會ふことの出來るまで靜に控えてゐるのだ』といふことを自分の心に言ひ聞かせて、漸く彼女は鎭靜して自分の部屋に下り、寢臺に腰をかけて胸に手をあてゝ激しい動悸を鎭めようとしてゐた。

彼女の顏色は回復して、それが赤くほてつて輝き出した。けれど再びさつと靑くなつて、木彫のやうに堅くなつて來た。彼女は此時うんと穴の底へ引ずり込まれたごとくに感じた。それは『サウロは私に會ひに來たのではない』といふ觀念が忽然として意識に現れ出たためである。

『サウロはダマスコへイエスの信徒を迫害するとて來たのだ。彼れは今度アナニアから洗禮を受けるとて此處へ來たのだ。どつちにしても私といふものは彼れの心から捨てられてゐるのだ。よしや私といふものを全然心から捨て去らなくても、今は女に會はうとは思つてゐないのだ。それを此方からいろ〳〵の手段をとつて彼れの前に現はれることは、彼れの意に叛くことではないか？　彼れが私にたよりをしない、私に會はうといふ機會をつくらないのには、何か彼れには人知れぬ計畫があるのではない？　それを私が無理にその機會を此方から作るのは、彼れの計畫を

妨げ、破ることではないだらうか』

かういふ考へが彼女を襲ふて來たのだ。しかしながらまた一方には、

『だと言つて、命を失ふほどの思ひをしてサウロを慕ふて來た身で、三年の長い年月を一日たりとも焦れ惱まぬ日とてはない苦しい心を抱いて、いま壁一重を隔てた彼方にゐる彼れを一時間たゝぬ內に會ふて語ることが出來るのに、それがどんな差支があらうとも、そのために殺されるやうな目に會はうとも、神のさばきに地獄へつき落されようとも、これが會はずにゐられようか、どんなことがあつても私は會はう、きつと會はう』といふ心が彼女を力づよく襲ふたので、彼女はその爲すところに迷ふてゐた。

そこへ下婢が入つて來て、『お孃樣、およろしう御坐いますと、旦那樣が仰せなさいました』と告げた。彼女はその言葉を聞くと、同時にすつくと立ち上つて下婢を追ひ越すように走り出した。その時に頭の中に『お前は何をするのだ？』と彼女の行動をとがめる觀念がちらつと閃いた、實際それはちらつと閃いただけであつた。次の部屋ではアナニアが彼女を待つてゐた。

學者サウロは、アナニアが悔い改める者に洗禮を施すために前々から用意せられてある水槽の中に全身を投じて、アナニアから洗禮を受けた。

『兄弟サウロ殿よ、あなたの來た途上に於て現れたところの主イエスを、あなたが再び見ることが出來るよう、且つ聖靈に滿されるために、悔い改めにかなふ洗禮を受けられよ』とのアナニアの言葉と按手とによつて、彼れは水槽から外に出た時に眼と耳とに張られてあつた薄い膜が切りとられたやうに感じて、今までは見えなかつたものや聞えなかつたものが見えたり、聞えたりするらしい心持になつたのみか、何んとなく暴風雨の押寄せて來る前の一種の壓迫と不安とが心の底から全身へ漲り充ちて來てゐるやうな呼吸の引止まる內部的の有機感覺の變調を覺えて來た。

『アナニア殿、私を只ひとり一室に置かせてください』と辛じて言つたほど息をはづませて、陣痛の起つた姙婦のごとき苦痛の樣子であつた。

アナニアは豫てナホミと打合せて置いた一室にサウロを案內して、自分は急いで立ち去つた。サウロはよろめく足どりでその部屋に入るや、毛布の敷いてある長い臺の上に身を伏せて倒れた。そして何を考へるともなく恍惚としてゐると、腹の下部の中心あたりから血が湧きたつて來て、全身に手足の指の先までも赤くみなぎり渡ると同時に、兩腕、兩脚や唇の端にまで非常な力が充ち滿はつて來た。彼れは、わなの弓のごとくに衝動的に飛び起きたが、もう體の遣り場に困るほどに興奮狀態に入つて、部屋ぢうを駈け廻り、兩手を振り〳〵躍り上り、足で床を蹴り、拳で壁を打ち、高い小

さな臺に飾られてある香爐を掴んで部屋の隅に投げつけて、がちやりと叩きこわした。かくして彼れは息を切らし、體を疲らし、汗をびつしよりかいて臺の上に身を投げた。

『おれは一たいどうしたのだ』といふ反省が初めて此時に彼れの心に起きた。そして考へた。

『おれは嬉しいのだ、鬼につかれたわけではないのだ、確に嬉しくてしようがないのだ。何が嬉しいのか、全身に力が湧いて來て、心も湧き立ち、目から耳から何やら美しいもの、嬉しいものが入るやうな氣がするからだ。どうしたことだ、これは？　きつと聖靈が下つて來たのに違ひない。聖靈とは何んだ、神の賜はる力だ、キリストの靈がおれの體をとほして他に働きかける靈力だ。おれはキリストからこの靈力を與へられて何をするのだ、どうすればよいのだ。さうだ、おれは主イエス、キリストの福音を萬國の民に宣べ傳へるのだ、ナザレのイエスが誠のキリストであることを世界に知らせるのだ』

斯の如く彼れは自分の使命といふやうなものを心に定めて來ると、ダマスコ行の出發に際して、戀人であつたタルソのナホミに對して緣切りの手紙を送らうと考へたことを思出した。

『いよ〳〵おれはイエス、キリストの下僕となつて、この身を主に獻げきつた以上は、自分の全部を擧げて神のために傾けつくして働かねばならぬ、一婦人に心を奪はれ、婦女子のために身を

寄せるなどは慎しまねばならぬことだ』

彼れがこゝまで考へて來ると、部屋の中に何者かゞ入つて來たやうな感じがしたものだから、ふと入口の方を振り向いた。彼れは最初は『女が來た』と思つたが、直ぐ其次の瞬間にはそれが誰れであるかを知つて、それを知ると共に彼れの體は誰れかに引張り上げられたやうに、すつくと立ち上つて棒のごとくになつた。

ナホミはまた部屋へ入つて來る前には、入つたら戀しいサウロに飛びつき、縋りついて、心のありつたけ、言葉のありつたけを盡して怨みを述べ立てようと思つてゐた。故に部屋へ入る時には投げられた石のごとくに自分の體をサウロの體に投げつけるかの如き隋勢を以て進んだのだが、その時に彼女を撥ねつける何物かゞ彼れから放射したやうに彼女には感じたので、彼れから十キウビットばかり隔つたところでぴたりと立ちとまつてしまつた。かうなると彼女は肉體と肉體との接觸によつて思ひのありつたけ、怨みのありつたけを彼れに通ぜしめることには斷念して、空氣の媒介や光線の傳達の力を借りるよりほかに仕方がなかつた。彼女は口を以て訴へた、眼を以て語つた。如何にして自分がタルソからこのダマスコのアナニアの家に在るかといふことを述べた。

『サウロ様、サウロ様、あなたはあんまりで御座います、もうあなたはお互に誓つたあの言葉、

堅く〳〵契つたあの心をお忘れなされたのでございますか、お破り遊ばされたのでございますか。私の心は、體はあなたから放されゝばもう生きながら死んだものであります。あなたのために私は私の一生をめちや〳〵にされてしまふのでございます。けれど、人よりも情に厚いあなたが、僞りのない正しいあなたが、哀れな女を弄ぶやうなことをなされようとは思はれません。これには何か深いわけがあることゝ存じてゐました。どうぞあなた、私にそれをお聞かせください。私はこれまで待ちとほして來たものでございます、あなたのお心さへ變らなければ何年でもお待ちいたします。決してあなたの御事業や御計劃のお邪魔をいたさうとは思ひません。たゞ〳〵あなたのお心を今、この神のお引合せくださいましためぐり會ひに、どうぞお漏らしくださいまし。これがこのまゝ又もお別れするやうでは私はあまりに憐れな者になります、あなたはあまりにつれないお心を持つてゐられることになります』

彼女は縷々として切情を言葉から限から彼れに向つて注いだ。彼女の姿態は丁度狹い箱の中へ入れられた蛇が長い體をうねらせ、體と體とを縺れさせるやうに悶えて、やるせない焦るゝ心と燃える體との遣り場に苦しむかのごとく慄えをのゝいた。部屋の中は一ぱいに女性の匂に充たされ、情火の焔に燒けるやうに思はれた。

サウロには彼女の語る言葉の意味を何んにも聞きとめてはゐなかつた。たゞ彼女の容姿、彼女の兩眼、彼女の口などから通して、彼れの心と體とに一種の鋭い苦痛と恍惚の陶醉とを感應せしめるのみであつた。それは最前の洗禮の後に於ける恍惚狀態や聖靈降下の內部的の力の感應のごときものではなく、もつと〳〵力づよく、鋭く、もつと〳〵內部的に湧き立ち、ひた〳〵と肉迫して襲ひかゝつて來るものである。彼れの目には見えないが、或者の手が彼れの背後から女の方に押し、彼れの前から彼れの帶を摑んで女の前に引摺り、體の內部から『彼女の方へ、彼女の方へ』と命令してゐるやうに彼れには感じられて、一寸とでもそれに反對する觀念の力に緩みでも生じようものなら、電光が彼方の雲から此方の雲に傳達して閃くごとくに、彼れの體はナホミの體に合して一つにならうとするように、前の方へ動搖して風に搖ぐカーテンの如くに見えるやうに彼れ自身には感じられて來た。彼れは四つの官能の窓を閉ぢようとしても閉ぢることが出來なかつた。それは彼れの耳から異性の言葉が滲透して體の中核を襲ふた。彼れの目からナホミの太陽のごとく燃えるものが傳はつて體の中核を燒き盡さうとした。彼れの鼻からシトロンの花の匂のごとき匂、菊蒔の汁の酸酵するがごとき匂が彼女から放出して兩眼の間の骨を突いて目をくらませるやうに刺戟した。彼れの全身の皮膚から若き異性の滑かな柔い皮膚が濡れた布のごとくに纏ひつき、鳩の胸毛で全身を撫

でられるやうな觸感が胸の奥にまでしみ込んで心臟の鼓動をとめるかと思はれた。彼れは彼女の訴ふる言葉の意味を解しないが、彼れの體はそれに應じた。彼れの全身、彼れの全官能には此時むら〳〵と情慾の衝動が猛然として噴出して來た。彼れの偉大なる骨格と肉體は粉々に碎け、油のごとく溶けるかのごとく、火焰となつてナホミの蛇のごとき女の肉體に燃え移るかのごとく、彼れの心を根こそぎに奪つて情慾の下に蹂躙させようとして來た時に、彼れの心の隅に辛じて生き殘つてゐた反抗の觀念は全力を擧げて情慾の怪力と最後の奮鬪を試みた。

サウロは兩手を開いて、兩腕を天に高く差上げ、唇の厚い大きな口を赤き布のごとくに開き、牛の吼えるやうな『をう』といふ叫びを擧げると共に、糸につながれて振り廻されてゐた石が糸が切れて飛び去るやうに前に駈け出し、ナホミがびつくりして身をかはす、その間隙を燕のごとく身を翻して外に身を投げた。彼女は直ぐその跡を追ふて走つた。けれども彼女が門口に立つた時には既にサウロの姿は門外に消えて見えなかつた。

『サウロ樣！』とナホミは一言叫んだのみ、門口の柱に體を縋りつけたのみ、氷のごとく凝結したやうに堅くなつて、アナニアが出て來て、

『サウロ殿は？　サウロ殿は？』と問ふたのも耳に入らなかつた。

(五)

使徒ペテロの組は學者サウロの大迫害を避けて地方傳道に下り、ルツダ、ヨツパを經てカイザリヤに赴き、異邦人に洗禮を施し、それからサマリヤの中部を貫通して都エルサレムに歸つて來た。彼れが歸京したのはサマリアのシケムに在つた時に、都エルサレムにとゞまつてゐて諸地方の宗徒との連絡をとつてゐた使徒ヤコブの組から、歸京しても差支へないとふ報告があつたがためである。その報告の內容は次のごとくである。

ダマスコの信徒の大掃蕩をするとて軍勢を引連れて下つて行つたタルソのサウロは神の天罰のために途中で落馬し、失明して暫くダマスコで休養してゐたが、遂に鬼につかれて亞剌比亞の荒野へ狂ひさまよふて行つたきり、行方不明である。

この報告を得た彼等は欣喜雀躍して主イエスに感謝し、勇みたつて歸京してベタニア村の根據地に引上げた。そして暫く姿を隱してゐたベタニアのマルタ、マリアの姉妹やナザレのイエスの母のマリアなどを慰めた。それからペテロ一行はエルサレムの神殿に到つて、再びイエス、キリストの福音を宣べ傳へた。割禮のあることを以て異邦人と己れを區別し、自ら神の選民であると稱してゐる

ユダヤ人等は使徒ペテロがカイザリヤに於て割禮なき者に洗禮を施し、またその家に入つて食事を共にしたことに對して、

『神の律法を破るお前は神の子キリストの下僕と言はれるか』と一人が代表して抗議を持出して責めたことに向つて、使徒ペテロはヨツパの町の家の屋根に於て祈りを獻げてゐた時に見たと思つた幻を語り、それからカイザリヤに赴いて異邦人の招待によつてその家に入つたことを告げ、

『……おれが彼等に主イエスの福音を宣べはじめると、聖靈がおれ達に降つたやうに彼等にもまた降つた。その時おれはかねて主イエスが言はれた「ヨハネは水で洗禮を施したけれど、おれは聖靈を以ておまへ達に洗禮を施す」といふ言葉を思出した。神は既に主イエス、キリストを信ずるところのおれ達に賜つた聖靈を彼等にも與へたまふたのだから、おれはいかで神に逆ふことが出來るものか、彼等割禮なき者に對しても洗禮を施し、食事を共にすることは至當のことである』と言ひさとした。

祭司やサドカイ派の連中はほんたうの意味に於ける神の事に對しては冷淡で、只ひたすら自己の社會的地位や祭政の權をユダヤ人の間に維持してゐられることにのみ心を注いでゐるので、一意專心ローマ政府の歡心を失ふまいとしてゐるから、ナザレのイエスといふ恐るべき敵の死んでしまつた

今日に於て、如何にその信徒が多勢にならうとも『何をか爲し得る』とたかをくゝつてゐた。學者やパリサイ派の連中の中には眞面目に神の事を思ふてゐる人々もあるけれども、その中の有力なものとなつてゐる學者ガマリエル、民の長老ニコデモ、酒造家エサウ、それからサドカイ派ではあるけれども民の長老ニコデモの一團の一員であるアリマタヤのヨセフなどはナザレのイエスを誠のキリストとまでは信じてゐないが、少なくとも洗禮ヨハネ以上の豫言者であるとは信じてゐるのだから、彼れの信徒を迫害する氣が少しもない。故に一たびタルソのサウロを失つた彼等の間には、最早次第に優勢になつて來てゐるイエスの信徒を迫害するやうな勇氣のある者が無くなつた。

此時にガラリヤの地方の分卦の王であるヘロデ、アンテパス王は夫人ヘロデヤと共に都エルサレムの秋の假庵祭を見物のために來てゐた。夫人ヘロデヤは曾て自分の執念からして洗禮ヨハネを殺したことが絶えず心の底に强迫的觀念となつて潜み、折りにふれては彼女を惱ましてゐたところ、近頃になつて毎夜の夢に洗禮ヨハネの靈であると彼女が思ふものが彼女を苦しめるやうになつた。良人ヘロデ王は彼女の苦惱をどうしたら除き去ることが出來るかと考へた。彼女の腰元が一日市中から用を達して歸つて來て、

『あのお妃樣、ナザレのイエスの使徒とかの中にヨハネといふ名の人がゐますが、人達はそれは

洗禮ヨハネの產れがはりだと申してをります』と報告した。

夫人ヘロデヤはそれを聞いて、それを無條件にすつかり信じ込んで、自分が夜々ヨハネの靈に惱まされるのは其せいだと思つて益々物狂ひが激しくなつた。その物狂は良人ヘロデ王の頭の調子にも傳染して行つた。もし洗禮ヨハネの靈の祟りから脫したいなら、きゝ目が有る無しにかゝはらずヨハネの靈を吊ふことでも考へ出すべきであるらしく周圍の人々は思つたのに、ヘロデ王はその洗禮ヨハネの生れがはりだと謂はれるイエスの使徒のヨハネを殺してしまはうといふことを考へ出したので、周圍の人々はびつくりしてしまつた。ヘロデ王もヘロデヤ女も人から忠告されると、猶ほ一層自分の意見を固執する性格なので、イエスの使徒ヨハネを捕へる手筈を嚴しく計劃した。

そんなことは知らずに使徒ペテロとヨハネは神殿の「異邦人の庭」に於てイエス、キリストの豫言を宣べ立てゝゐると、聽衆の中から俄に捕吏が數人現れて、ヨハネだけを捕へて引摺つて行つた。それがあまりに不意で、あまりに迅速であつたので、傍のペテロも信徒たちもたゞ口をあんぐりと開いたまゝ、どうすることも出來ずにゐた。ヘロデ王は過激派のゼロデをいつ迄も監禁して置いたために盜み出された失敗を經驗してゐるので、ヨハネを即座に殺してしまつた。これを聞いたユダヤの祭司、パリサイ派、學者などがヘロデ王の勇氣とイエスの徒を退治してくれたのとを非常

に稱賛した。ヘロデ王はユダヤの人々の代表者は祭司、パリサイ派、學者などだと思つてゐるので、ユダヤ全國の人々から褒められたやうな氣がして、彼れは使徒ヨハネを殺した最初の目的を忘れてしまつて、ユダヤの國のため、ユダヤの神のために働く良き忠僕であるといふやうに考へ込んで、益々ほめてもらひたいと思つて、使徒ペテロをも一つ捕へて喝采を博してもらはうといふ計劃を立てゝその隙を狙つた。

使徒ペテロは長年の間、共に苦勞をしたヨハネを失つたことを悲しんだけれども、そのために勇氣は一そう增して來て、心氣はます〳〵亢奮し、其後もまた神殿の「異邦人の庭」に立つて、イエス、キリストの福音と教とを說いた。

『イエス、キリストはおれ達のため肉體に苦しみを受けて十字架に死なれたから、おまへ達もまたその心を以て自分も肉體の苦しみに耐へねばならぬ。イエスの肉體は十字架に死んだ、それは人間の罪惡の消滅を意味するものだ。故にすべて肉體の苦しみを受ける者はその罪が消えるのだから、今より後の人々は慾情に從はず、キリストに從つて艱難を厭はず過さねばならぬ。妻なる者よ、おまへ達はその良人に從へ、もしキリストの教に從はない良人であつても、妻の信仰と善行とは良人をして教に從はしめる。おまへ達の飾りは髮をくみ、黃金を縫ひつけた着物ではなく、心の中に隱れた柔和な聖靈を以て飾りとしろ、この飾りこそは神の前には價ひ貴きものだ。

神の教會の五執事の長であつたステパノの妻となるべき兄アナニアの妻サツピラは新夫ステパノに叛いて惡魔イスカリオテのユダと不義をなして逃走した。彼女のごときは呪はれた者である、その姿を見し次第、打ち殺さねばならぬ。良人たる者よ、おまへ達は妻を扱ふには弱い器物のやうにして、キリストの教に從つて彼女と共に居り、これを敬ふこと命を嗣ぐべき者のやうにしろ。男、女よ、みんな心を同じにし、その身を思ひやり、兄弟姉妹を愛し憐れみ、へりくだり、惡をもつて惡に報いてはならぬ、罵りをもつて罵りに報いてはならぬ、却つて惡い人のために幸福を祈れ。それはお前達が召されたのも幸福を得んがためである。惡を避けて善を行へ、それは主キリストは正しい人の上にとゞまり、惡を行ふ者に向つては怒りたまふからだ』

此時にキリストの教會の信徒を代表する七人の委員が使徒ペテロに對して訴訟を提起した。彼等はイスカリオテのユダと逃亡したサツピラを妻にする筈であつたステパノと共に五執事の一人に擧げられ、會計と救濟との事務を司つてゐたニカノルといふ男をペテロの面前に引摺り出し、一人の代表者が彈劾の言葉を述べた。

『執事ニカノルは教會の出納をごまかして、私腹を肥しました、その委細の金額はこの帳面に明

かに記されてあります』と一卷の卷物を差出した。

使徒ペテロはその卷いた帳簿を開いたが、それを了解する能力はなかつた。たゞ信徒が訴えることろを正しいと思つて、

『ニカノルよ、お前はそのやうな事をしたのか』と詰問した。

ニカノルは全く恐れ戰いてゐたが、

『はい、誠にすみませんでした』とおとなしく白狀した。

すると使徒ペテロは顏を眞赤にし、左右の額の隅に太い靜脈をあらはして、

『貴樣もイスカリオテのユダの仲間か、キリストの怒りを受けろ』と大きな聲で罵つた。

すると周圍の信徒たちは一齊にニカノルに殺倒して押潰し、石で叩く、足で蹴る、突き飛ばす、さながら葡萄の房の熟して潰れたやうなニカノルにして、そこから放逐してしまつた。一瞬間前までは兄弟姉妹であつたのが、一瞬間の後には惡魔のごとくに追はれて行つた。

この油斷を狙つてゐたヘロデ王の黨人は一時に起つて使徒ペテロ一人を目がけて飛びつき、手とり足とりして奪ひ去つた。數百人の「兄弟姉妹」と毎日言ひ合つてゐる信徒たちは、ペテロを捨てゝ吾れ先きにとなだれを打つて逃げ出した。

明日は假庵祭の第一日目である。ヘロデ王は使徒ペテロをその日に殺さうと思つて、今夜はシオン山の上京に在る己が館の一室に十六人の兵卒をつけて彼れを監禁して置いた。ヘロデ王が自分の領地外のエルサレムに來て方伯マルケラの司法權を蹂躙するといふ抗議がイエスに同情してゐるパリサイ派中の民の長老ニコデモの一團から提出されたのに對して、

『ヨハネもペテロも吾が領地内のガリラヤの住人である』とヘロデ王は言つて退けた。

この辯解をなす時にはヨハネを洗禮ヨハネの產れがはりであるといふ考へは忘れてしまつてゐたのである。使徒ペテロは監禁されてゐながらも、自分では必ず拔け出ることが出來ると信じて疑はなかつた。主イエスが己れには附いてゐるとの確信を持つてゐたから、夜の更けるのを待つて脫走しようと樣子を伺つてゐた。彼れは居眠りをしてゐると、

『ペテロよ、町に出ろ』といふ聲を聞いたと自分だけは思つて、手と足とに結びつけられてある鐵の鏈を斷ち切るつもりで手と足とに力をうんと入れたら、ぷつりとそれが切れて體は自由になつた。番兵たちはみんな眠つてゐた。目をさましたら叩つ殺してやらうと思つて握拳をかためて、薄暗い燭火でもそれからなるべく避けるようして拔け出し、錠の下りた扉を一々打破つて、遂に町に出ることが出來た。市中はひつそりと鎭まり返つて、空地々々には假庵が建てられ、それを滿月に

近い月が白く照らしてゐた。

（六）

使徒トマスの一組が行つたエリコ方面に向つて脱走後のペテロは傳道を試みた。それはトマス等の働きを見、その地固めに行くといふ意味のほかに、彼れは自分を捕ひ、仲間のヨハネを殺したヘロデ王の冬宮のあるリビタス附近に行つて見たくなつたからである。彼れはイエスの信徒を迫害するヘロデ王に對して、王の居城の足元に於てイエスの信徒を作つてやらうといふ計劃が胸に湧いたからである。彼れはそれを聖靈によつて導かれるのだと考へてゐた。

相當の成功をおさめてこの傳道から歸つて來た時にペテロは、己が古い妻がはる〴〵とガリラヤから尋ねて、ベタニヤの根據地の家に來て待つてゐるのを見て驚かされた。そして彼女のほかに、ヘロデ王に殺されたヨハネの妻もまた恐る〳〵家の隅に小さくなつてゐるのを怪しく感じた。使徒「ゼベタイの子ヤコブ」はペテロが驚き怪しむ樣を見て、彼れにその理由を告げた。

『おれは弟のヨハネが殺されたので、親爺のゼベダイと女房のアサに知らせようと思つてガリラヤへ歸つて見たんだ、そして一しよに女共を連れて來たのだよ』

これを聞いたペテロは驚のやうな眼で妻のルツを返りみて問ふた。

『どうして來た』

ペテロの妻ルツは自分の良人から多勢の前でこんな風に言はれるのを不平に感じてゐるやうに見えた。彼女はペテロと二人つきりになりたいらしく、周圍の人々を見廻した。けれども他の使徒たちはそれに氣がつかないと見えて、却つて何かを見物するつもりで注目してゐた。ペテロ自身はてんからそんな氣はないのである。彼女は仕樣ことなしに怨みがましい眼を良人に向けながら、積み重るいろ〳〵の事を訴えた。

その要領をつまめば斯うである。第一は、ナザレのイエスによつて病氣がいやされたと謂はれたペテロの母が其後になつて更に重くなり、今は死にさうで、今日か明日かといふ命であるところから、たゞ一目でも悴シモン（ペテロ）に會ひたい、顏が見たいと言つて、ペテロの歸つて來るのを痩せ衰えた細い首をのばして待つてゐるといふことだ。第二は、ナザレのイエスが初めてガリラヤに現れて、ペテロがその弟子になつてから數年この方、少しも家を顧みず、稼業にも精を出さず、今では全然そんなことは投げ捨てゝゐるために、母と妻と二人の子供とは其日々々の糧に窮し、乞食同樣のくらしをしてゐるが、それが乞食でないために却つて饑ゑるやうな場合が時々あるといふ

切迫した困苦と缺乏とに惱んでゐることである。第三は、ペテロは一たい家族をどうするのであるか、妻を捨てたのか、その心が聞きたいといふことである、これに對してペテロは次のやうなことを言つて妻の訴えを悉く退けてしまつた。

『主イエスはおれ達のために家を捨てゝ母を捨てゝ兄弟を捨てゝ女を捨てゝ遂に自らの命を捨てられた。主の下僕であるところのおれ達はその御足の跡を踏んで行かねばならぬ。おれ達は世界の民のために自分の身を犧牲にして十字架を負ふて進まねばならぬのだ。自分の母や妻のことなどを顧みてゐられるものか』

妻ルツはそんな說教くらゐでは納得できなかつた。

『だつてお前さん、おつかあが今死にさうだつてのに構はんで置くのかえ?』

『信じる者は救はれ、イエスにそむく者は罰しられる、おれの母は初めは主イエスを信じた、それで一旦は病氣が輕くなつたのに、今ではイエスを死んだものと思つて、主キリストを信じないから病氣が重くなつたのだ。主を信じない者は亡びの淵に沈むことは當然である。おれには母も妻もない、たゞ主イエスを信じるところの兄弟姉妹があるだけだ』とペテロは言つた。

『でも私たちは親子四人して餓ゑて死にさうです、お前さんは可哀さうと思はないのかえ、お前

さん達は信者の人からみんなお金を集めて澤山持つてゐるつて話ぢやないかね』

『それは教會の人々のくらしに使ひ、また貧しい人達に與へるためで、自分達の家族に與へるためではない』

『するとお前さん、イエスのお弟子の家族になつたものは一ばん哀れな者になるんだね』

『何を言ふんだ、お前たちは自分の良人がイエスのお弟子になつたことを感謝すべきもんだ、それをそんな事を言ふと、主イエスの怒りに觸れるぞ』とペテロは妻ルツを罵つた。

彼女はこれを聞いて兩袖で顏を覆ふて默つて泣いた。周圍の人々は矢張り無言で聞いてゐた。やがて彼女はやけくそのの態度で言つた。

『ぢやお前さん、私を離緣してください、私は私で別に働きのある亭主を持つて、お前さんが捨てたお母あを立派に看病し、子供を養つて行くから……、お前さんは女房を持つてゐながら、女房をほつたらしかして置くのは、一たい何んのために女房を持つてゐるのだね。私はお前さんのやうな亭主甲斐のないやうな男の女房になつてゐるのはまつぴら御免だよ』

ペテロは憤然として怒つた。

『主イエスは言はれたぞ、姦淫のためでなくしてその妻を出す者は妻に姦淫をさせるものだと…

…。だからお前を離縁することは出來ない。勝手なことをぬかしやがると只は置かないぞ』

妻ルツも負けてゐなかつた。

『おや〳〵、そんなら私は間男でもして離縁してもらひませう、ヨハネのおかみさんのやうに、ね、アサさん?』と言つて、一しよに來たヨハネの妻アサを顧みた。

ヨハネの妻アサは苦笑して下を向いた。ペテロの妻ルツはヨハネの妻アサを顧みた時に一間ばかり右の方へ何者にか突き飛ばされ、がんといふ物音が聞えた。それはペテロのために彼女が左の頰桁をがんと毆られたためである。

『叩つ殺すぞ』とペテロは手と一しよにどなつた。

夫婦喧嘩が次第に手荒になつて來たのを見たゼベダイの子ヤゴブが仲裁に入つて、彼等の喧嘩を中止するやうに取計らつた。

『ペテロ、おれはヨハネの女房のアサを連れて來たのは、お前から一つ裁いてもらひたいと思つたのだ。このアサはガリラヤにゐて、今まで間男をしてゐたのだ。おれに告げる者があつて、アサを調べたら白狀したが、早速おれは村の長老によつて裁きをつけようと思つたけれど、それよりか主の下僕の妻の犯した罪だからお前の裁きを受けさせようと思つて引張つて來たのだ』とヤ

コブはペテロに言つてから、部屋の隅に小さくなつてゐる弟ヨハネの妻アサを

『こつちへ出ろ』と言つて、引摺り出した。

ペテロは彼女を睨み殺すやうにして上の方から彼女を見おろした。彼れは自分の愛するヨハネが殺されたことに就て、一そうヨハネを哀れに思つてゐたのに、故郷の彼れの妻は他の男に情をさゝげてゐたのかと考へると、女アサをめちや〳〵に踏みにじつてもあきたりない憤怒の念が燃え立つた。それからヨハネの妻の不行跡から自然といま自分の面前にゐる不貞腐れらしい態度の妻ルツもまた家にあつて何をしてゐたか知れたものではないといふことに氣がついて來たので、彼れは自分の妻に對する疑惑と憤怒と責罰とをみんなヨハネの妻アサ一人の體の上に加へる慘酷な猛獸のごとき衝動が起きて來たのを、彼れ自身は主イエス、キリストの怒りたまふ御業を吾れが代つて行ふものだと解して、燃え立つ激情を押へつゝ、

『主イエス、キリストが惡しき行ひをなした者に對する懲罰が如何に恐しいものであるかを兄弟姉妹に示さねばならぬ。その女を外に引摺り出し　樹の根に結びつけろ』と言つた。

使徒ヨハネの寡婦アサは信徒の手によつて外にある一本の橄欖樹の根元に縛りつけられた。彼女はもう恐怖のために殆ど人事不省であつた。

『その女を石で打殺せ』とペテロは命じた。

二三十人の使徒や信徒が十キウビットほど離れたところに立つて、石を拾ひ上げて彼女の面に向つて投げつけようと身構へると、それまで默つてゐたペテロの妻ルツは燕のやうに飛んで行つてヨハネの妻アサの身を自身の身に覆ふて、

『お前さん、何をこの女にさせようとするのだえ、さあアサさんを殺させるなら、私も殺させておくれ、誰れだつて二年も三年も女房をほつたらかして置く亭主が女房のすることに彼れ是れ言はれる義理なんか無いぢやないか。私だつて心の中でどんな事を思つてゐるか言つたら、私も殺すと言ふだらう、男つてものは勝手なもんだよ、さあこの人を殺すなら、私も一しよに殺しておくれ』と良人ペテロに言つて、それから。

『さあ、みんなもさうだ、お前さん達は主イエスの名にかこつけて自分のしたいことをしてゐるのだ。なるほどお前たちのためには身がはりに立つ有りがたいイエスだね』と罵つた。

ペテロの弟アンデレはヨハネの妻アサに身を伏せてゐる兄の妻ルツを無理に力づくで他に引き放した。それと同時に數十の石がヨハネの妻アサの頭や顏や胸や脚や樅欖根、地上に飛んだ。彼女の皮膚に當つた石が下に落ちると、その當つた白い肌には花が咲くやうに赤い血がほとばしつた。彼女

の悲鳴のほかに遠くにゐるペテロの妻ルツの叫ぶ聲がベタニヤ村を震はした。村民が相呼應して罵り合つてゐるが、それはヨハネの妻アサに同情するのではなく、罪の女が當然の刑を受けるものとして、その痛快の叫びである。群衆の一隅にはベタニヤのマルタ、その妹マリアと、マクダラのマリアが老いたイエスの母マリアの手をとつて、小さく一かたまりになり、顏を覆ふて泣いてゐた。

（七）

ナザレのイエスが生前に都エルサレムへ來るたびにその根據地としたベタニヤのマルタの家に、使徒ヨハネの妻アサが石責に遭つて殺された夜、四人の女が一室に燭火をまん中にして、しめやかにまどゐを作つてゐた。ベタニヤのマルタは、ナザレのイエスが最後の晩餐をなしたシオン山の家の人であるアリマタヤのヨセフの園者であつたけれども、今はそれを斷つて堅氣なくらしをしてゐるのだ。彼女がさういふ氣になつたのは妹マリアの切なる勸告によつたものである。勿論妹マリアも今まで世話になつてゐた民の長老ニコデモの保護から離れてゐるのだ。彼女等が從來の生活を一變して淸い缺乏の生活に入ることを敢て爲し得たことは彼女等の性格と、彼等が信仰する主イエスが彼女の品性を高めたことにも因るけれど、それはまた彼女等と同居してゐるやうになつたマクダ

ラのマリアといふ人間を通して及ぼしたものだ。マクダラのマリアはイエスの母マリアを自分の母のごとく親切にいたはつて、ベタニヤのマルタの家に滯在してゐた。彼女は故郷ガリラヤのマクダラにゐる母のところへは歸る氣がしなかつた。イエスが蘇へつて天に昇つたと思ひ込んでゐる彼女は、何處へ行かうともよかりさうなものだけれど、生前のイエスが寢起きしたベタニヤのマルタの家から離れることは、何んとなくイエスから遠ざかるやうな氣持がして、そのためベタニヤのマルタの家に滯在してゐるのである。イエスの母マリアはまた自分の愛するイエスが死んだ後はマクダラのマリアをイエスの妻のやうに思つてゐるので彼女から去つて故郷ナザレへ歸る氣はしないのだ。

今日の夕方彼女等は使徒ヨハネの妻アサの死骸をペテロに乞ふて、辛じてそれを下げ渡してもらつたので、ペテロの妻ルツと共にその葬儀をすましたのだ。ペテロの妻ルツは姑の病氣が氣になるので、明早朝に出立するといふガリラヤの巡禮者の一行に加はつて歸國するため直に都エルサレムへ行つてしまつた。

『あたしはアサさんが可哀さうだわ』と妹マリアが言つた。

『私はそれよりかも男といふものが憎らしいわ』と姉マルタが大きな碧玉の眼をぐつと横に流して言つて次のやうな意見を吐いた。

『あの人達はイエス樣の名を借りて、男が女に對する我儘勝手な嫉妬の怒りを漏してゐるのですよ。今まで女つていふものが此イスラエルの國でどのくらゐ澤山に男が勝手に定めた律法のために殺されたか、辛い目に遭つたか。この重いくびきを取り去り、女をこの苦役から救ひ出してくださるのが救主であるキリスト樣でなければならぬと思ふのに、イエス樣のお弟子衆たちが自分の身内の女にあのやうな事をするところを見ると、私はイエス樣が疑はれてならぬ。ね、どういふものでせう？』

妹マリアがそれに應じて言つた。

『あたしはアサさんのなされた事を惡いことだとは思ふわ、イエス樣のお弟子たちがアサさんになされた事も仕方のないことだと思ふわ、さうしなくては世のおさまりがつかないでせうよ。あたしがアサさんを可哀さうだと言つたのは、かうすれば斯ういふ罰があると知りながらも、罪を犯さないではゐられない人間の心の淺ましいことを、……これはアサさんにだけ言ふんぢやないのよ、あたし達がさうなの。だからアサさんの事が人ごとだとは思はれないわ』

イエスの母マリアが言つた。

『もしアサさんのしたやうな事のために、女がみんなアサなさんの遭つたやうな死に目に遭はな

けりやならんとすれば、世の中は恐ろしいものだと思ひます。私のイエスがさういふやうな考へで、お弟子達がそれを守つて、アサさんにあんなことをしたものとすれば、私などは恐ろしくて、恐ろしくて、……ほかの人だちに姿を現しながら、この母にばかり姿を見せないことなんかも、私の若い頃の罪を怒つてゐるのかも知れません』と涙を流してゐる。

是等のことを聞いてゐるマクダラのマリアにはぼんやりながら、主イエスの心と此世に救主として現はれた意義とが、使徒ペテロ達の考へたり、爲したりしてゐることゝは丸つきり違つたものであるやうな氣がして來てゐるのである。それは矢張り今日の使徒ヨハネの妻アサの處刑を見て、それを痛切に感じたのだ。

『私は主イエスの思召しも、この世にお現れになつたわけも、お弟子達のお考へとは大變に違つたものと思ひますわ』とマクダラのマリアは言つてから暫く考へてゐた。

他の女達は彼女の言ふことが自分達の意にかなふことなので、彼女が次にどんなことを言ふのかと思つて、次の言葉を待つてゐるやうにみんな彼女の顏を見てゐた。マクダラのマリアは憎い男だと思はうとしても何んとなく憎まれないケリオテのユダの言つた言葉が心の中に生き返つて來つゝあるのを不思議に感じてゐるのだ。そしてその言葉を今こゝに言ひ出してよいものか、或は主イエス

の御心にそむきはしないかと思ひまどふたが、どうもそのユダの言葉が却つて主イエスの御心にかなふてゐるものゝやうに感じられるので、暫く躊躇の後に言ひ出した。

『皆様はケリオテのユダを憎んでゐなさいますから、私がケリオテのユダの言つた言葉が主イエスの御心をほんたうに傳へたものではないかなんかと言へばお怒りになるかは存じませんが、私にはどうもユダの言つたことが却つて主イエスの御心であるやうな氣がするのでございますの。私だとてユダを決して宥してゐるのではないんですけれど、あの人の言つた言葉は私の心に主イエスのほんたうの所を光り照らしてくれてゐるやうに思はれますので……』

『まあ』とベタニヤのマルタの妹マリアが微かに嘆聲を發したが、三人の女ともマクダラのマリアの言葉に異議を挾む風も見えなかつたので、彼女は自分の意見を吐くことにした。

『ケリオテのユダはこんなことを言つてゐました。イエスはおれを惡魔だと言つた、なるほどおれは惡魔のやうな心を持つてゐるに違ひない、そんならなぜおれの心からこの惡魔をとり去つてくれないのか、もしおれを愛する心があるならおれの心から惡魔をとり去つて、おれを惡魔から救つてくれたらいゝぢやないか、それをさうしてくれもしないで、おれの心に惡魔が時々入り込むと言つて、おれを憎んでゐるのはわからない話だと、ユダは言ひました。私はイエスの心を知

つてゐました、ユダはそれを知りませんでしたけれど……、イエスは御自分でもユダを憎む心が自分にあることをいやに思ひ、どうかしてユダを愛したいと苦しんでゐらつしやいました。それでイエスが一旦死なれたのも、人間の心の中にある惡魔から拔け出て新しい人間に生き返るためなので、イエスが蘇へりになつたのは、それをお示しになつたので、それで今はイエスを信じ、イエスにお願ひ申せば、みんなが心の中にある惡魔から拔け出ることが出來るやうになるのだと思ひます。それで人間は主イエスを信じさへすれば、今までの罪は宥され、これからは再び罪を犯さないでいゝような心に改めてくださるのだと信じます。これが主イエスが救主キリストでゐらつしやるわけなんですわ』

『ぢや、アサさんのあやまちを許してやるのが主イエスの御心ぢやなくつて?』とペタニヤのマルタの妹マリアが言つた。

『さうだとも、さうにきまつてゐるぶね』と姉のマルタが言つた。

『ほんたうにさうだとすれば私は嬉しうございます。もしさうでないとすれば、昔つからの律法で責められてゐるのと變りはございませんものね』とイエスの母マリアが言つた。

マクダラのマリアはそれらの言葉が耳に少しも入らないらしく、猶ほ言葉をつゞけた。

『ケリオテのユダはまだこんなことを言つてゐました。イエスの「神の國」といふのは、人の心に人を愛する「神の愛」が宿ることが即ち人の心に「神の國」が出來るので、それが一人から二人、三人とだん〳〵多くなつて行くにしたがつて、その人達の中に「神の國」が出來るといふのだと。……そして「神の愛」といふのは良い人間を愛するのは無論のことだが、惡い人間も愛して、その人間から惡魔をとり去つて良いことが出來るやうにしてやることだと、ユダは言ひました。私は主イエスの思召しも此處にあるものだと考へます。ですからペテロやそのほかのお弟子達が惡いことをしたものを教會から破門したり、殺したりするのは主イエスの御主旨にそむいたことぢやないでせうか。私はケリオテのユダの言つた言葉が今やつとわかつたやうな氣がしますわ。主イエスの御心もそこにあるんだと考へられるやうになりました』

『さうだとすれば、私達も心がらく〳〵して、イエス樣を有りがたいお方だと思はれますわ』とペタニヤのマルタが言つた。

『だつけど、あたしはケリオテのユダを、イエス樣を賣つた男だと思へば憎らしいわ』とマルタの妹マリアが言つて、投出した片脚を引込ませて部屋の隅の方を見つめた。それはケリオテのユダの面影を思ひ浮べようとするやうに見えた。

マクダラのマリアはちらつとマルタの顏を見てから言つた。

『でも、イエス樣が十字架におかゝりになつて一旦お死にゝなり、そして生き返ることが、前々からの御計劃であるとすれば、ケリオテのユダのしたことはイエス樣の御計劃をたすけたことになるんですもの。それにイエス樣のお心は惡い者でも愛するようにとの事でせう?』

イエスの母マリアは憎く〳〵しさうにして言ひ放つた。

『わけはどうでも、私はイエスを渡した男だと思へば憎らしい』

此時マルタ、マリアの兄であるラザロが外から入つて來た。彼れは大きな葡萄園に使はれてゐる勞働者で、妻と共に別に一家を持つてゐるが、一度死んだのをイエスのために蘇へされたと思つてゐるので、イエスを主キリストとして非常に信仰してゐるのだ。彼れは部屋へ入つて來たけれども、何か不快のことがあるやうな顏をしてゐるのを見た妹マリアは

『兄さん、どうしたの』と問ふた。

愚直さうなラザロは思ひ惑ふやうなどんよりした鈍い目を天上へ向けてから床に落して言つた。

『主は、朽ち腐れる寶を地に貯へるなとか、富んだ者が天國に入るのは駱駝が針の穴をとほるよりもむづかしいと仰しやつた。けれど教會で一ばん尊まれるてゐるのは、お金を澤山神樣へ獻げ

た者だ。おれは今日お弟子衆から「お前は何を獻げた、主のために何を盡したか、たゞ教會のやどかり蟲ぢやないか」と言はれた。おれは「御尤でございます、私は貧しい者で何も獻げる物を持ちません、そのかはり神樣から達者な體を與へられ、命を蘇へされましたから、體で出來ることなら何んでも致します、どうぞお命じなすつてくださいまし」と言つたら、今夜から寢ずに三日の間に一つの教會堂を建てる勞役を命じられた。おれのやうにして五十三人の貧しい人が汗を流して今夜から働くのだ。おれ達は主のためには血を吐くほどに働くことを悅ぶんだけれど、お弟子衆からあんな物言ひをしられるのがくやしい。貧しい者は世の中に生きて不幸な者だが、神の國にあつても矢張り不幸だ』

かう言つて彼れはぼろ〳〵涙を流した。

（八）

それから數日後のことであるが、都エルサレムのベセタ山の下町にある民の長老ニコデモの家に彼等の仲間が集つた。民の長老ニコデモは、曾てイエスに『新に產れなければ神の國に入ることが出來ない』と答へたところのニコデモである。集つた一人のパリサイ派の酒造家エサウは『心をつ

くして只一つの神を愛し、また己れのごとく隣を愛するのは、總ての燔祭と禮物とを神に獻げるよりも優つてゐる』と言つた時にイエスが『お前は神の國から遠くはないものだ』と言つたところのエサウである。集つた一人のサドカイ派のアリマタヤのヨセフはイエスをして最後の晩餐會を開かしめるために一室を貸し與へたところのヨセフである。集つた一人のベツレヘムのタビテは曾て『限りなき命を得るには?』とイエスに問ふたときに『お前の持つてゐる物をみんな貧しい者に分け與へろ』と言はれて、イエスの前を去つたので、イエスに『富んだ者が天國に入るのは駱駝が針の穴を通るよりも困難なことだ』と言はれた富める青年である。是等の四人はイエスが十字架にかけられて死んだ時に、その死骸をポンテオ、ピラトからもらひ受けて鄭重に葬つたところの連中である。

上流階級や智識階級の中で、ナザレのイエスをキリストであつたと信ずる者は少ない。このニコデモの一團の人々も矢張り左樣であるけれども、しかしナザレのイエスを洗禮ヨハネよりか偉大な豫言者であつたといふくらゐのところまでは信じてゐるのである。それでイエスの復活に就ても、それをほんたうに蘇へつたものとは考へてゐないで、弟子か何かゞ盜み出して、そんなことを言ひ振らしてゐるものだと思つてゐる。故にナザレのイエスが死んでしまつた今日に於ては、彼れは最

早この世にゐない者であるから、この世にゐない者をさも世に活きてゐる者であるかの如く、彼れを信仰禮拜するところのイエスの徒の仲間になる氣はないのであるが、だと言つて學者のタルソのサウロのやうに、イエスの徒が國家や社會または人心に惡影響を及ぼすものとして、彼等を掃蕩してしまはねばならぬとは、また考へてゐないのである。

しかるに素晴らしい勢を以てダマスコ征討に進擊したタルソのサウロが途中に於て神罰を受けて失明した上に、鬼につかれて亞剌比亞の野にさまよひ出て、もう都エルサレムへ歸つて來もせず、行方もわからなくなつたことゝエルサレムの信徒が殖ゑて來たことゝに對して、ニコデモの一團は驚きもしたが、また多少悅びもしてゐた。けれども今度は反對にイエスの敎會に屬する者が普通の人々に向つて迫害をするやうな傾向を呈して來たことに就ては、彼等は少なからず迷惑を感じた。それは彼等がイエスの敎會員にならうとは思はないからである。彼等が今日ニコデモの家に集つたのは、そんな事に關する相談もあつたからである。

『ことによると、ナザレのイエスはキリストであるかも知れないね』と酒造家エサウがいろ〳〵の世間話のあつた後で言つた。

するとベツレヘムのダビテが『わからないことを言ふな』といふやうな顏をして、

『では、あなたは一たいキリストを何んだと思つてゐらつしやるのですか』と問ふた。

かう改めて問はれると、それに就て確な智識を持つてゐないエサウにとつては明かに答へることが出來ずに、ニコデモの方を顧みた。それを知つた民の長老ニコデモは薄い長い髯を撫でながら、

『イスラエルの王で、羅馬のくびきの下からイスラエルの人民を救出し、羅馬が今日あるごとくに、イスラエルの王が世界の王の王となり、このユダヤが世界の帝都となる、その偉大な王となるべきものがキリストで、またこのキリストは神に代つて最終の審判を行ふのであつて、律法を守らぬ者は裁かれて地獄に投げ込まれ、義人は天に擧げられて限りない命を得るのであると、私は思つてゐます』と答へた。

これを聞いてゐたアリマタヤのヨセフは、

『それで、キリストであるところのナザレのイエスを信じる者はたとひ律法を守らなくても、その羅馬から宥されて限りない命に入ることが出來ると彼等は言つてゐるのです』と言つた。

ベツレヘムのダビテは幾度かうなづいてから說き出した。

『して見ると、あなた方のキリストには二つのことが含まれてゐますね。一つはユダヤの王となるべきキリスト、一つは信ずる者は罪を宥されるといふキリストです。しかし能く考へて見ても

ださい、ナザレのイエスが假にキリストであるとして、もう死んでしまつたイエスがユダヤの王になつて見ようがないぢやありませんか、それを見てもユダヤの王となるべきキリストはナザレのイエスなんかでは無いといふことが明かでせう？　ナザレのイエスがキリストでないとすれば、彼れを信じても罪を宥される筈もありませんし、既に死んだイエスを信ずると言つたつて、それは信ずる者が自分で信ずると思ふてゐるだけで、死んだイエスがその人をどう斯うする事が出來るものですか』

民の長老ニコデモが、

『では、ダビテさん、あなたはナザレのイエスをどう思つてゐるのですか、キリストはどんなものであると考へてゐられるのですか』と問ふた。

ベツレヘムのダビテは自分の考へを纒めるつもりか、暫くだまつてゐたが、やがて言つた。

『私は斯う思つてゐます、いまにイスラエルの王となるべき偉大な人物が現れて、現在の羅馬のやうに世界を統一する時代があるかも知れません、故にその偉大な人物をキリストと稱するならば後日にそんなキリストが出現しないとは限らないと思ひます。しかし人間の幸福、ユダヤ人の吾れ〳〵の幸福といふことを考へると、そんなキリストが現れたとて、そのために幸福になると

は思はれません。世界を統一してゐる今の羅馬人が果して幸福でせうか、彼等の支配の下にある私共が果して幸福でありませうか、人間の幸福が國家の良し惡しに影響されないことはないかも知れませんが、人間の幸福が全部それによつて支配されるものとは考へられません。羅馬の全盛時代である今日、幸福であるのは羅馬の貴族、即ち政權を握つてゐる者だけであります。ユダヤの吾れ〳〵の國に於ても、祭政の權を有する祭司や貴族は幸福に生活してゐます。たとひキリストが現れて、ユダヤを世界の王國としても、そのために幸福を得る者はキリスト及びその周圍の人々だけであります。英雄が現れゝばその英雄及びその周圍の人々は幸福でありませうが、それだけ多くの人民はそのために犧牲となつて、命や財産や幸福をみんな彼等に搾りとられてしまふものであります。あの埃及のピラミツトの雄大を御覽なさい、このエルサレムの神殿の壯麗を御覽なさい、これは埃及の英傑、ユダヤのヘロテ大王が自己の勢を誇り、紀念せんがために、幾千幾萬の人民の血と汗と生命と財産とを奪ひとつて築いたもので、一つの石、一枚の板の間には哀れな人間の涙と血とがしみ込んでゐるのです、私は斷言します。ユダヤの王となるべき英傑をキリストとするならば、そのキリストは人民を惱ますキリストであります。かのアレキサンダーが如何に多くの人間の生命を蹂躙したかを考へてみればわかることであります。吾がイスラエル人が

異邦人の生命を亡ぼして、世界の王國の民となつたとて、そこに何んの幸福があるものですか」

彼れは次第に亢奮して、他の三人は彼れの辯舌にだん〳〵引込まれて默つて謹聽した。

『それで私共の幸福や生活に命を與へるものは第二のキリストで、即ち吾れ〳〵を罪から救ふところのキリストであります。けれどもユダヤの王となるべきキリストではこの第二のキリストを兼ねることは出來ません。自分の國を良くするために他の國を亡ぼし、自分が幸福になるために他の者を殺すといふ英雄的のキリストが人間の罪を救ふやうなキリストになれるものではありません。それでこの人間を罪から救ふべきキリストは全然それとは別な者であります。そこで私共はどうしたならば幸福な生活が出來るかといふことを先づ考へる必要がありますが、これを根本的に言へば人間の罪から離れることであります。罪はどこから來たか、禁制の律法があるからです、故に律法を無くすればそこに罪は無くなるのです。だからキリストの第一の事業は律法を廢することです。第二に人間の不幸は互に他を害し合ふことにあるのです、故に互に他を愛し合つて、他の害になるやうなことせず、自分は多少不自由しても他の利益になるやうに愛を以て何事でもなせば、そこに幸福があります。だからキリストの第二の事業は人間の心に愛を植ゑつけることであります。人間の病氣や生命はこれは生きてゐる者の必ず遭遇すべきもので、太陽がある

故に夜もあるやうなものです。故に病氣や死から免かれようとするところには幸福がありません、病氣や死を仕方のないことゝしてそれをいさぎよく受け入れるところに人間の幸福はあるものです。故にキリストの第三の事業は人間が病氣と死とから免かれようとする心を變へて、死と病氣とは仕方のないことゝして、あきらめるやうにならしめるものでなければなりません。病氣をなほすことや限りなき命を與へるなどゝいふことは一時の子供だましでしかない無價値なものと思ひます』

彼れは此處まで言つて、臺の上に載せられてあつた葡萄酒の杯をぐつと呑み干した。

『それでナザレのイエスをキリストと信じる者には、イエスの言葉を實行しようといふ力が自分の心に湧きます、これはイエスが與へる力ではありません、死んだものがそんな力を與へ得るものでもなく、また生きてゐたつて與へられるものではありません、信じる者が自分で自分の力を引出すのです。そして律法に捕はれず、人々を愛し、病氣と死とを恐れなくなれば、そこにイエスから救濟があつたことになるのです。律法に捕はれず、人々を愛せといふことはイエスが生前に說き、行つたことでありますし、病氣や死を恐れないのはイエス自身が十字架の死から逃げようとしなかつたことによつて、人々の心に其力を起させるのです。故にイエスをキリストと信じ

る人にはイエスがキリストとなり、イエスを普通の人間と思ふ人にはイエスが普通の人間となるのです』

彼れが言葉を切ると、酒造家エサウが、

『でも、タルソのサウロが神の罰を受けたのはイエスの徒を迫害したせいでせう？』と問ふた。

『それはタルソのサウロがイエスの徒を迫害しながらも、心の底にはイエスがキリストであることを信じて、絕えずそのために心を惱ましてゐるのを自分は知らんでゐても、彼れの心は彼れをダマスコの途上で打碎いたのですよ』とベツレヘムのダビテは答へた。

（九）

ケリオテのユダはダマスコ街道にあるアバルヘテマアカの驛に於てタルソのサウロに遭つて彼れを罵つたために、宿の主人である自分の雇主から追出されてしまつた。彼れは何處へ行つても追出されることは幼少の頃から慣れきつてゐるので、こんな事くらゐは屁とも思つてゐないやうになつた。彼れは今度は何處へ行かうかと考へた。彼れは人々の噂に、タルソのサウロの大迫害に遭つて都エルサレムのイエスの信徒はみんな諸方にちり〳〵ばら〳〵に散つてしまひ、そのためにダマス

コに多くの信徒が集つてゐるといふので、タルソのサウロはダマスコへ行くのだといふことを聞いた。それで彼れは都エルサレムへ行つても今度は自分の身が安全であるかも知れないと思つて、足をエルサレムの方へ向けて歩き出した。

彼れは長い旅を歩きながらいろ〳〵のことを考へた。……おれはかうして一たい末はどうなるのだといふことを一ばん多く考へた。……末は死ぬまでのことだと彼れは答へた。……そんなら死ぬまで生きてゐるのだな、その生きてゐる間どうするのだと考へた。……生きてゐる間は生きてゐるのだと答へた。……生きてゐるには違ひないが、どういふやうに生きてゐるのかと考へた。……どうせ同じ生きるなら、出來るかぎり樂しく生きることだねと答へた。……そんならお前は今まで樂しく生きて來たかと考へた。彼れは此處まで來ると、ぺつと唾を吐き、それでも足りずに石を拾つてガリラヤ湖の方へ向けて投げつけたが、石は湖水に落ちなくて石河原に落ちて、這へ廻つてゐた蟹を驚かした。

……それは少しや樂しいこともあつたが、それは澤山の貝の中にある只一つの眞珠のやうなもので、後は貝殼の數のやうな苦しいことが山とあつたと答へた。……どうしてお前の苦しみは生じたのかと考へた。……人から可愛がられたかつたけれども、みんなおれを憎んだ。おれは人を可愛が

りたかつたけれども、みんな憎くかつた。そのせいに違ひない。最後の日のことが今でもおれには胸をゑぐられるやうに突き刺される。イエスはおれを愛さうとして愛されなかつた、おれはイエスを愛さうとして愛されなかつたと考へた。……そんならあんな偉いイエスでさへもみんなを愛すことが出來なかつたのだから、人間つてものは元來お互を愛し合ふことの出來ないものだかと考へた。……人間を作つたと謂はれてゐる神樣つてものが、一たい良い事をした者だけは可愛がるけれど、一ぺんでも悪い事をした者はひどい目に遭はせ、その悪い奴一人をひどい目に遭はせるとて、罪もないほかの澤山な人間や鳥獸までも亡ぼしてしまふやうな、馬鹿げたもんだもの、人間がお互を愛し合ふことが出來ないのは無理もないことだと答へた。……すると人間は互に愛されないものとすれば、おれが人を愛さないことも、人がおれを可愛がらないことも當り前のことだが、そんならおれは死ぬまで幸福にはなれないのか知ら？　と考へた。……だが、澤山の貝の中にある只一粒の眞珠のやうな幸福がおれの今迄の生涯にあつたとすれば、それはどんな時であつたかと彼れは猶ほ考へた。

彼れは、それは民の長老ニコデモの牧場の羊飼ヤコブ老人の家に住んでゐた時であつた、殊に其家で、今はペツレヘムのダビテの妻となつてゐるサラと同棲してゐた時のことであつたと考へた。

……それがどうして幸福であつたかと考へた。……それはほんたうにヤコブ老人はおれを可愛がり、おれはヤコブ老人を可愛がつてゐた。あのサラだつてさうであつた、後にはおれを捨てゝダビテの妻になつたけれども、おれの妻になつてゐた間は眞實におれを愛してゐたのだ。さうだ、人間には決して愛の心が無いとは言はれない、ヤコブ老人のやうな人間があるぢやないか、男と女とほんたうに戀し合ふ中にもあるぢやないかと考へた彼れの顏は晴れ〳〵と輝いて來たが、忽に醜く曇つて來た。……馬鹿な、今迄のことを忘れるな、貴樣は人間は誰もヤコブ老人のやうなものだと思たからこそ、イエスを怨んだり、他の多くの人達を怨んで自分を不幸の者にしたぢやないか、男女の間の戀がいつまでも變らないものだと思つたからこそ一時はサラやダビデを怨んで苦しんだぢやないか。今になつて同じ失敗をくり返すな、用愼をしろと彼れの心は言つた。

彼れは、ぢや人間に愛を求めるのは絶望かしら？　と考へた。いくら稀れでも世の中にはその愛を持つたヤコブ老人があるぢやないか、いくら短い月日であつてもそこには戀があるぢやないか、ナザレのイエスは完全にそれを現すこ　とは出來なかつた。そのために苦しんだ、ほんたうに苦しんだ、けれども彼れはその完全な愛、イエスが新しく造つた「神」の愛を求めて、それを求め〳〵るためにたうと十字架の死をさへ厭はなかつたぢやないか、イエスとマクダラのマリアとの中にある

戀は永遠のものぢやないだらうか？　おれには出來ない、出來ないことだが、イエスが求めて求め得ないで、いや死ぬ時は求め得たかも知れない、惡い者も良い者も一樣に愛する神の如き愛をおれは求める、それを求めるためにおれは死ぬまで生きてゐよう。おれは自分のため人のために勞役をなして此世を送り、惡い者にも良い者にも愛を注ぐところの神のごとき愛を少しでも人に注ぎたい、人からも愛を受けたいものだ。また人達にそれがイエスの求めてゐた愛であること、神の國であること、限り無き命であることを示したい、敎へてやりたい。おれはそれを張り合ひで死ぬまで生きて行かうと、しつかりした答へを心に得た彼れは、大地を兩脚でどしん〳〵と踏んまいて胸を擴げて兩腕でその胸を音のするほど叩いた。太陽はゲネサレの野を綠色に輝かした。

彼れは悅びと力とを得て都エルサレムに着いた。彼れは先づ城外のベツサイズの池の傍に立つた。そして彼れが羊飼ヤコブ老人のところにゐた頃、羊を連れてエルサレムに登り、この池の傍に休んでゐた時に、羊の賣代金をサマリアのバラバの徒のために奪はれて泣いてゐると、エスセネス派の道者が『お金のことなど思はず、神のことを思へ』と說敎し、ベツレヘムのダビテは『神の言葉よりもお金の方が大切だ』と言つて、おれにお金をくれておれを救つてくれたことがあつたつけ、なつかしい昔のことを思出した。それからイエスがこの池の周圍にゐる病人の中の一人の病氣をなほして

やつたことなども思出した。そして彼れは『人間はお金があつて、達者だけりや、つまり幸福だね』などゝ考へた。……イエスが『朽ち腐れる寶を地上に貯へないで、朽ち腐れない寶を天に貯へろ』と言つて、お金をいやしめたり、また『肉につけることを考へるな』と言つて、人間の體を大切にすることを退けたりしたのはわからない話だと思つた。けれども彼れは猶ほ考へを進めて行つた。……矢張り惡い寶を捨てゝ良い寶を貯へろと言ふのだから、お金が良い寶ならそれを大切にしてもよいわけだ、つまり慾を捨てるのではなくて、ます〳〵慾を深くしろと言ふことなのだ。それから『肉につけることを考へるな』と言つても、イエスは自分で自分の體を十字架にかけさせて、そのおかげによつて人達を救はうとしたのぢやないか、さうしてみれば人間の體は大變に値打のあるもんぢやないか、値打のない物を捨てるのなら、誰がイエスの死に感心するものか、イエスの死を感心するためには、人間の體が何よりかも値打のあるものだといふことになつてゐねばならぬのだ。イエスは言葉の使ひ方を知らなかつたから、あんなことを言つたのだけれども、サマリヤのバラバのやうに自分の命を粗末にするのではなく、イエスは誰よりかも自分の命を大切にして、一ばん値段を高く賣つたわけぢやないか、おれは人間の體を死ぬ日まで大切にしなければならぬものだといふことを、イエスの十字架の死から悟ることが出來たと考へた。

彼れは自分の體を大切にするにはのらくらしては駄目だ、働くに限ると思つた。彼れは城内へ入つて、市場の雜踏の中に進んで、勞役者を賣買する場所に出て自分の身を民の長老の傍にゐる書記の前に向けた。そこには男女の勞役者や下僕、下婢などが雇主や主人の選定にあづかるのを待つてゐた。他の一方には勞役者を要する雇主、下僕、下婢を求める主人主婦などが集つて、民の長老や書記に何事かをしやべつてゐた。ケリオテのユダはどんな雇主に自分が選ばれるか、その雇主の如何によつて自分の將來の幸福が定まるやうな氣がするので、多くの雇主の群れの中をあれかこれかと眼で選定してゐた。

すると多くの雇主の群の中で、一きわ背の高い四角な顏をした男の火のごとき赤い光が出るやうに感じられる二つの目と彼れの目とがぶツつかつた。その男の眼はユダの目を見ると、ぐつと飛出すやうに目玉が動いた。ユダはその目に引かされたので、ぢつとその男の目を見つめたが、いつ迄も見つめてゐることが出來ずに、視線を下に落した。かの男は民の長老と書記とに何か言ふと、書記が長い棒を上げてユダを指して、近く來るやうに合圖をした。そこにはかの男がもう進んで來てゐた。近づいたユダを見ると、かの男は、

『お前はおれに使はれないか』と問ふた。

『え、よろしいです、旦那は？』とユダが問ひ返した。

『おれはミヅパのサルモンといふ革師だ』とかの男は敎へた。

（十）

ケリオテのユダは都エルサレムから一哩ほど北に離れてゐるミヅパといふ村のサルモンといふ革師の仕事場に雇はれた。此處は獸の皮を剝いでなめす仕事場とその革を以ていろ〳〵の器物を製作する仕事場と二つあるが、彼れは革具の製作の方へ雇はれた。同僚は三人で、その中の一人は專門の技術家であつた。最初彼れはミヅパのサルモンに雇はれて其家に來た時に、

『旦那、お前さんはケリオテのユダつて人間を知つてゐるかね。おれはナザレのイエスの弟子であつて、イエスを祭司たちに渡したイスカリオテのユダつて男だぜ、い〻かね』と自分の素性を主人サルモンに明かした。

『へえ、さうか、まあ何んでもい〻、よく働いてくれさへすりや、おれんところぢや誰れでも構はん、居てもらふのだから』と主人サルモンは心よく彼れを使つたのである。

タルソのサウロが都エルサレムを去り、ダマスコに於て行方がわからなくなつた以來、再びエルサ

レムにはイエスの徒がクリスチヤンと稱して其數を增し、勢力を得るやうになつて來た。遂にこのミヅパのサルモン一家の中へも浸入して、主人夫婦から雇人までがみんな信者になるやうな有樣となつた。主人サルモンはユダに對して何んにも言はなかつたけれども、革具の技術家であるノブのアミナブダは時々ユダに『お前はなぜ主イエスを祭司に渡したか』だの『お前はなぜ主イエスを信じないのか』だのと問ひ責めた。このノブのアミナブダは仕事の腕は確かなものであるが、少しく馬鹿だと、ユダは心の中で嘲つてゐた。

タルソのサウロがダマスコから姿を隱したり、使徒ヨハネがヘロデ王に殺されたりなどした年もくれて、翌年の春の過越祭が來たが、サルモンの家ではたつた一人の子供が死んだので、家の中はすつかり陰氣になつてしまつた。それでも過越祭のお祝は普通にやつて、中日の一日は仕事が休みであつた。職人のノブのアミナブダとユダとは一本のシカモールの樹の根に體をもたせかけて、いろ〳〵話をし、口論をやつた。アミナブダがユダに話を持ちかけるのはきまつて、

『お前はなぜ有りがたい主イエス樣を信じないのか、罰が恐しくないか』といふ事だ。

ユダはこの問に會ふと、いつもうるさいので、い〻加減なことを言つてごまかしてゐたが、今日は心も落ちついて、氣ものびの〳〵としてゐるので、自分の考へを漏す心になつた。

『イエスを信じる、一たい信じるつてのはどういふ事だね』とユダは先づ問ひ返した。

ノブのアミナブダはこれを聞いて呆れた。

『イエス様を信じるつてことはイエス様を信じることぢやないか、イエス様はキリスト様だ、律法を守ることの出來ない私達のやうなものでも、イエス様を信じれば、末の世のさばきに天國へ入れて、いつまでも死なゝい命を與へてくださる有りがたいお方だ。お前なんかは其イエス様を祭司に渡すやうなえらい惡いことをしてゐるんだ、早く悔い改めてイエス様をキリストだと信じて、罪の宥しを願つたらどうだね、惡いことは言はんぜ』と言ひさとした。

ユダは嘲けりながら答へた。

『馬鹿だなあ、人間は死ねばそれつきりなもんだよ、キリストなんてものは昔の預言者が氣休めに夢のやうなことを言つたもんだ、そんなことを眞面目に信じてゐたら、幾何萬年たつても埒はあきやしないぞ。イエスはイエスだ、そりや偉い人だ、おれはイエスの言つたこと、したことで此世に活きてゐるのにどんなに力を與へられてゐるか知んねい。悔い改めて信じるも信じないもあるもんか、信じたつてそれが何んになる、おれの目から見ると、クリスチャンと言つてゐる者にろくな奴はありやしない』

ノブのアミナブダは驚きと怒りとで、口をもぐ〳〵と慄はして、暫くは言葉が出なかつたが、やつと息が出來て言葉を出すことになつた。

『この野郎、とんでもない事をぬかしやがる、血へどを吐いて死んでしまへ。ぢやおら旦那はろくでもない人間かね、え?』と體をユダの方へ乘り出して來て問ひつめた。

『お前には話が出來ないなあ、おれはいつ旦那をろくでもない人間だと言つた? おれはクリスチャンにろくな者がないと言つたのだぞ、それは旦那はキリスチャンだ、けれども旦那からクリスチャンを取り去つても澤山に旦那の値打は殘つてゐる、旦那は偉いんだ、けれどもクリスチャンのところだけは馬鹿げてゐるよ、だつてクリスチャンのところを除いても、旦那の偉いところは澤山あとに殘つてゐらあ』とユダは言つた。

ノブのアミナブダは解し兼ねるやうに幾度か首をあちこちに傾けなほしてから問ふた。

『ぢや、クリスチャンとしての旦那のどこが馬鹿げてゐるね、え?』

ケリオテのユダは大きな鍵鼻の頭を右の拳で一つこすつてから說明をした。

『子供をなくした時を見ろ、おかみさんは子供が死んだ時に悲しくて泣いたらう? それは當り前のことだ、自分の可愛い子供が死んだのだからね。ところが旦那はどうだ、クリスチャンにな

らぬ前は心の素直ないゝ人であつたのが、何んてこつた、「こら、何を悲しむのだ、子供はキリスト様のお側へ行つたのだ、悦べ」と言つて、矢張り泣いてゐたぞ。子供が死んで悲しい心を無理にごまかして「悦べ」なんかと言つてゐる、嘘を言つてゐる、イエスは「僞善なる學者とパリサイ人よ」と罵つた、それは直にクリスチャンに對する罵りの言葉だ。よく考へて見ろ、子供が病氣の時に「イエス様、どうぞこの子を たすけてください、多くの病人をいやしなされたイエス様、どうぞこの子の病氣をなほしてください」と旦那もおかみさんと一しよにお祈りをしたでないか、天國へ行けるものなら、なにも病氣をいやしてくれとお願ひする必要なんかないぢやないか。病氣をなほしてくれとお祈りをするのは子供を殺したくなかつたのだらう、そんなら死んだ時になぜ思ひ切つて悲しみ、泣かないのだ、「悦べ、天國へ行つたのだ」なんかと自分の心をだまくらかすつてがあるか、馬鹿め。それでも病氣がなほれば、イエス様にお祈りをした甲斐があつたと益々イエス様を信仰する氣は起るかも知れないが、病氣がなほらんで死んだら、イエス様が聞き屆けなかつたのか、またはイエス様がキリストでなかつたかでなけりやならん、さうなるとイエス様を怨むか、疑ふか、或は丁度いゝ都合に言譯を作つて、自分の正直の心をごまかさなけりやならんぢやないか』

革職人のノブのアミナブダは首を左右に振つて、

『おれにはお前の言ふことがわからない。ちやなにか、人間の力になつてくれる神様のやうなものはお前にはいらんのか』と問ふた。

『馬鹿だなあ、人間の力になるやうな神様なんかゞあるもんか、人間はお互に愛し合ふことろに力が出來るもんだ、お互に仲よくして愛し合つてゐたら、病氣にも死にも慰め合つて、悲しみや苦しみを分けられる、病氣も死も願つて逃げられるもんでもないし、嬉しいもんでもないのだ、病氣の時や死んだ時は思ふさま泣けばいゝぢやないか、自分の心をごまかしたりなんかするのは、イエスの言つた僞善者だよ』とユダは吐き出すやうに言つた。

革職人のノブのアミナブダは其時つと體を木の根から離して、ユダの顏を覗くやうにして、

『お前はさつきから僞善者、僞善者と言ふが、それは何んのことだね』と問ふた。

ユダは笑つて答へた。

『僞善者か、僞善者つて言葉はね、イエスが學者やサパリサイ人を罵つた言葉なんだ、一かど良いことをしたつもりで、自分の正直な心をごまかしてゐる人間のことだよ。おれは律法を守つてゐるから義人だと彼等は思つてゐる、しかし自分の正直の心は「お前は律法をほんたうに守つてゐ

るかね」と奥の方で問ふてゐる、それを耳に入れては大變だから無理に「おれは律法をこの通りに守つてゐる」と七面倒な表面の形式を守つて、そして自分の正直の心をごまかしてゐるのだ。ところがナザレのイエスのやうな偉い人がその僞善を責めたてるもんだから、彼等はイエスが恐しいのぢやない、折角ごまかした正直な自分の心がむく〳〵と頭を持上げて來ようとするから、うろたへてイエスを捕へて殺さうとするのだよ。今のクリスチヤンが矢張りこの僞善者だぞ、お金なんかつまらぬものだと言つてゐながら、そのお金を教會へ獻げるのは、そのお金を獻げた功德によつて商賣繁昌、家内安全、無病長生、天國往生を買はうといふのだ。お金を集めるイエスの使徒たちは、お金はつまらぬものだ、そんなものを貯へて置くなと言つて集めて、そのお金をいろ〳〵のことに使つてゐるぢやないか、さうすりやお金はつまらぬものぢやなくて貴い物だらう。つまり「お金はつまらぬものだ、地上にそんなものは貯へるな」と言ふのは、人達からお金を搾りとる口實なんだ。しかしさう思ふと、自分の正直の心がそれを咎めるから「主イエスのため」と言つて、正直の心をごまかして、自分は主イエスのために何んでもしてゐるのだから、それは正しいことだと無理に心に思はせてゐるんだ。彼等は自分の心をごまかしてゐる僞善者だよ」と彼れは職人アミナブダの存在などは忘れて熱して罵つた。

（十一）

ダマスコから西南のシリア國の盡きるところから亞剌比亞の大砂漠が續いてゐる、赤い岩石と黄色い砂漠との無人の國境に、僅か腰に布を覆ふたゞけの男がさまよふてゐた。それはダマスコのアナニアの家から駈け出したタルソのサウロである。彼れは一日に僅少の木の實の食をとるだけで、饑ゑと渴きと炎熱と孤獨とに己が體と心とを苦しめてゐた。彼れの苦しみは思想の疑問となつて心に現れないで、體の苦しみとなつて肉體に現れて來た。彼れはその肉體の苦しみに耐へるために自分から進んで、この砂漠に於て自分の體に外部から苦しみを與へて、内部から湧く體の苦しみを忘れようとした。彼れは胸の底や頭の中から體の苦しみが生じて來るやうに思はれるので、この苦しみを外部から肉體に苦痛を與へて、それをごまかすのは、要するにごまかすのであるから、その際を見ては矢張り内部から苦痛が湧いて來る。故に根本的にその苦しみの内發する原因を探求して、それを解決し、内部から起る肉體の苦痛をいやさねばならぬと思ひ立ち、この孤獨で寂寥な砂漠の地にとゞまつて何等かの解決を得て、肉體の内部的の惱みから脱却したいものだ、その解決を得るまではこの砂漠から出まいと心に決した。

彼れは揶子の實をとらうとして、下から石をその大きな實に投げつけてゐると、妙な音が空中から聞えるやうな氣がして、其方を見た。すると直ぐ彼れは顏色を變へて逃げ出したが、既に自分の間近に襲ふて來たことを感じたので、振り返つて石を投げつけた。彼れを襲ふて來たのは一羽の大きな禿鷹であつた。猛鳥は目を光らせ、嘴と爪とを尖らせ、羽毛を一本々々に逆立たせて、彼れの目を狙つて突き進んで來てゐる。彼れは石の一つや二つくらゐ投げたとて、とてもこの猛鳥から逃げることは出來ないと知つたので、一疋の牡獅子と共に棲んでゐる洞穴までは逃げて行くことが出來ないと見た。それで『生命は神の支配するところだ』といふ覺悟を定めて、岩と岩との間へ自分の身を投げ込んだ。するとその岩蔭から何物かゞ躍り出して、シリヤ國境の山々、亞剌比亞の砂漠の果までも響くやうな壯烈な吼え聲を立てた。彼れが暫くして後を振り返つて見れば、禿鷹は西の空に小さく黑く遠ざかり、彼れの傍には彼れと同棲してゐる牡獅子が目を細くして彼れの體に鼻を近づけてゐた。彼れは神と自分の生命との關係を考へないではゐられなかつた。彼れはもう喰ひ殺されるものと觀念してゐた牡獅子が彼れを殺さなかつたのみならず、一種の友として同棲するやうになつたことが不思議であると思つてゐるのに、今またその獅子のために荒き禿鷹の嘴から逃れることが出來たのは、たゞ遇然の事とは彼れには思はれないで、自分の生命に對しては確に神か主イ

エス、キリストかの加護があるものと信じられて來た。

彼れは牡獅子の鬣を撫でゝやると、獅子は長々と寢た。彼れが獅子の體ぢうを撫でゝやると、獅子は仰向けになり、四本の脚をちゞめ、喉をごろ〳〵と鳴らせて悅んだ。その內に獅子は何物かの匂ひか音かを聞きつけたものか、急に飛び起きて全力を上げて駈け出して、姿を岩蔭に消してしまつた。サウロは揶子の樹の下に日光を避けて、石で叩き落した揶子の實の乳のやうな汁を吸つた。それから彼れは眠氣を催したので、彼れと牡獅子と共に棲む洞穴の奧に入つて、ごろりと寢ころんで目を閉ぢて眠らうとした。けれども今日に限つて彼れは眠いのに眠られないので、傷ついた獸物のやうにころげ廻つてゐると、頭の中に蟲でもゐるのか、金屬的の微かな鳴りを始めて來た。彼れは自分ながら不思議に思ふて耳を澄まして聞いてゐると、蟲の鳴き聲が今度は獸物のうなるやうな大きな音になつて來たので、彼れは頭を破つて中からその獸物が飛び出しはしないかといふ恐れを生じて、しつかと兩腕で自分の頭を抱きしめた。しかるにいつの間にか頭の中からその獸物が拔け出したのか、今度は體の外、すなはち洞穴の奧の方から聞えて來たが、その聲は獸物でなくて蜜蜂が分房をやる時の騷然たるうなりの音のやうである。彼れは頭に卷いた二本の腕をといて、大地にその手を突き、音のする方へ體を向けて獸物のごとき形で、その聲が何んであるかを聞き分けよう

とした。するとその雜然たる音の中に一つだけ別な音が聞えるが、その別な音が次第に他の雜音に打勝つて次第に明かになつて來た。そしてその音は確に壯重な人の聲であることがわかつて來たので、彼れはそれが何を言つてゐるのかを聞きとらうと熱心に傾聽した。彼れは漸くそれがわかつた。それは同じ言葉をくり返してゐるのだ。

『サウロよ、歸れ、サウロよ、歸れ』といふことを繰りかへしてゐるのだ。

これを聞き得た彼れは地上に己が身をばつたり投げ出し、兩手を握りしめて高く捧げて、

『おゝ、主よ、歸れとはダマスコですか、エルサレムですか、歸ります、歸ります。……けれど私は歸りたくても歸られません。あの女、ナホミをどうすればよいのですか、彼女のことに氣がつくと、體の中が急に苦しくなつて來ます、彼女をどうすればよいか、それが定らない內は歸りたくても歸られません。おゝ、主よ、どうぞ私に智慧をお授けください、あなたのお指圖には何んでも從ひます』と言つて、その返事を待つた。

すると今まで彼れに『サウロよ、歸れ、サウロよ、歸れ』と聞えた人の聲が今度は、

『見ならへ、吾れに、見ならへ、吾れに』と言ふ聲となつて聞えた。

彼れはその聲を聞いて考へた。彼れが考へてゐる內にばつたりと奧の聲はやんだ。彼れは『もう主

は去つた』と思つた。『吾れに見ならへとは何を見ならふのか』と彼れは主イエスの此世に於てなしたことの自分で見聞し得てゐたものを思出した。問題は自分の近親や戀人や女などの關係であるのだから、してみるとイエスは自分の母を捨て、イエスを戀ひ慕ふてゐたと謂はれてゐるマクダラのマリアを捨てゝ、主は目指す道に進まれたといふことに氣のついたサウロは、

『さうだ、おれもナホミなんか捨てゝ、主の福音を萬國の民に宣べ傳へねばならぬのだ』と彼れの心に言つて、

『おゝ、主よ、私はわかりました、私が今まで迷つてゐましたのは、心の力が弱いせいではなかつたのです、智慧がなくて、彼女に對して如何なる態度をとるべきかを知らなかつたからであります。今あなたからその道を示して頂きました、それを實行することはいと易いことであります、私には主の聖靈が働いてゐます。おゝ、感謝いたします』と言つた。

彼れはダマスコへ行かう、それからエルサレムへ出て、主の使徒によつて公然と自分も使徒であることを認めてもらはねばならぬ、おれは彼女から逃げ隱れるやうなことをしては卑怯である、彼女に會つて、自分が主イエスの使徒であつて婦人なんかと關係してはゐられないといふことを宣言し、自分は昔のサウロではなく、新に生れ返つた主イエスの使徒であるから、サウロとの戀はサウ

ロが死んだと同時に無くなつたものであるといふことを彼女に納得させるのだ。……かう心を定めて來た彼れは、サウロが死んで新に生返つたものとすれば、名前を別につけねばならぬといふことに氣がついて、あれか是れかと思案してゐると、また彼れの頭の中で蟲が鳴くやうな聲がして來たので、彼れはまた主イエスから啓示があるものと信じて耳を傾けた。その聲は、

『パウロよ、いそげ、パウロよ、いそげ』と言つてゐるやうに彼れは聞えた。

彼れは立ち上つて『ようし、おれの名はパウロだぞ』と心に言つて洞穴の外へ出た。その時に彼れの友人の獅子は口に何物かを啣へて歸つて來た。

（十二）

新にパウロとなつたタルソのサウロは日に燒けた銅色をした肌を現し、腰にぼろを卷いて、肋骨が一本々々に見える痩せ衰えた體に生々として燃える焔のやうな熾んな精神を充たしてダマスコに入り、アナニアの玄關に立つた。それが下僕によつて『鬼につかれた男が來ました』と主人アナニアに傳へられた。アナニアはそれを聞いて『もしやサウロが歸へつて來たのではないか』と直感されたので、急いで出て見たが、玄關に立つてゐる異樣な裸體の男をどうしても、あの偉丈夫で好

男子であるタルソのサウロとは思はれなかつたので、

『お前は誰か』と嚴しく問ふた。

『私はパウロだ、主イエスの福音を宣べ傳へる使徒パウロである。前にはタルソのサウロと言つた者だ、此家にゐるナホミといふ婦人に面會し、且つ貴殿アナニア殿に、私が使徒パウロとなつた悅びをお知らせ申すために來たのだ』とパウロは兩腕を胸元で組んで言つた。

『おゝ、その聲はサウロだ、サウロだ、よく歸つて來てくだすつた、ナホミ殿が待ち焦れてゐられる、よく歸つて來られた。私はナホミ殿に、必ずサウロ殿は歸つて來られるからと言ひ慰めてゐた。果して歸つて來た。さあ奥へ、ナホミ殿にお會ひください』とアナニアは言つて、パウロを抱いて口づけの挨拶をした。

ナホミは自分の姿を見たサウロが鬼につかれた者のゝやうになつて逃げ去つたので、もう再び會ふことの出來ないもの、サウロは永久に自分から逃げ去つたものと思ひ込み、全く悲しみの底に沈み込んでしまつたが、一人の男のために自分の一生涯を駄目にしてしまふことの馬鹿々々しさに氣がつき、去つた彼を追ふのは愚痴であると知り、自分は自分で他に生きかへる道を講じねばならぬと考へて、自分の周圍を見まはすと、その目には主人のアナニアの善良で高雅な姿が入つた。彼女は

このアナニアによつて再び自分が生きかへられるやうな氣になり、それからアナニアを見ると心に悅びが微かながら次第に湧いて來るのを感じた。彼女はサウロの行爲をつくづくと考へるに到つて、男といふものは自分自身の都合ばかりを考へて、男の行爲のために如何に處女の人間一生の浮沈がそれに關係するかといふことを少しも思慮の中に入れず、自分が生きるためには女一人ぐらゐは蟲か石ころかのやうに捨てゝ顧みないものだ、男がさうなら此方も此方だと思ふやうになつた。けれどもアナニアは彼女を氣の毒に感じて『必ずサウロ殿は再び歸つて來るに違ひない』と言ひ慰めてゐるので、彼女はまた一圖にサウロが自分を捨てゝしまつたものと思ひ込むのは早すぎるかも知れぬと考へなほしても見たりしてゐた。そこへ『サウロ樣がお歸りなさいました、こちらの部屋でございます』と下婢の案内したので、彼女は驚きと悅びとが全身を慄はし、少しでもサウロに叛く不貞の心を起したことを濟まないと耻ぢ入つて、身なりを整へて會てサウロに會つた同じ部屋によろめくやうに歩いて入つて行つた。そこには好男子のサウロの代りに枯れた樹のやうな眞裸の男が突つ立つてゐたので、彼女は『あつ』と微に叫んで倒れようとして、柱につかまつて身を辛じて支へた。

『ナホミよ、私は主イエスの使徒パウロである、前にはサウロと言つて、御身の良人と定められた

男であつたが、そのタルソのサウロは今や死んで、使徒パウロとなつて生き返つたのだ。私は主イエスの福音を宣べ傳へる使徒パウロである。主イエスは萬民のために母を捨て女を捨てた、私は主イエスのために女一人くらゐは捨てねばならぬ。御身は御身で忠實な主イエスの下婢となれ。私はこれから萬國に遍歷して主イエスの福音を宣べ傳へねばならぬ』と言ひ終るや、棒が動くやうに眞直に動いて、ナホミが避けた入口を通つて部屋の外に出て、それからアナニアには何んにも言はず、市中に走り出た。

主人アナニアは床の上に倒れ伏したナホミを助け起して次の部屋の寢臺に寢せ、

『ナホミ樣、お待ちなされ、私はこれからサウロ殿の跡を追ふて、何をするのか見て參りますから、氣を確にして……』と彼は目で柔和な溫い心を見せた。

彼女は上體を起して、アナニアの右の腕に縋り、

『あなた』と言つたきり、顏をその腕に伏せたが、アナニアは彼女がサウロのことを賴む心で、そんなことをするものだと思つて、

『心配なさるな、私が連れもどして來ますから』と言ひ慰めて、彼女を再び寢せて去つた。

イエスの徒に對するダマスコ市民の態度は此時には羅馬から派遣されてゐる總督の意を體したもの

か、異邦の邪宗として、また羅馬の總督の權に叛くものとして、それに反對するの形勢を示し、或は迫害する傾きがあるので、多くの信徒は四方に流浪したが、アナニアだけは他に市民から大なる尊敬を受けてゐたので『旦那がなぜあんな神を拜するのか、困つたもんだ』と言ふくらゐで、彼れをどう斯うしようといふ樣子はなかつた。

使徒パウロはそんな形勢であるとは知らず、以前のやうにダマスコはイエスの信徒が澤山ゐるものと思ひ込み、市の中央にある會堂の中に入つて行つた。市民は裸體の骨と皮ばかりの黑光りのする異樣な男が會堂の中へ入つて行つたので、吾れも〳〵とその會堂へ押しかけて忽ちに會堂は人で一ぱいになつた。使徒パウロは高座の講壇に立つて强い聲で說き出した。

『お前達よ、おれはイエス、キリストの使徒パウロである、おれが說く主イエス、キリストの福音を聞け。世の中に正しい人は無い、一人も無い、誠の神を知る者が何處にゐるか、みんな心は曲つてよこしまとなり、善をなす者は一人もない。その喉は破れた墓、その舌は僞りを言ひ、その唇は蝮の毒を持ち、その口は呪ひと苦きとに滿ち、その足は汚れた血に染つて彼等は平和な道を知らず、その前に誠の神の在るのを見ることが出來ずにゐる。故に律法を守る力もない、お前達の中で律法を行ひ得る者は一人もない、律法があるために罪があり、律法を守り得ないお前達

はみんな罪人である。その罪人たるお前達をこの律法の中から救ひ出して、誠の神の前に正しい者となり得る道は開かれた。即ちイエス、キリストを信ずることによつて、お前達はみんな救はれるのだ。神はその惠みをイエス、キリストの信者に賜ふ約束をその子イエス、キリストによつてなされた。お前達は律法によつてみんな罪人となり、神から榮えを受けることが出來ないのが、只イエス、キリストの十字架の死の贖によつて神の惠を受け、何んの功績もないのに正しい者とせられるのだ。罪は律法が立てられたから生じたので、律法がなければ罪もないのだ。人間の先祖たるアダムは禁制の木の果を食つてその律法を破つたので罪はそこから生じたのだ。一人の罪から人間の罪が生ずるならば、一つの義からすべての人間が義とせられて命を得ることも出來る。即ちイエス、キリストの一つの義によつて吾れ〳〵人間みんなは義とせられるのだ。イエス、キリストは死によつて律法の總てを成就してしまつたのだから、彼れを信ずる吾れ〳〵には最早律法の束縛はないのだ。良人のある女は律法のために良人の生きてゐる間はそれに束縛されてゐるけれども、良人が死ねばその律法の束縛から釋されて他の男の妻となることが出來る。故に良人が生きてゐる內に他の男に會へば淫婦と言はれるが、良人が死んで律法から釋されゝば他の男に行つても淫婦とは言はれない。それと同じく、お前達よ、吾れ〳〵はイエス、キリストの

肉體と共に律法に就て死んだもので、今は即ち死から蘇へりたまふたキリストによつて律法から釋されたのだ。吾れ〳〵は最早古い義文によつて支配されず、主イエス、キリストの新しい靈によつて生きてゐるものだ』

使徒パウロが神興の狀態に入つて說いてゐると、入口から群衆が騷ぎ出して來た。それは總督の命によつて、ナザレのイエスの事を會堂に於て宣傳する男を捕縛するために捕吏が出張して來たので、群衆がそれに加勢して騷ぎ立つてゐるのだ。使徒パウロはそんなことに頓着せず盛んに絕叫してゐるのを、絕えず彼れの身邊にゐて注意してゐたアナニアは數人のアナニアに味方してゐる者の助けを借りて、彼れを辛じて救ひ出し、家に連れもどした。彼れは再び飛出さうとしたが、アナニアの『主のために自愛せねばならぬ』と言ふ言葉が耳に入ると、初めて彼れは都エルサレムに行くまでは大切な體だと考へて、ダマスコから逃亡することにした。アナニアは下僕を遣して市中の樣子を偵察せしめたが、その報告によると、市の城門といふ城門はすつかり閉ぢられ、捕吏はアナニアの居所を搜索しようとしてゐるとのことに、アナニアは一策を案出し、彼れの二階の突き出た窓は城壁の上に出てゐるので、その窓からサウロを籠に入れて三四人の下僕に手傳はせ、長い綱をつけて吊り下して城壁外に無事に出してやつた。彼れが籠に乘つて窓から出る時に、ナホミは最後の

一瞥を彼れに與へたけれども、パウロたるサウロはそれを冷たく退けてしまつた。彼れが城壁外の地上に下り立つて別れの挨拶をアナニアに向けた時に、窓から見下したナホミの眼には男の自分勝手な振舞を未來永却怨むがごとき焰が燃え立つてゐた。パウロはその眼をいそいで避けた。

（十三）

アナニアは都エルサレムに逃げて行く使徒パウロのために新しい着物とサマリアのシケムにゐるバラバにあてた紹介狀とを與へた。この紹介狀は、タルソのサウロが悔い改めて主イエス、キリストの信者となり、主の思召しによつてパウロといふ使徒となつたこと、アナニアの手によつて洗禮を施されたものであることの事實である證人になつて、エルサレムにゐる使徒ペテロに此パウロを引合せてやつてくれといふ、アナニアからバラバへの依賴であるのだ。

使徒パウロにはイエス信徒大征討の使命を帶びて馬乘いさましくダマスコに駈けた道を、今度は主イエスの福音を傳へるためにエサレムに登ることの奇緣に驚きながら脚を早めて歩いた。彼れはナホミを捨てることは容易ことだと思ひ、また實際に容易に捨て去つたが、それは形の上に於ては容易に捨て去つたやうに見えてはゐるが、彼れの心の中には彼女がまだ去つてゐなかつた。彼れは

日中歩き、夜中は宿々に汨つて眠るが、その起きてゐる時、眠つてゐる時にも、アナニアの二階の窓なら自分を見下したナホミの怨めしさうな眼が絶えず彼れに付いて離れず、彼れの心を物狂はしくさせるまでに彼れの心に迫つて追ひ廻してゐるのである。

彼れは一女子の眼のために苦しめられる自分を實に腑甲斐ないものとして自分ながら口惜しくてたまらないのである。彼れはガリラヤ湖畔のテベリアに汨つた夜、寢床の上に體を横にして、胴のまん中を猛鳥に喰ひ破られた蛇のごとくに體をごろ〳〵のた打ち廻はらせた。彼れはタルソにゐた時からの自分の半生を顧みた。幼少の頃から孤獨に惱んだこと、戀に惱んだこと、ケリアザルのために戀を拒絶された惱みのこと、それから今日に到る求道のための惱みを思ひやつた。そしてイエス、キリストによつた今に於ては最早迷ひや惱みがないものと考へてゐたのに、今になつても肉體の罪は消え去らないで、絶えず肉體が魂を苦しめてゐると感じた彼れは、イエス、キリストが自分を捨てたのではないかと思ひ惑つてみたり、イエス、キリストそのものを疑ひ迷つてみたりした。彼れはイエスを疑つて來ると、自分の生涯がめちや〳〵になつてしまふやうな、恐ろしい感じが體全體を石のごとく冷くするやうに覺え、前途が眞暗になつて、どうすればよいかわからなくなるので、これだけは放してはならぬと、溺れる者が木の根一本に縋るがやうに『イエスはキリストだ、

イエスはキリストだ』といふ觀念を一生懸命に掴んで、それを放すまいとして額からたら〳〵汗を流して體に力を入れた。

『あゝ、おれは惱めるものだ、あゝ、この死の體からおれを救ふものは誰だ、誰だ』と叫んで寢臺の上をころげ廻つたので、そこから床の上にどしんと落ちた。

彼れは床の上に落ちる瞬間に、

『おれは何を言つてゐるのだ、この罪の肉體からおれを救出したものはイエス、キリストではないか、もうおれは肉體の罪のために苦しむやうなことがあらう筈がない』といふ言葉が自分の心の中にあつた。

彼れは翌日からはさつぱりした心持になり、全くタルソのサウロたる過去から自分を脱却し得、使徒パウロとして新に復活した使徒パウロとしてサマリヤ街道を進み、シケムにバラパを尋ねて、アナニアの紹介狀を示し、バラパの同道を得て都エルサレムに到着し、早速ベタニヤ村に新しく出來た全クリスチヤンの教會の本元となるべき教會堂に使徒ペテロ以下の人々に面會して、自分が使徒パウロとなつたことを告白し、バラバに於てそれが證明された。此處に於て使徒ペテロはパウロを神の前に立たせて、使徒たるべきことを多くの信者、役員などに表示した。

使徒パウロは此處に於て、故郷タルソを振り出しとして地中海の沿岸を西は羅馬から西班牙の果に到るまで廣くキリストの福音を宣べ傳へるために出發することを申出た。彼れは使徒ペテロ等が異邦の地に傳道せず、割禮を施された者にだけしか洗禮を施さないものと思ふたので、異邦の地に福音を傳ひ、割禮を施されない異邦人にも洗禮を授けてやるのは吾れのほかに無い、主イエス、キリストはそのために吾れを使徒の一人にお加へになつたのだと信じた。そして彼れが都エルサレムに於いて一日も傳道を試みないで直ぐに異邦の地に出發することにしたのは、彼れがイエスの信徒を迫害したときに、妻を失ひ、良人を失ひ、親を失ひ、子を失ひ、兄弟姉妹を失つた信徒が今や使徒ペテロの周圍に澤山にゐるが、彼等は怨みかさなるタルソのサウロの姿を眼前に置いて彼れに何事か復讐してやらうとするやうな形跡が彼れには見えたからである。その上に猶ほ彼れが此處にとゞまるを不快に感じたのは使徒ペテロが自分の權力、人望や位置を使徒パウロの出現によつて侵害されはしないかといふところから嫉妬を起してゐるやうな風が彼れには見えたからである。

使徒パウロの出現はエルレムの内外に旋風のごとく人心を襲撃したのだ。あのイエスの徒に對してヘロデ大王あつて以來の大虐殺を行つた恐しいサウロが今度は反對にイエスの信徒となつて現れ

たからには、必ずやイエスを信じない者に對して大迫害をなすに違ひないといふ風說が四方に傳播し、祭司やパリサイ派や學者連中の問題にもなつて、彼等は政權を借りてサウロを此世から失はしめようと謀つた。斯の如く彼れは内部からも外部からも敵を受けてゐる形になつた。けれどもまた一方に於ては彼れの大いなる力を認めて、教會のために彼れを迎へる者もあつた。

ミヅパのサルモンもその一人であつて、革師たる彼れは一方に於てはミヅパ全村の信者の長を以て任じてゐた。彼れの信仰とその力とによつて、全村の民が殆どイエスの教會員となつてゐたが、彼れはどうかして全村を一人もあまさずみんな教會員にして、ミヅパを一つの神の國にしたいものだと考へてゐた。そこへタルソのサウロが使徒パウロとなつて現れたことを聞いたので、彼れの力によつてその神國を建設したいものだともくろんだ。無論それは自分がその神國の小さな王となれることを自分では氣がつかぬけれど、それを欲して悅んでゐるのだ。彼れはベタニヤに出かけて來て、使徒ペテロに面會して、その事を申込んだ。

『どうか、ペテロ様、あなた方をお招ぎいたしたうございますから、使徒をみんなお連れ申してお出でを願ひます、ミヅパの信者達はあなた方のお姿を見、お言葉を聞きたいと言つて、私を責めたてるのでございます、どうか哀れな小羊のために憐れみをたれてください』とペテロに言

つて、傍のタルソのサウロを見て、

『私はミヅパの革師サルモンでございます、どうぞ是非お出でを願ひます』と言つた。

（十四）

ミツパの革師サルモンが使徒を招いで、全村に一人も異端者のないやうにしようと心ざしたことの一つの原因には、自分の仕事場に市場から自分の好きで雇入れたケリオテのユダがゐたからである。彼れは雇人や村の人の信者達から『あんな奴を生かして置くのはイエス様に對してよくない』と言ふ、ユダを排斥する言葉を聞かされるけれども、彼れにはクリスヤンたる以外に持つて生れた男氣といふやうなものがあつて、その心が『吾れは貧しき者、病める者のために來たのだ』といふ主イエスの言葉を良い口實として、ユダを保護してやる氣になつてゐた。

彼れは市場でユダを見てから、それがイスカリオテのユダであると知らぬ前に、この男は氣に入つたと思つて特に自分が雇入れることにしたのであるから、それがイスカリオテのユダであると名乗られても彼れを憎む氣は起らなかつたので、何んとかユダをして主イエスにその罪を悔い改めさせて、反對に彼れが立派な使徒にでもなつてくれたら嬉しいがなと日頃から考へてゐたのだ。それ

で或日サルモンは彼れを呼んで言つたことがあつた。

『お前は悔い改めて主イエスの信者とならうとは思はないか、今のやうだとお前は人に憎まれて居場所がなくなつてしまふぞ』

ケリオテのユダは主人の親切を感謝した。それで彼れは主人に對して、納得の行くように自分の意見を吐く氣になつた。

『お前さんはクリスチヤンをイエスの信者と思つてゐるのかね。それは信ずる者は信者だらうが、イエスのほんたうのところを知らないで、間違つて信じてゐれば、それはつまり嘘の信者だよ。お前さん達は生きたイエスに會つて、その言ふ言葉を聞いたり、行ひを見たりしたので信じてゐるのぢやあるまい。お前さん達は使徒ペテロなんかの言ふ事を信じてゐるのだらうが、さうすりやお前さん達はイエスを信じてゐるのではなくて、使徒ペテロなどが造つた「イエスの教」を信じてゐるのだよ。ペテロなんかゞイエスのほんたうの事を知つてたまるものかね。あの男なんか耳があつてもつんぼ同様、目があつても盲同様だつたよ、何がわかるもんかね。お前さん達はおれがイエスを信じてゐないと思つてゐるんだらうが、おれもイエスを信じてゐるよ、けれどもそれはペテロなんかが見てゐるイエスとは大變ちがつてゐる。だからお前さん達のゝは「ペテ

ロのイエスの教」を信じてゐるのだ、それだものおれがお前さん達の仲間に入られやしないぢやないか』

革師サルモンはこれを聞いて、すつかり驚いてしまつた。自分達がイエスを直接信じてゐるのではなくて、使徒ペテロの「イエスの教」を信じてゐるのだと、ユダに言はれて見ると、なるほど左樣に違ひないのだから、大にうろたへてしまつた。

『ぢや、お前はイエスをどんなお方だと思つてゐるんだね』と問ふてみた。

『それか、それはイエスはキリストでなんかなくつて、只の偉い人間さ、「おれはキリストだ」と信じ込んで死んだ人でしかないよ。ぢやイエスといふ人はどこに偉いところがあつたかといふに、それは二つのことをしたんだ。一つはね、神樣といふものに對する考へ方を變へたことだよ、今までの神樣は良い者を愛するが、惡い者を憎んで、一寸とでも偶像を拜すると直ぐ妬んで何千人でも人間を殺した馬鹿々々しい神樣だつたのを、イエスは「神といふものはそんなもんぢやない、良い者、惡い者の區別なくみんな愛する、罪を犯しても罰しない神樣だ」といふことにしたのだ。それから第二にはね、キリストといふものゝ考へ方も變へたのだ。キリストは王國を造つて王となるものだと、今までのイスラエル人は信じて待つてゐる。けれどもキリストといふ

ものはそんなもんぢやない、キリストは一人々々の心の中に生れて、一人々々の心に愛が生じ、お互に良い人、惡い人にかゝはらず愛し合ふのだ、人の心の中に愛が生じるところにキリストの神國が出來るのだ、そしてその人達の集りがキリストの神國なのだ、神國は目に見えるのでもなければ、多勢の人が集るところでもない、お前さんの心の中にキリストが生き返つて愛の心になれば、お前さんの心の中に神國ができたのだ。そのほかにキリストだの神國、王國などがあるものかね』

ユダの言葉に革師サルモンは益々奇異の思ひをした。彼れは、

『そんならお前、主イエスの十字架の死はどうしたわけだね、あの尊い死を?』と問ふた。

『あれか、あれは何んでもないさ、たゞ時の祭司等がイエスを憎んで殺したまでゞ、イエスは殺されたまでさ。けれどイエスが死ぬ時の心持にはいゝ所があるよ、「おれは萬民のために死ぬんだ」といふその心だ、人間がみんな斯ういふ心で人々を愛し合ふやうになれば世の中はいゝものになり、人間も良くなるんだ。だが人間はなか〳〵さうはいかないよ、しかしだん〳〵さうなるやうになりたいものだといふ見當だけは其處に置けばよいのだ。イエスだつて萬民を愛するなんかと言つてゐて、お母さんや兄弟を捨て、マクダラのマリアを捨て、おれを憎んだ。けれどイエ

スも人間だからね、あたりまへのことだよ。それをおれが怨んだり、憎んだり、嘲つたりしたのはおれの間違ひさ。おれはイエスを神様かと思ひ込んでゐたものだから憎んだのだ。イエスだつて只の人間さ、それがわかつたから今ではイエスを氣の毒だと思つてゐるよ』

革師サルモンは是等のユダの言葉を聞いて、これはとても自分の力には及ばない、とんでも無いことを言つてゐる、おれはえらい者を背負ひ込んだぞと恐れをなしてゐたが、しかしユダを追出す氣にもなれずにゐたので、サウロが使徒パウロとなつて現れたことを聞き込み、その偉大なパウロの力を借りて、ユダをイエスの信徒にしてやりたいとも考へたので、ベタニアまで使徒を迎へに行つたのである。

（十五）

使徒ペテロは使徒パウロ及びサマリアのバラバと共に他の使徒を引連れて、ミヅパの革師サルモンの家に招待を受けて行つた。パウロは此ミヅパの招待が濟むと、その足で直ぐ傳道の旅行に出立することになつた。革師サルモンはクリスチヤンの首領株を全部自分の庭に招ぐことが出來たので、村民に對して誇らしく鼻をうごめかしてゐた。饗宴は廣い庭を清めてそこに開かれた。彼れは

先づ使徒に向つて臨場の光榮を感謝した後で、

『使徒様方のお力を持ちまして、ミヅパ全村は殆どクリスチヤンでない者はございませんが、今回の御出張によりまして、一人ものこらず主イエスの信者になりますよう、みんなに尊いお言葉を賜つて頂きたいのでございます。中でも一人是非あなた方のお力を持ちまして、その石のごときかたくなの心を打碎いて、主の下僕となるやうにして頂きたいのがございます。この男がもし主の忠僕となることが出來ますれば、私一個の悦びごときものではなく、主御自身も非常にお悦びになり、主の御事業も完成されるものだと信じますので……』と言ふや、使徒ペテロは鷹が餌を見つけたやうに首をのばし、目を光らせて、

『その男は誰れだ、何處にゐる』と問ふた。

革師サルモンは此時ふと氣がついた。これは飛んでもないことをしたんぢやないか、もしおれがイスカリオテのユダを保護してゐたなんかといふことに思はれて、ペテロのためにおれまで殺されるやうな目に遭はされはしないだらうかといふ恐れを、今のペテロの態度から暗示されたので、ぐづ〳〵して返事をしなかつた。

『おい、その男は誰れだ、どこにゐる、此處へ連れて來たらよからう、おれが悔い改めさせてや

るから、そんな事はざうさもないことだ』とペテロはサルモンに迫つた。

革師サルモンは恐れ入つて、平身低頭して、

『それは、その、不屈至極な奴で、殺しても猶ほ足りないやうな惡魔でして、その、あなた方が能く御存じの、……男です、……そのう、イスカリオテで、え、イスカリオテでございます』と漸く言ふことが出來た。

『何んだと？　イスカリオテ？　イスカリオテと言へば、あのイスカリオテのユダか、え、ユダか？』とペテロは體を前に進ませて問ひ寄つた。

『はい、左様でございます』

『へえ、まだあの男は生きてゐたのか、おれはもう血へどでも吐いて死んでしまひやがつたかと思つてゐた。主イエスはおれ達に到途ユダをお渡しなされた。主はおれ達にユダをさばけとて、おれ達にお渡しなされたのだ。おい、サルモン、早くそのユダを此處へ引ずり出せ、さあ、早く』とペテロは急ぎ立て、勇み悅んだ。

多くの使徒の中にも動搖が生じた。使徒パウロはこれは良いところでユダに再會が出來る、ダマスコ行の途中アバルヘテマアカの宿で會つた時には、ユダに言ひまくられたが、今度はあの野郎を

一つ押へつけてやらうと、彼れが引張り出されて來るのを手ぐすねひいて待つた。ケリオテのユダは主人サルモンの計劃を知つてゐて、使徒ペテロ、パウロに會ふことを寧ろ待ち望んだ。彼れは最後の闘ひを彼等と試み、イエスの正統の志を一人でもよいから知らせてやりたい、そのために自分は使徒ペテロなどのために惡魔と見られて殺されてもかまはぬ、主イエスは恐れず十字架の上に立たれた、おれも彼等の前に恐れず立つてやるぞと覺悟を定めて、サルモンによつて呼び入れられるのを待つてゐた。

遂に使徒ペテロと曾て使徒であつたユダとは、イエスが捕へられる最後の夜に會つたきり、五年の今日まで憎み合ひながら一度も會はなかつたのが、初めて此處に對面することになつた。

『おい、ユダ、イスカリオテ、貴様はまだ生きてゐたのか、よくも主の怒りに觸れないでゐられたもんだな、主はいよ〳〵今日といふ今日、貴様をさばきたまふのだぞ。もうイエス、キリストの偉大なる力を見たらう？　このクリスチャンの全盛を見た上は、貴様を此世から地獄の底に叩つ込んでもよい時機が來たのだ。貴様はこの神國の光榮の有様を地獄に行つてサタンに報告しろ。此世に最早サタンの出る所はないと言へ』と使徒ペテロは罵つて、他の者に彼れを處刑することを命じようとする様子を示した。

是れを見た使徒パウロは、

『ペテロ殿、彼れを處刑する前に一應イエスを祭司に渡した彼れの辯明を聞きませう、正當に罪に服した後に處刑せしめねばなりません』と注意した。

『彼れに何んの辯解があるもんですか、彼れは主のお金を使ひ込んで精算ができないもんだから、祭司にイエスを銀三十枚で賣つたのですよ』と使徒ペテロは吐き出すやうに言つた。

『いや、それでも盗人にも理屈があるさうですから、彼れの辯明を兎に角聞きませう』と使徒パウロはペテロに言つて、それから昂然と頭を上げて使徒達を睨むやうに眺めてゐるケリオテのユダの方に向き、

『イスカリオテのユダ、主のさばきを受ける前に貴様の辯明を聞かう。なぜ貴様は主イエスを祭司に渡す手引をしたか、なぜ銀三十枚で賣つたか』と訊問を始めた。

ユダは大きな明瞭な聲で答へた。

『おれはお金が欲しかつたからイエスを銀三十枚で賣ることを祭司の長に言つた。しかしそれは卑怯なことであることを知つたから、銀三十枚は返した。けれどもイエスを渡す手引はしてやつた、それはイエスが憎かつたから、神様も憎かつた、使徒ペテロその他の人達がみんな憎かつた

から、さまあ見やがれと言つてやつたんだよ。しかしまだほかに考へがあつたんだが、お前たちに言つたつてわかりやしないよ、おれがイエスを渡す手引をしたことを憎んでゐるやうな根性で何がわかるもんか』

使徒ペテロは怒りに耐へずどなり出した。

『何をぬかしやがる、貴様が主イエスを渡したことは惡魔のすることだ、叩つ殺してもあきたりない奴だ、何がわからんことがあるもんか』

ユダは白い齒を出してだまつて笑つてから、それに應じて答へた。

『お前たちはイエスの死を主自身が前から計畫したものであると信じてゐるんだらう？　主の死によつてお前たち及び萬民が救はれたんだと信じてゐるんだらう？　主イエスがキリストであることが證明されたんだらう？　そんなら若しおれが祭司にイエスを手引しなかつたら、イエスは死ぬ時がなかつたぢやないか、つまりおれのおかげで主イエスは殺されることが出來たんぢやないか。おれはイエスを手渡したことを辯護するわけで言ふのぢやない、お前たちが主イエスの死を大變に價値のあるものだと言つてゐるから、そんならその死はイスカリオテのユダのおかげではないかとおれは言ふんだぞ。一杯の水のために生き返つてゐながら、その水を惡い水だとお前

たちは言ふかね』

使徒ペテロは答へることが出來なかつた。使徒パウロは代つてユダに應酬した。

『カイザリヤからエルサレムへ運ぶ金一萬タラントを賊がカイザリヤから奪ひとつてエルサレムへ持つて來た、金は運ばれて都合は好かつたけれど、賊は矢張り賊を働いたので、その罪は宥すべきものではない』

ユダは『何をぬかしやがる』と言ふやうな顏をしてそれに答へた。

『賊が盜んだお金をお前たちが使へばそれは盜人の次に位する罪だぞ、おれがイエスを渡したことが悪いことなら、イエスの死を一枚看板にして自分達の勢力を張るお前達こそはつまりけいづ買だぞ』

使徒ペテロは躍り上つてどなつた。

『この悪魔を石で打殺せ』

他の使徒は騷ぎ出した。使徒パウロはそれを押へて、

『待つた、まだ聞くことがある』と言つて、

『おい、ユダ、貴樣はイエスをキリストだと思はないのか』と問ふた。

ユダは額の汗を拳でこすつて答へた。

『イエスは只の人間だ、おれは初めイエスを神の子だと思つて、十字架にイエスはかゝつても死にはしまい、何か偉いことが始まるものと思つてゐたのに、イエスはくづ〳〵に死んでしまつた、それでおれはイエスも矢張り只の人間だつてことがわかつたんだ。おい、お前たち能く考へて見ろ、もしイエスがお前たちの言ふキリストであるなら、十字架の死によつてそのキリストたる事業を遂げたことになるのだが、して見るとその十字架の死はイスカリオテのユダを罪人として、その罪の力を借りて出來たものだ。自分が手柄を現すために人間一人を罪に落し、その罪のおかげで自分の事を成就させるのかね。子供が一人ほしいために、お前たちは他人の妻を姦して、その姦淫によつて子供を生み、その子供が神の子であつたからと言つてゐながら、その姦淫を姦淫であるとみとめてゐて何んとも變なことだとは思はないかね。おれのしたことが罪ならイエスの死をキリストの業と思ふのは間違つてゐる。イエスの死をキリストの事業と思ふならおれのしたことを罪惡と思ふのは間違つてゐる。おれはおれのしたことを決して良いことゝは思はないが、そのかはりイエスの死をキリストの事業だとも思はない。イエスの死なんか三文の値打があるものか、イエスの値打はそんなところにあるんぢやないぞ。……』

『この野郎を石で打ち殺せ』と使徒ペテロ再び怒號した。

ユダは屈せず、その怒號を壓するやうにどなつた。

『イエスの値打はお前たちにはわからないんだ、イエスは神の愛を說き、それを求めに求めて死んだのだ。しかしその求める愛は少なくともおれ一人だけにはイエスは悟らせて死んだのだ。お前たちはまだイエスの精神がわからないのか？　神の愛に生きろ、その中にキリストはあるんだ。お前たちはクリスチヤン以外のものを憎み、侮り、迫害する、兄弟姉妹と言つてゐながら、少しの罪を犯したと言つてはその兄弟姉妹を殺したり、破門したりする。お前たちは愛を口にしながら、親や妻を愛さない。お金を口では賤しめて最もお金を欲しがつて、お金のおかげで教會の勢力を張つてゐる　お前たちはイエス、キリストの名を以て世の人々のする惡事を自分達だけは白く塗つた墓のごときものとして飾り、威張つてその惡事を善事のごとく裝ふて行つて得意になつてゐる。お前たちは人を愛することが出來ないで、おれは人を愛してゐるのだと自分の心をごまかしてゐる僞善者だ、お前たちは矢張り僞善者なる學者、パリサイの徒だ』

使徒ペテロは紫色に顏色を變へて、

『そいつの口を閉ぢろ』と首の靜脈をふくらましてどなると、傍にだまつて怒つてゐたサマリヤ

のバラバ、曾てユダの親分であつた彼れはづか〳〵とユダに近寄り、彼れの横面をがんと張り飛ばして、彼れの兩腕を背中の方へねぢ上げ、顎で傍人に指圖をして太い繩で縛り上げてしまつた。

『その樹に縛りつけて、石で打ち殺すんだ』と使徒ペテロは命じた。

『いや、それでは足りない、牛裂きの刑に處してやれ』と使徒パウロは言つた。

ケリオテのユダはイエスの信徒たちのために腰に繩を卷きつけられて、大きなシカモールの樹の上の枝に吊り下げられた。彼れの上體の方が少しく脚の方よりも重かつたので、頭の方を下にして斜めに傾斜して繩のよりのもどるまでくる〳〵と水平に廻轉した。それから二匹の大牛が引出されて、ユダの左右の脚の紳に繩を結びつけ、その各々の一端が二匹の牛の腰にくゝりつけられ、牛はまん中にユダを挾んで彼れに尻を向けて左右に分れて立ち、大き腹を呼吸するたびに搖がしてゐた。牛の二本の尾は蠅を追ふために動かしてユダの足から連なつてゐる繩を打つてゐる。蠅はその尾から逃れて、ユダの垂れてまつ赤になつてゐる顏にとまつて汗を舐めた。ユダは大きな苦痛からは逃げることが出來ないけれど、蠅に舐められる苦痛は除くことが出來るので、顏を振つてその蠅を追つ拂つたが、そんな苦痛ぐらゐを追つ拂つたとてどうして見ようもないやうな顏をしてゐた。その顏には血管が太くふくれて脈を打つてゐるやうに動いてゐる。長い鞭を持つた二人の人間は左

右に分れて、二匹の牛を前にして横腹のところに各々立つた。合圖と共にその鞭を牡牛の尻にあてようとて振り上げて待つてゐる。それまで堅く閉ぢたユダの口はぱくりと開いた。使徒ペテロは鷹のやうな目をぢつとユダにつけた。使徒パウロは眉の間の深い長い皺を一そう深くした。サマリヤのバラバは兩腕を胸のところに組んで鼻の穴を大きくしてゐた。ユダの主人サルモンは落ちつかぬ眼を恐怖のため飛出させてゐた。

『お前たちはイエスの新鮮の血を汚すものだ、お前たちのためにイエスの心は誤り傳へられる、イエスを殺す者こそお前たちだ。お前たちは愛を口にしながら惡を以て惡に報いる者だ』とユダは叫んで眼を閉ぢた。

『打て！』とペテロは命令を發した。

ぴしりと二つの音がして牡牛の尻は叩かれた。二匹の牡牛は互に反對の方向へ二足、三足、前に進んだ。ユダの兩足に連なつてゐる繩はぴんと張り、ユダの脚は左右に廣く開かれ、次に彼れの尻は音を立てゝ割れて、赤い血がさつとほとばしつて彼れの體を塗つた。

『あつ！』とユダの最後の叫びが立つたと共に、右の脚は腰の附け根から離れて、右の牛の腰から續いてゐる繩に引張られて地上に赤い道をつけて十キウビットほど動いた。左の脚はユダの胴體

をつけて赤い傷口を開いて左の牛に引かれて左の方へ動いて行つた。シカモールの樹の下には丸く血がしたゝつて黄色い大地を黑く染めて、ユダの血は大地の底にまで深く深くしみ通つて行つた。彼れの主人のサルモンを始めとして周圍のイエスの信徒はその血を中心としてみんな青い顏を向けてゐた。

（大正十年七月九日起稿、八月廿八日脫稿）

復活

（完）

大正十年十一月十五日印刷
大正十年十一月十八日發行

定價貳圓八十錢

著者　江原小彌太

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
發行者　松野鶴平

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷者　瀧澤一郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　株式會社秀英舍

著作權所有
著者印
隆文館

復活
奥附

發行元　聖書文學會
發賣元　隆文館株式會社
東京市京橋區南二町一丁目
振替貯金口座東京八五番

聖書文學會撰

十字架	山村暮鳥氏 近刊
二人の苦行者	三浦關造氏 近刊
聖痕	高田集藏氏 近刊
洪水	沖野岩三郎氏 近刊

終